

はじめに

障害にかかわるすべての人が IT の活用を期待しているが、情報障害者の地域における社会参加において具体的に効果を上げている事例を知る機会は少ない。また、国情が違う外国の成功事例を我が国の参考にするためには、関係者が極めて具体的に、何をどうすればもっと良くなるかというレベルでの意見交換と合意形成が必要である。

先進技術を世界に誇り、国連障害者権利条約の批准を目指す日本としては、障害者の自立と社会参加の要である情報コミュニケーションにおけるバリアフリーも世界に誇れる水準で実現することを目指すのは当然と言えよう。

そこで、ニーズを知り、外国の先進的な事例の意義も理解できるように工夫して、障害当事者団体、支援者グループ、行政担当者、および関係する学識経験者が一堂に会して日本の国内状況と比較しながら共通理解を広げる国際比較研究を進めて、平成 22 年度概算要求に反映できる情報コミュニケーション支援による障害者自立支援策を提言するための調査研究活動をすすめた。

情報コミュニケーション技術 (ICT) におけるユニバーサルデザインと支援技術を駆使した「地域におけるインクルーシブな情報提供サービス」の構想は、それぞれの地域ごとに存在する資源を活用することを基本とする。その上で、国全体の調整と連動して、誰ひとりとして地域で取り残されることのない情報アクセスの提供が可能になることを目指す。

本報告書が付属 DVD-ROM に収めたデジタル版資料と共に活用されることを期待する。

平成 21 年 3 月

特定非営利活動法人支援技術開発機構

理事長 山 内 繁

目次

1. 調査研究について	3
2. 外国調査研究「海外の地域における情報支援サービスの成功事例」	
①アメリカ事情1	12
ジム・マークス AHEAD(障害のある学生支援センター全米組織)次期会長 「アメリカの高等教育における合理的配慮」	
②アメリカ事情2	21
渡部・テイラー・美香 モンタナ大学障害学生サービス部コーディネーター 「モンタナ大学とミズーラ市周辺における障害者への情報支援」	
③アメリカ視察報告1	24
神山忠 岐阜県立関支援学校教諭 「米国ミズーラ市の情報支援の現場をみて思うこと」	
④アメリカ事情3	27
ジョージ・カーシャー DAISY コンソーシアム事務局、RFB & D(Recording for the Blind & Dyslexic) 「アメリカにおける図書館サービスネットワークとデイジー規格」	
⑤アメリカ視察報告2	31
福井哲也 日本(にっぽん)ライトハウス点字情報技術センター 「米国視察報告～NIMAS 会議と ATIA カンファレンスで考えたこと～」	
⑥アメリカ視察報告3	37
氏間和仁 福岡教育大学教育学部 准教授 「アメリカにおける弱視者支援システムの動向」	
⑦スペイン事情	45
フランシスコ・マルチネス・カルボ スペイン盲人協会図書館館長 「スペインにおけるデイジー」	
⑧フィンランド事情	50
マーク・レイノ セリア図書館IT開発部部長 「フィンランドにおけるデイジー」	
⑨フィリピン事情	53
レイラニ・デビッド フィリピン自閉症協会 「自閉症児のデイジー活用」	

⑩ノルウェー事情.....	58
---------------	----

マイ・リン・ホルト ノルウェーディスレクシア協会青年部理事
アーニー・シルシェブ ノルウェー盲人図書館
「ノルウェーのデイジー利用者たち」

⑪ノルウェー視察報告.....	61
-----------------	----

山中香奈 兵庫県 LD 親の会「たつの子」
濱田麻邑 特定非営利活動法人支援技術開発機構
「ノルウェーのディスレクシア団体の活動」

⑫オランダのデイジー版教科書.....	64
---------------------	----

エドマー・シュイット デディコン(オランダ)

⑬スウェーデンのデイジー版教科書.....	66
-----------------------	----

シェル・ハンソン スウェーデン国立録音点字図書館

⑭欧州視察報告.....	68
--------------	----

野村美佐子 日本障害者リハビリテーション協会情報センター長
「パリ・ストックホルム・オスロ出張報告書」

3. 国内調査研究「我が国の地域における情報支援サービスの成功事例」

⑮北海道 浦河町から.....	74
-----------------	----

浦河べてるの家 (秋山里子、吉田公子、池松麻穂)
「津波避難マニュアルで安心を手に入れた経験の報告」

⑯兵庫県から.....	84
-------------	----

山中香奈 兵庫県 LD 親の会たつの子
「マルチメディアデイジー版教科書の活用」

⑰大阪府から.....	89
-------------	----

山本義久 山本内科小児科
「私の失語症回復とデイジーの活用」

⑱静岡県から.....	92
-------------	----

矢田勝 浜松市立神久呂中学校教諭
「家庭と通級における、学習障害児に対する「読み」の指導：豊かな音読文化の再生に向けて」

1. 調査研究目的

既存の情報支援の枠にとらわれずに障害者の情報支援ニーズを掘り起こし、すべての人にそれぞれの地域で対等な情報アクセスを保障するインクルーシブな情報提供サービスのあり方を明らかにし、その実現のための提言を行うことが調査研究の目的である。具体的には下記4項目の活動を行う。

- (1) 海外における情報支援サービスの成功事例をわかりやすく情報提供する。
- (2) 成功事例を参考にしながら、日本における具体的な地域におけるインクルーシブな情報提供サービスの実効性のある提言を行う。
- (3) 国内外の研究グループのネットワークの形成を促進して、今後の障害者の自立生活を支援する調査研究と実践に寄与する。
- (4) 調査研究の成果は、マルチメディアDAISY版を含むアクセシブルな資料としてインターネットで公開し、知識の共有を進める。

2. 課題とその切迫性

情報アクセスにおける障害の概念は、情報コミュニケーション技術の発展の中で大きく変わりつつある。

活字印刷による出版は、近現代における知識と文化の共有の方法として最も普及し、図書館による体系的な文献の集積と書誌情報の国際的な標準化によって、包括的かつ体系的な知の集積を国境と世代を超えて共有することを可能にした。近現代の文化と科学技術の発展は、このような紙による出版物によって支えられてきた。

しかしながら、総人口の少なくとも10%前後におよぶ人々が様々な理由で、出版物等の視覚で読み解く情報にアクセスできないために、この知識と情報の共有体系から疎外されてきたと考えられる。具体的には、視覚に障害がある人(視覚障害)、視力はあっても視線を制御する脳の機能に問題があって文章を読むことができない人(視機能障害)、先天性の聴覚障害のある人、ディスレクシアやADHDにより文字で記した文章の理解が困難な人、脳性まひや脳梗塞あるいは事故等で上肢の機能に障害があって本を持ちページをめくることが困難な人、知的に障害がある人、脳梗塞や事故で頭を強打して読字障害がある人、紙アレルギーの人、パーキンソン病で本を読むのが困難な人、等々である。

現代社会において知識と情報から疎外されることは、医療、保健福祉、仕事、教育訓練等の生存権に直接関わる深刻な社会的疎外を意味する。情報が必要な時に理解できるかたちで提供されなければ、医療や仕事、教育訓練をはじめとするあらゆる社会参加が困難になり、一人一人の健康で安全な生活が脅かされる。たとえば、各種のインフルエンザに関して、適切に感染を避けつつ過剰な反応による生活の質の低下を避けるためには、地域ごとに提供される様々な掲示や文書を読み理解して、自ら判断することが必須である。

「自由で、事前の情報に基づいた合意」(Free, Prior and Informed Consent: FPIC)は、毎日の生活における個人が責任ある判断をするための原則であり、人々の合意に基づく民主的な社会の根幹である。悪性インフルエンザの感染を避けるための集会の中止や感染の疑いがある場合の自宅待機等は、地域・職場・学校等での時宜を得た情報共有に基づく合意があって初めて機能し、一人一人の命と健康を守ることができる。その意味で、文字等で記された掲示や印刷物の配布だけでは、多くの読むことに障害がある人々の生命と健康

に危険が及ぶ可能性を残すだけでなく、すべての地域住民が協力して初めて達成できる感染の予防という目標の達成が困難になるのである。

情報コミュニケーション技術(ICT)の急速な発展は、デジタル・ディバイドと呼ばれる ICT から疎外される人々を生む反面で、電子出版とネットワークという新しい知識と情報の共有体系を生み出した。国連障害者権利条約は多くの条文を情報アクセスにあてて、すべての障害がある人が、必要な時に(他の人に遅れることなく)、必要なかたち(点字、録音、大活字、手話、字幕、動画、DAISY、図解つき要約等)で、情報を得ることを権利として保障し、そのために、ICT におけるユニバーサルデザインの推進と支援技術の開発の促進による合理的配慮としての ICT を活用した情報アクセス環境の整備による問題解決を要請している。

また、ICT を活用して印刷物の内容と形式をアクセス可能なものにする行為には必ず複製が伴うので、著作権を尊重しつつ知識と情報へのアクセスをすべての人に保障するために、情報アクセスを支援するための技術開発と共に著作権法の整備が不可欠である。

日本においては、世界で最も早く DAISY(Digital Accessible Information System)技術が全国の点字図書館に1990年代末に厚生省予算で導入され、数万タイトルの DAISY 図書がすでに製作されているが、今日まで著作権法の壁が視覚障害以外の読むことが困難な数多くの人々の DAISY 図書の利用を阻んできた。日本に一步遅れて DAISY を導入した諸外国では、DAISY を十分に活用してすべての読むことに障害がある人に対等な情報アクセスを保障する法整備と技術開発が並行して行われ、必要な時に必要な DAISY 図書をオンラインですぐに入手できるサービスが実現している。

幸い、本調査研究事業関係者も含む十年來の各方面への働きかけが実り、本事業の期間中である平成 20 年 9 月に義務教育教科書に関わる著作権法条文(33条)が改正され、すべての読みに障害がある生徒に DAISY 形式を含む「必要な形式」で教科書等を提供できるようになった。更に、平成 22 年 1 月には、教科書と同様の著作権制限を一般図書に広げる著作権法改正(37条等)が予測されており、初めて障害を特定しない「読みに障害がある人々」の情報アクセス権が法律の上で明確に規定されようとしている。

このような障害者の情報アクセス権にかかわる大きな転換点であるというタイミングと、平成 20 年度および 21 年度の補正予算という大きな事業投資が行われる時期であるというタイミングを考慮して、22 年度概算要求に対する提言のみならず、中・長期的な戦略目標を踏まえながらも、切迫した情報ニーズを 21 年度中にも満たすための支援方策を含む具体的な提言が求められている。

3. 調査研究方法

1年間の短期的な調査研究プロジェクトとして特に留意したことは、ICTを活用した情報障害者支援に関する先行研究の成果を十分に活用することと、国連障害者権利条約が保障する合理的配慮を実現するために必要な支援技術開発とユニバーサルデザインの推進とを結合することである。また、特に地域に着目した理由は、情報ニーズが地域社会の言語、文化、社会、経済、歴史、自然等の複雑な要素に依存するが故に、問題解決のための方法と資源もそれぞれの地域に根差した持続的なものでなければならないと考えるからである。この地域に根差すという視点は、それぞれの努力がたこつぼ掘りに陥らずに、有限な資源を効果的に活用するためにグローバルな標準化を推進するための立脚点としても重要である。

(1) 有識者による調査研究委員会を設置し、研究協力者からの聞き取り、調査研究発表等の情報提供を受

け、研究討議を行った。

「インクルーシブ情報提供サービス調査研究委員会名簿」

石川 准 (静岡県立大学)
河村 宏 (国立障害者リハビリテーションセンター研究所)*
神山 忠 (岐阜県立関特別支援学校)
野村美佐子 (財団法人日本障害者リハビリテーション協会)
服部いづみ (NPO法人支援技術開発機構)
濱田麻邑 (NPO法人支援技術開発機構)
山内 繁 (早稲田大学)

*主査

「研究協力者名簿」

岩井和彦 (NPO法人全国視覚障害者情報提供施設協会)、加藤俊和 (NPO法人全国視覚障害者情報提供施設協会)、長谷川貞夫 (桜雲会体表点字研究プロジェクト)、高妻富子 (兵庫県LD親の会「たつの子」)、山中香奈 (兵庫県LD親の会「たつの子」)、井上芳朗 (障害者放送協議会著作権委員会)、二峯紀子 (NPO法人かわり教室)、濱田滋子 (NPO法人奈良デージーの会)、山本義久 (山本内科小児科)、秋山里子 (浦河べてるの家)、吉田公子 (浦河べてるの家)、池松麻穂 (浦河べてるの家)、小野康二 (熊本県聴覚障害者情報提供センター)、渡辺哲也 (国立特別支援教育総合研究所)、北村弥生 (国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所)、殿岡 翼 (障害学生支援センター)、小田浩一 (東京女子大学)、氏間和仁 (福岡教育大学)、山本幹雄 (広島大学)、高橋知音 (信州大学)、水内豊和 (富山大学)、鈴木昌和 (九州大学)、巖淵 守 (東京大学)、小澤 亘 (立命館大学)、広瀬洋子 (放送大学)、Jim Marks (Association of Higher Education and Disability: AHEAD、アメリカ)、Mika Taylor-Watanabe ((University of Montana、アメリカ)、Francisco Martínez Calvo (Spanish National Organization of the Blind: ONCE、スペイン)、Markku Reino (Celia Library、フィンランド)、Kevin Carey (Royal National Institute of the Blind, UK、イギリス)、Richard Orme (Royal National Institute of the Blind, UK、イギリス)、Stephen King (Royal National Institute of the Blind, UK、イギリス)、Lailani David (Autism Society Philippines、フィリピン)、Mai-Linn Holdt (Dysleksiforbundet、ノルウェー)、Arne Kyrkjebø (National Library for the Blind, Norway、ノルウェー)、Margaret McGrory (Canadian National Institute for the Blind, Canada、カナダ)、Trish Egan (Vision Australia、オーストラリア)、Monthian Buntan (Senator, Thailand、タイ)、Edmar Schut (Dedicon、オランダ)、Kjell Hanson (Swedish National Library for Talkingbooks and Braille、スウェーデン)、Judy Brewer (W3C/Web Accessibility Initiative、アメリカ)、Andrea Saks (ITU consultant、イギリス)、Dipendra Manocha (World Blind Union、インド)、Greg Vanderheiden (Trace Center, University of Wisconsin, アメリカ)、Jim Fruchterman (Bookshare, アメリカ)

(2)外国調査

- アメリカ: モンタナ大学等ミズーラ市における情報支援調査、NIMAS諮問委員会出席、ATIA会議、CSUN 障害と技術会議

- スウェーデン: 国立録音点字図書館(TPB)、教育省特別支援教育センター
- ノルウェー: ディスレクシア協会、国立盲人図書館、フーズビー資料センター
- フランス: フランス盲人協会図書館、国際図書館連盟盲人図書館会議(ヨーロッパ各国の情報収集)

(3)招へい

- 平成21年2月に講師を招聘し、京都(国際研究集会)、東京(高等教育における支援と就労支援に関する日米交流)、長野(信州大学工学部学生を対象する支援技術開発に関する講演と意見交換会)において研究集会を実施。
- ノルウェーのディスレクシア当事者団体の青年部役員(高校1年生)を招聘し、同世代の学習障害児とその家族・支援者による交流と講演を実施。

(4)総括研究集会(平成21年3月29日、神戸市)

調査研究事業を総括し、提言を討議するために、京都および東京の国際研究集会とは別に研究集会を神戸市内で開催した。なお、すべての研究集会は、磁気誘導ループ、パソコン要約筆記および手話通訳による情報保障を行った。国際研究集会においては、更に同時通訳を利用して日本語での参加を保障した。

4. 調査研究結果

調査研究の結果得られた知見は下記のとおりである。

- (1) 欧米諸国では、最新のICTを活用して読むことが困難な人への支援を体系的に行うことによって、教育、保健福祉、仕事等における障害者の情報アクセスの機会均等を実現しようとしている。
- (2) 本報告書に収録した各国のレポートは、各国が例外なくDAISYを軸にして読むことが困難な人々に対する体系的な情報アクセスの機会均等を保障しようとしていることを明らかにしている。
- (3) 現在のインターネットの世界では、アクセシブルでない動画コンテンツが台頭し、同じくアクセシブルでないPDF形式の電子図書コンテンツが目立っているが、すでに米国とEU諸国は、障害者と高齢者を含むすべての人が対等に情報にアクセスすることを前提にした情報社会像を明らかにしており、法的な拘束力を持つ国連障害者権利条約の目標を達成するための技術開発とインフラの整備を進めている。
- (4) 具体的には、W3C(www.w3.org)のWebアクセシビリティ・ガイドラインに沿ったアクセシブルなWebによるオンライン情報の提供と、従来の出版物に代わる体系的な知識情報のDAISYコンソーシアム(www.daisy.org)のDAISY規格によるアクセシブルな電子図書による提供が、障害者と高齢者の情報アクセスにおける機会均等の実現をめざす先進諸国の趨勢である。特に欧米の電子出版の標準化団体であるIDPF(www.idpf.org)のEPUB規格は、幅広い業界の支持を得て、電子出版の事実上の国際標準となると思われるが、目次やページを用いてのナビゲーションとともにアクセシビリティを確保するために、DAISY規格のサブセットとして開発され、更に、両規格の次世代版をDAISYコンソーシアムが一括して開発することが合意されている。2010年末に公開される予定の次世代のDAISY規格においては、手話(動

画)を含むマルチメディア電子出版のフル規格としてのDAISY規格と、音声や動画を除いたそのサブセットとしての電子図書用のEPUB規格という形で両規格が共存してアクセシビリティを確保する可能性が高い。マイクロソフト、Google、アドビというIT主流の各社が相次いでDAISYコンソーシアムに加入し、DAISY形式のサポートを表明しているのは、EPUBを含むDAISY形式が電子出版におけるアクセシビリティ確保の主流とみなされていることを示唆している。

- (5) また、インターネットを活用したデジタルテレビ放送であるIPTVの本格的な展開を控えた動画配信の技術においても、DAISYコンソーシアムが推進しているW3CのオープンスタンダードであるSMIL 3.0が2008年末に正式勧告となった。SMIL 3.0においては、SMILのサブセットとしてのDAISYプロファイルが規定されていて、インターネット上の動画のアクセシビリティの開発がDAISYを中心に進む基盤が形成されている。現在開発中の次世代のDAISY規格は、スウェーデン政府等の要求により手話と動画を含むものとなる予定である。また、DAISYコンソーシアムのUrakawa Projectは、地震と津波の避難を想定して、身体、知的、認知、精神の各分野における障害がある人すべてを含む住民および外来者にアクセシブルでありかつ理解できる防災情報を、動画を含む次世代DAISY規格コンテンツで提供することを想定して、そのためのオーサリングツールを開発している。Urakawa ProjectとSMIL 3.0の開発には国立障害者リハビリテーションセンター研究所が大きく寄与している。
- (6) ICTのアクセシビリティの開発は、W3CとDAISYコンソーシアムの開かれた国際標準規格(オープンスタンダード)戦略を軸に進められており、DAISY専用機のみならず、ノキアの携帯電話あるいはソニーのe-bookリーダーのような一般利用者向けの機器の中にも、徐々にこれらの標準をサポートするものが現れようとしている。
- (7) PC用DAISY対応ソフトウェアは、マイクロソフトのInternet Explorerに基本的なDAISY再生機能を付加するButtercup Reader(マイクロソフト社製の無償ソフト)と機種に依存しないインターネットブラウザとして評価されるFirefox用のDAISY再生付加モジュールであるDDReader(Bookshare製の無償ソフト)が相次いで開発されている。これは、一般に使われるインターネットの検索と閲覧の基本ソフトそのものにDAISY形式の電子図書の再生機能を付加するもので、近々、利用者は特にDAISY形式であることを意識する必要なく閲覧ソフトが自動的に形式を判別してDAISY図書を再生できるようになることを示唆する。
- (8) DAISY形式のコンテンツ製作についても、世界で最も使われているワープロソフトであるマイクロソフトWordは、“Save as DAISY Translator”と呼ばれるDAISYコンソーシアムおよびマイクロソフト社の共同開発によるオープンソースで無償の付加ソフトによって簡単にDAISY形式に変換できるようになった。また、オープンオフィスと呼ばれる無償のマイクロソフト・オフィス相当のソフトウェアのワープロ用にも同様の付加ソフトが開発済みである。印刷用のDTPソフトウェアにおいても、業界で大きなシェアを占めるアドビ社のInDesignは、EPUB形式と共にDAISY形式のXMLファイルを生成できる機能を内蔵している。このように、コンテンツ製作においても一般に使われるワープロからDTPソフトまでのDAISY対応が進んでいる。
- (9) 読みに障害がある利用者に向けたDAISY関連ツールは、極めてきめ細かく対応が進み、高機能で無償のオープンソース再生ソフトであるAMISと数式を含むDAISY図書も音声合成および点字で読むことができる有償のghPlayerがソフトウェアプレイヤーの代表格である。ディスレクシアを特に意識して製作された読み書きを支援するDAISY対応ツールもあり、音声、点字、大活字、カラーコントラスト、等の出力の柔軟な選択と音声コマンド、スイッチ、点字キー、タッチパネルなどの多様な入力の選択が可能になっている。これらのツールの多くのものが、WebのHTMファイル、Wordファイル、PDFファイルと共にDAISYファイ

ルを読める多機能なものになりつつあるのが特徴である。

- (10) PCとDAISY専用再生機のほかに、携帯電話用アプリケーションも現れており、2009年6月に予定されるDAISYオンラインプロトコールのリリースによって、携帯電話、インターネット、ケーブルテレビ等のデジタルネットワークを用いた情報通信サービスを活用したDAISYコンテンツ配信が一層普及すると思われる。
- (11) 国連機関においてもDAISYへの注目は高まっており、通信、放送、電話を担当し、デジタル・ディバイド解消を目指して2003年と2005年の国連世界情報社会サミット事務局をつとめた国際電気通信連合（ITU）は、2008年を「障害がある人々をつなぐ年」（Year for Connecting Persons with Disabilities）とし、同年のITU世界情報通信社会賞（ITU World Telecommunication Information Society Award）をDAISYコンソーシアムに贈った。授賞理由に挙げられたDAISYの恩恵を受ける人々は、(1)障害がある人々、(2)少数言語派に属する人々、(3)文字を持たない先住民族、(4)非識字者、とされている。
- (12) 同じく国連機関であるWHOにおいては、WHOのすべての文書と出版物をDAISY規格に容易に変換できるようにするための全職員向けの文書作成マニュアルの改訂の検討が始まり、国連機関の先頭を切ってすべての文書のアクセシビリティを確保するために、DAISYコンソーシアムとの共同事業計画を準備している。このように、DAISYが、障害者のみならず、障害以外の理由で読み書きあるいは現在の紙による出版そのものにおいて不利な状態にある人々を含めて「自由で、事前の情報に基づいた合意」（FPIC）を約束するICTにおけるユニバーサルデザインとして評価される傾向は、国連障害者権利条約の批准国の増加と国連機関における同条約の実施によって加速されようとしている。
- (13) また、先住民族の障害者率が極めて高い（カナダで2倍）ことが明らかになり、貧困、AIDS、災害等における先住民族の憂慮される状況の改善に国際的な注目が集まりつつある。他方、先住民族の知識が津波災害から障害者も含むコミュニティ全員の命を守った事例も知られるなど、科学的な知識と伝統的な知識の保存・普及と交流による連携の推進が、地域の安心・安全に極めて有益であることが知られている。日本政府も賛成した「先住民族の権利に関する国連宣言」が明記するFPIC原則を実現するためには、書記文字を持たない先住民族言語や非識字者も含めて情報を共有できるDAISY形式のデジタルコンテンツの活用が、最も有望かつ現実的な解決策である。
- (14) 国内においては、障害者放送協議会著作権委員会が中心になって全国の障害者団体として10年越しで進めてきたとりくみが実り、抜本的な著作権法改正による障害者の情報アクセス権の保障（著作権の一部制限）が実現する見込みであり、これを地域におけるすべての障害者への情報支援にどう生かすのかが緊急課題である。具体的には、従来は視聴覚障害者の著作物の利用に限られていた著作権の一部制限が、すべての障害がある人の利用に拡大される。また、視聴覚障害者の情報アクセスを保障するための著作権の制限も大きく拡張される。地域の障害者支援にかかわる団体と、著作権法改正により新しく障害者支援のために著作権者の許諾を求める必要なく障害がある人々が必要とする形式（マルチメディア・デージー図書等）に著作物を変換して提供できるようになる国立国会図書館および公共図書館等との緊密な連携が必須である。

5. 考察

様々な障害により読むことが困難な人々が、必要な時に必要な知識と情報に地域でアクセスできるように

なる時、それは、子供や日本語を読むことに慣れていない外国人も含むすべての地域の人々が情報にアクセスできるようになる一歩手前である。あらゆる障害のある人の読みのニーズにこたえる環境は、技術的にはすべての人のニーズにこたえることとほぼ同義である。

1990年代に障害者の情報アクセスを国際的に保障するためにテクノエイド協会の研究助成を得て開発されたデイジー(DAISY: Digital Accessible Information System)は、無償で利用できるマルチメディアの国際標準規格として世界中で障害者の情報支援団体に支持されていることが今回の調査研究で確認された。この規格を維持開発する国際非営利団体である DAISY Consortium が、「墨字情報を読んで理解することが困難な人々およびすべての人に対等な情報と知識のアクセスを保障する技術と国際標準規格を開発し普及すること」を使命としているように、DAISY は障害者の支援技術にとどまらない情報のユニバーサルデザインを押し進める技術である。国連障害者権利条約第2条は、合理的配慮と共に支援技術と連携したユニバーサルデザインを定義し、すべての障害者のニーズを包摂できる環境は、すべての人々のニーズを満たす環境に限りなく近くなり、やがて点字や手話等の障害に固有の支援技術の利用のほかには、敢えて障害者のための特別の配慮の必要もなくなる(ユニバーサルデザイン)という技術開発のあるべき道筋を示している。

国連障害者権利条約に平行して ICT における障害者のデジタル・ディバイドの解決策を詳細に議論した国連世界情報社会サミット(W SIS)は、最終的に障害者コアカスの提案を受け入れて、ICT におけるユニバーサルデザインと支援技術の連携による技術革新の推進をデジタル・ディバイド解消の基本戦略の一つとして受け入れた。権利条約は随所に ICT に関する W SIS の成果を反映しており、第2条もその一つである。

具体的には、あらゆる文書の製作においてワープロを使う今日、ワープロ文書が簡単にDAISY形式の文書に変換でき、更に、印刷用版下を製作するDTPソフトのファイルも簡単にDAISY形式に変換できれば、この理想の実現に近付くことができる。現在、Webのアクセシビリティが重要という認識は定着しつつあるが、文献コンテンツの多くがアクセシブルとは言えないPDFファイルである。このWeb上の文献がDAISY形式のファイルになることによって、文書製作者が積極的にWeb上の文献のアクセシビリティを高めることができる。国際機関や国・自治体等の公的な文書はもとより、あらゆる事業所においてもDAISYの利用により、積極的にアクセシブルな情報提供ができるようになると同時に、読みに障害がある人の雇用機会を拡張することができる。

DAISYコンソーシアムは、マルチメディアの最先端技術を活かして、無償かつ完全に公開され、特定のプラットフォームに偏らないオープンスタンダードとしてのDAISYを開発し普及を進めているが、その背景には、ブロードバンド時代に移行しようとする今、障害者も共にアクセスできる情報と知識を共有するため国際標準を、確立することによる人類としての計り知れない利益と、逆に標準規格の確立に失敗した場合の取り返しのつかない深刻な事態の認識がある。

インクルーシブな社会をめざす情報支援の長期的な展望は、国際標準を抜きにはあり得ず、その国際標準は、「公開(open)の、私的に所有されていない(non-proprietary)、複数のプラットフォームで稼働する(inter-operable)、アクセシビリティが証明されている(proven track record of accessibility)」ものでなければならない。W3Cのアクセシビリティガイドラインとデイジー規格は、国際的に認知された情報アクセシビリティの国際標準として地域における長期および短期の情報支援システム開発において常に参照すべきものである。

6. 結論

- (1) 地域における障害者に対するインクルーシブな情報支援の構想は、障害者本人と障害者支援団体等、保育所・学校・保健医療施設等を含む行政や自治組織、新聞や放送等のメディア、交通機関、地域の商店等、および職場が連携してそれぞれの役割を果たし、障害者が情報と知識の対等のアクセス機会を得て、主体的に地域社会に参加することを目指すものである。
- (2) そのためには、情報発生源におけるアクセシビリティ確保と紙による出版物等へのアクセスを保障するための情報支援サービスの両面における取組が必要である。
- (3) W3C(www.w3.org)のWebアクセシビリティ・ガイドラインとDAISYコンソーシアム(www.daisy.org)のDAISY規格による電子図書が、ITを活用した情報支援の国際標準として各国で採用されており、共に障害者のための支援技術から、すべての人が参加して推進するユニバーサルデザインへと脱皮を遂げようとしている。特に欧米の電子出版の標準化団体であるIDPF(www.idpf.org)のEPUB規格がDAISY規格との親和性を持つだけでなく、両規格の次世代版をDAISYコンソーシアムが開発することが注目される。そこには、手話(動画)を含むマルチメディアのフル規格としてのDAISYと、音声や動画の無いそのサブセットとしての電子出版規格としてのEPUBという、世界の障害者コミュニティと電子出版業界を含むIT産業の間で形成されつつある国連のレベルで合意された障害者のデジタル・ディバイド解消のためのグローバルな戦略がある。
- (4) 紙による出版物を読むことに障害がある人々のニーズを満たすマルチメディアの無償の国際標準規格であるDAISYは、マイクロソフト、グーグル、アドビ、ノキア、モジラ財団等の国際的なIT産業の支持を広げており、更に、欧米の電子出版業界の標準規格であるePUBフォーマットおよび米国の教科書教材標準フォーマット(NIMAS)とも将来にわたる互換性を確立しつつある。
- (5) 欧米先進国の障害者情報提供施設は、国立図書館、公共図書館、学校図書館等や、各種の専門情報センター、出版者等と連携して、著作権法を含む法律および制度の整備を行い、出版者から電子ファイルの供給を受けてDAISY形式のマスターファイルを製作して「上流での解決」をはかっている。
- (6) 日本においては著作権法の制約でこれまで障害者が自由に利用することができなかったテキストを含むDAISY形式の図書を、諸外国では有効に活用して、マルチメディア図書、録音図書、大活字図書および点字図書をDAISY形式のXMLファイルセットから製作するいわゆるワンソース・マルチ・ユースの効率的な製作方法を採用して、発達障害、精神障害等の様々な障害分野を含む多様なニーズを効率的に満たしている。
- (7) 国立国会図書館は、著作権法改正により平成22年1月1日以後はすべての納本図書の電子化が可能になり、同時にすべての読みに障害がある人へのDAISY形式に変換した資料の提供ができるようになる。唯一の国立中央図書館の責任として、電子図書館と現行の障害者図書館協力系の業務との調整を行って、今読みに障害がある人々が切実に求めている納本された図書を、すべての人がアクセスできるDAISYあるいはEPUB形式の電子図書に変換して提供することが強く求められる。
- (8) その際に、平成14年より一括して納本されている教科書を優先してマルチメディアDAISY化し、これまで教科書へのアクセスが保障されてこなかった各地の読みに障害がある成人と児童に対して、全国の公共図書館、学校図書館、視聴覚障害者情報提供施設、病院図書館、試験研究機関資料室、矯正施設図書館等のネットワークを通じて体系的に提供することが緊急に求められる。
- (9) また、著作権法改正を機に、すべての「読みに障害がある人」による既存の視覚障害者用DAISY図書の全国的な共同利用を促進するとともに、新たに製作するDAISY図書についてはワンソース・マルチ・ユー

スを実現するべく、国立国会図書館を含む全国的な分担製作と利用ネットワークの研究開発をオープンスタンダードとオープンソースを開発戦略の中心に据えて緊急に進める必要がある。

- (10) 上記の研究開発には、今回の調査研究事業で形成された国内外の関係者のネットワークを生かすと共に、障害者自らの積極的な参加と、地域からの積極的参加を実現するための創意工夫が強く求められる。
- (11) 地域においては、防災、保健医療、就労、教育等の具体的な情報ニーズに即して障害者本人とその家族、支援者等に著作権法改正によって情報アクセスがどう改善されるかについて啓発しつつ、全国的な情報サービスネットワークを最大限に活用するための地域の情報支援システムのモデル構築が求められる。
- (12) 具体的には、モデル地域を設定して、障害児者、家族および支援専門家、社会福祉協議会、ボランティア、学校、公共図書館、視聴覚障害者情報提供施設、国立国会図書館、出版関係者、支援ICT研究開発者、労働・福祉・教育の各行政担当者を含む総合的な研究グループによるインクルーシブな地域情報支援活性化モデル事業を立案実施して試行と評価に基づく提言を5年間程度継続的に行うことが望ましい。

ジム・マークス 基調講演

モンタナ大学障害学生サービス部部長、AHEAD(障害のある学生支援センター全米組織)次期会長

「アメリカの高等教育における合理的配慮」



私は、モンタナ大学における障害学生サービスの所長として20年、仕事をしてきました。いろいろなことを学んでまいりましたが、学生から学んだ1つの例をお話します。あるとき、若い男性に出会いました。その学生はモンタナの小さな町の出身でしたが車椅子を使っていました。私のオフィスの外の廊下で、自動ドアを見つめていました。障害者がそこを通ると通れるような装置があります。大きなボタンがあって、お皿くらいの大きさでしたが、ひじ、肩、頭、手などで押せば、ドアはそれだけで開くというものでした。デ

ザインもいいものです。

その若い青年に、「何をしているの?」と聞くと、「私は出身の町で、懸命にアクセシビリティを達成するための努力をしてきたし、すべてが戦いだった。ところがモンタナ大学では先人がいて、自分が最初の障害学生ではなかった。」と言いました。彼はさらに、「もっといい世界をつくりたい。自分の後続く人たちにもっといいアクセシビリティを提供したい」と言ったのです。まさにそれが、本シンポジウムの目的です。私たちは、よりよい世界を今、築こうとしています。

ここに来る前に少し日本について調査をしてきました。初来日ですが、幾つか発見がありました。日本とモンタナ州では、地理的にはほぼ同じ大きさです。ただ、中身は違っています。日本は1億2700万人の人口。モンタナの人口は、大体90万人くらいです。しかし、牛の数は負けなと思います。それから、もう1つの類似点として、私の家内が教えてくれましたが、「ジャパン・タイムス」に俳句が載っていたので引用します。「所得申告書を記入したけど、そこには希望も貯蓄もなかった」と。どこでも共通ですね。これが人生ですよ。

さて、私自身の障害に関する経験、そしてモンタナ大学における障害者サービスの歴史についてお話しします。渡辺美香さんが、サービスに関する詳細を後で発表する予定です。できれば、最後に、ぜひ皆さん質問してもらいたいと思います。皆さん、特に関心のおありのところがあれば、お聞きいただければと思います。また、私どもの AHEAD(アヘッド)という組織についてもお話したいと思います。AHEAD ではどのような形で世界に誇れるアクセシビリティをつくれるか考えていきたいと思っています。

私は生まれながら視覚障害をもっていたわけではありません。最初に目がおかしいと思ったのは18歳の時。夜になるとよく見えないという症状が出てきました。特に夜、運転をしているときです。ほかの人が見えるものが見えなくなってきたと。そこで、医者に見てもらうことにしました。目の疾患、網膜色素変性症でした。

私は9人兄弟の長男で、私の兄弟2人も同じ病気です。その他の兄弟姉妹は正常です。モンタナの牧場で育ちました。6代目です。私は 25 歳のとき、大学に在学中に視覚障害者として正式に登録されま

した。この視覚障害に慣れるというのは決して容易ではありませんでした。普通私たちは障害を悪いことととらえがちで、悲劇であると考えますね。けど、全盲に対する考え、あるいは障害に対する考えを徐々に私は変えていきました。認識の問題、思い込みの問題だとわかりましたから。つまり障害のある人たちが、世界において役割があるとすれば、障害のない人たちと対等に参加できる、対等であるという信念をもつことです。それにより、インテグレーション、インクルージョンあるいは参加や恩恵を平等に享受するという環境は必ず実現すると思っています。

障害受容について話をするとき、カナダ人の女流作家マーガレット・アトウッドの言葉を私はよく引用します。彼女は女性が被害者になるという4つの段階について話しています。かなり我々障害者と似たものがありますし、4つの段階、それを経て順応するということでした。まず最初は「恥」。他の人たちのように並の人間ではないと感じてしまう。障害者であれば、障害を隠す、認めたくない気持ちで、恥ずかしくなる。たまたま障害者となってしまったことで不適応がおこります。二つ目は操作です。障害を使って他の人を操作する、ほかの人たちに働きかける。例えば、悪いけどお昼を買ってきてとか、目は見えなくても、頭は働いているからと言って、人を操作します。

三つ目は怒りです。自分は自信を持ち始めたとしてもまわりが自分を排除し、社会から締め出されたように感じてしまうのです。怒りはプラスの効果もありますが、間違っただけで表現されたり蓄積されてしまったらマイナスになってしまうので、うまくコントロールすることが大事です。最後が障害の再構築です。尊敬されるものになる、そしてそれがその人の個性になるということ。私の場合なら、白髪も増え、足のサイズも大きいですが、目が見えないことが私の全てではない。いいことでも悪いことでもない、とにかく自分なのだ。できるだけ自分の人生を満喫しようという再構築です。受容には時間がかかります。ただそこで重要なのは、自分たちの認識や思い込みに基づいていくらでも変わるということです。

さて、私共の障害者サービス部がつくられたのが1978年ごろだと思います。私はまだ大学生でした。アメリカでは法律が1973年に可決され、リハビリテーション法504条が生まれました。これは公的資金を受ける場合に、必ずや障害だけを理由に差別してはならないというものです。建物を改造し、連邦政府が資金を出すときにはアクセシビリティを担保しなければならないという内容です。が、法律で設定された後、規制が導入されませんでした。なにもないまま、5年が過ぎ、障害者団体が抗議デモをしました。彼らは連邦政府の建物を乗っ取りました。サンフランシスコです。当時はジミー・カーター大統領でした。障害者は「お願いだから規制を書いてください」と要求しました。法律を実現可能なものにしてほしいと。つまりアメリカ全米で実施されるプログラムに規制を組み込むという訴えをおこし、そして聞き入れられたのです。障害者のためのサービス部が、全国各地の高等教育機関に設けられました。

その以前からあったものもあります。例えばカリフォルニア大学バークレーや南イリノイ大学にはありました。南イリノイ大学では復員軍人のためのリハビリテーションサービスを提供していました。このように大学、短大においては、法律ができる前にもありましたが、数は限られていました。1978年、一夜にして一般的なものとなったのです。

モンタナ大学では最初、このような障害者のためのサービスを提供したのは、障害学生のアドバイザーという肩書きで、女性がその仕事に最初につきました。彼女は同時に留学生アドバイザーという仕事もしていました。数年間その状態が続きました。1988年になり、私をはじめ大学に来たときですが、このオフィスは学生課内で独立した組織になっていました。ちゃんとした組織としてできていました。おもしろいことにその時にいたのがジョージ・カーシャーさんでした。ジョージさんは私の先輩で、彼が私を採用

してくれたと言ってもよいと思います。ジョージの影響力が大きかったと思います。こうしてモンタナ大学障害サービス部のオフィスは1988年に誕生しました。

もう1つ、国の歴史をおさらいします。日本とのつながりがある部分です。レーガン大統領は小さい政府を唱えた大統領でしたが、中でもリハビリテーション法504条の解体をターゲットにしました。そのためにまずグループを結集させました。障害のある人たちも中にいまして、その1人がジャスティン・ダートという人でした。彼はタッパーウェアのオーナーでした。1960年代、70年代、日本でもタッパーウェアが売れましたね。美香がタッパーウェアはとても人気があると言っていました。その会社は日本の女性が働いている職場で、女性を起用した進歩的な会社でした。ちなみにジャスティンの奥さんは日本人です。そのジャスティンが保守的な集団で障害者のリーダーの一員として働きかけ、レーガン大統領は障害者関連法の見直しをすることになりました。見直しの中で、リハビリテーション法504条は非常によいものだと言いました。障害だけを理由に差別することを禁止する考え方がいいと。これをもっと民間に適用したらどうかという話になりました。公共サービスだけでなく民間も障害を理由に差別してはいけないということです。そこからアメリカ障害法、ADA法が生まれたのです。

アメリカ政府が障害者の権利を否定しようとしたことから始まったものですが、ジャスティン・ダートのリーダーシップにより、結局はADA法ができるという皮肉なものです。私はこの話がけっこう好きです。で、1990年代に施行されることとなったのです。ちょうど私が働き始めたころの魔法のような話です。民間セクターにおいても、障害者の権利が守られる方向に動いていきました。そしてアメリカ国内において、1つの文化が確立しました。障害に対する新しい考え方の始まりでした。

初出勤日にドアをたたく人がいました。私は自分の部屋にいましたが、ドミトリーを変えたばかりで、コンピュータもありませんでした。ファイルの引出しがあるぐらいで、非常に暗くて、あまりいい部屋ではありませんでした。部屋とも言えないようなところで、なぜ私はこんなところで仕事することに決めたのかなと嘆いたぐらいです。ドアをノックする人がいて、若い男性が立っていました。背が高かったですが、怒っていました。「私は録音図書を使えると言われたのに、全く手に入らない。自分は学習障害があるので、録音図書がなければ学習を進めることができない。声を聞きながら、本を読めるはずだったのに。ほかの学生と同じように勉強できると約束されたのに、自分は教科書を片手にただ突っ立っているだけだ。」と言いました。私たちはとことん話し合いました。もちろんすぐに対応はできない、何をしたらいいかを考えるようになりました。結局2年ぐらいかかりました。例えば、RFB&Dの視覚障害者のための録音図書を使ってみました。ディスレクシアの人にも役立ちました。ボランティアを使い、技術も使いました。初期のスキャニングの技術を使ったりして、幾つかのツールを使ってこの学生が対等に学習できるように支援をしました。この学生は実際に何とか学習を進め、卒業できました。卒業後、連絡が取れなくなっていました。

10年くらいたってから、またドアをノックする人がいて、ドアを開けるとその人が立っていました。今回はスーツとネクタイ姿でした。成功を収めた人のようでした。今日はどうして大学に来たのか、卒業してしばらくたっているけど社会で仕事をしているのかと聞くと、彼は「大学で就職説明会があったので来ました。」と言いました。毎年のようにこの大学ではそのような会議があり、学生のキャリアアップ支援をしています。では、仕事を探しにきたのか？と聞くと、「違います、私は大学のある部局にいて、雇用担当の仕事をしています。」と言いました。私は本当にうれかったです。私がやっていた仕事から、1人の人間が成功を収め、そして今のような立場に立つようになったのですから。私がやっていたことは支援ですが、その支援によって、その人は成功を収めることができたということ、これは本当に素晴らしいと思いました。

平等な機会を与えることで彼は成功したのです。しかも、印刷物に代わる代替教材を提供できたことで可能になったのです。

その後、いろいろなことが変わりました。最初にこの職場についたとき、私はパートタイムで仕事をしており、たった一人の学生スタッフが部下でした。彼は1週間に3時間程度の実働でした。大学には8000人の学生の内120人が障害をもっていました。彼らのためにアドボカシーを推進する人が必要でしたが、この人数では全く十分ではありませんでした。環境を変えるため最初に私がやったのは、学生たちと話すことでした。地元の学生新聞とも話をしました。アメリカで何か変化を起こそうとするには、マスコミに働きかけることがとても重要です。地元の学生メディアに働きかけをしました。モンタナ大学におけるアクセシビリティが足りないのは、よく言われることですがお金がないからではない。予算がないために話がつぶれることが多いですが、本当の問題はそうじゃないと私は考えました。プライオリティの問題です。何かに向けて進む場合、地域社会として、大学として、あるいは個人としてもそうですが、自分たちに一番重要であることに価値を見いだしていきます。この場合、アクセシビリティを確立することが重要であると、まず第一のプライオリティにすることが大事です。

そして新聞を読んだ学生が障害をもっているモンタナ大学の学生のためにアライアンスというアドボカシーグループをつくりました。学生組織としては、アソシエート・スチューデント・オブ・モンタナという組織があるんですが、いずれにしても大学において学生の活動が促進することをしています。「ADSUM」これは、「ここにいますよ」というラテン語の意味を持つ言葉だと後になって知りましたが。ADSUMでは、いろいろな活動をしました。単に裁判を起こすだけでなく、あるいは行政上の苦情処理だけでなく、一番最初にやったのはアメリカ教育省公民権局に対しての働きかけでした。



この局の人が大学にやって来て、障害者に対して差別が行われているかどうかを調べました。5人の学生がいて、3人が車椅子を使い、2人が聴覚障害を持っている学生でした。当局から調査に来た結果、大学においては、障害に対する差別が大きい、特にいろんなバリアがあり、参加ができないということが分かりました。この公民権局の調査の結果を受けて私たちは、大学側に障害をもっている学生のいろいろな機会を奪っていないか伝え、それに対してどうするかと問いました。大学側は確かにバリアがあることは問題だと認めました。そこで計画を練り、障害を持つ学生に対するサービスを改善するという計画を立てることになりました。障害サービス部のオフィスはフルタイムの仕事に変わり、仕事をする学生の数も増えました。

それだけではなく、ADSUMはフランス・バーディナーという歳出委員会のメンバーを連れてきました。モンタナ議会議員を30年していた80歳代の老人でした。老人は障害を持つモンタナ大学の学生と話をしました。車いすの学生が、自分たちにはこのような障害があり、聴覚障害を持っている人もいと話しました。老人は一人の若者に聞きました。「ほかの学生の障害はわかったが、君はどこが悪いのか？」モンタナは特に農家が多いのですが、彼らは非常に繊細さに欠けていて、はっきりと自分が思っていることを言う傾向があります。その青年もはっきりと口にするタイプなのでヒヤヒヤしましたが、「自分には学習障害があり、他の学生と対等に物を読むためには録音図書が必要だ」というようなことを

言いました。老人は、こう言いました。「私は 8 年生までしか教育を受けず、高校も出ていない。私も多分学習障害を持つてゐるのではないだろうか。なぜかと言うと、読むことがとても苦手だったから」と言いました。

その数ヶ月後、議会のセッションの中で、その老人が最終的に歳出委員会において予算の額を増やしてくれました。ロビイストの働きもあったようですが、モンタナ大学の予算が増やされることになり、私のオフィスの予算も増えました。さらに、私たちのオフィスは拡大しました。いろんな障害の専門家を雇うことができたのです。

障害サービス部のオフィスですが、その構造についてお話しします。当時私は 1 つのモデルを参考にしました。全国で使われていたモデルです。高等教育において特定の障害分野の専門家を雇うということです。例えば学習障害についての専門家、視聴覚障害の専門家を雇うのです。障害サービス部ではその両方を合わせました。それはそれでうまくいき、障害をもっている学生たちに対するサービスが改善し、アクセシビリティも改善され、たくさんの方がやってくるようになりました。バリアを少なくすると、たくさんの方が参加できるようになるわけです。これは、ニワトリとタマゴの問題ではありません。バリアがある場合に障害をもっている人たちは平等、対等のアクセスができない。しかしバリアがなくなると、アクセスすることができ、そしてたくさんの方がやってくるようになります。私たちの仕事はそれとともにどんどん増えていきました。25 人から 30 人の学習障害の学生がいるという状況から、それが 300~400 人になっていきました。すると、1 人では対応できなくなりました。

そこで私のオフィスでは、ずっと以前からやっていたことですが、サービスというのは障害の病理をもとに対応するべきではないと考えるようになりました。そこで、モデルを変えました。専門家というよりはむしろあらゆる障害のタイプに対応できる人を雇うことになりました。コーディネーターと呼びますが、特定の人をコーディネーターの下につけます。例えばある人が教育学部あるいはビジネス学部の対応をするようにします。1 人のコーディネーターが学習障害、あるいは精神障害、視聴覚障害をもっている人、いろんな障害を持つ学生に対応するということになりました。共通点は、専攻科目だけです。新しいモデルにおいては、まず私たちは学生に専攻は何か、これから何を勉強するのかと尋ねます。以前とは大違いです。かつては障害の種類を聞きました。私たちはアクセシブルな学習環境を病理学的な形ではなく、何が重要であるかよく見えるようにしました。このアプローチは、私たちがサービスを提供するに当たり、他の大学とは随分違っていることです。ほかの大学は私たちほど成功していないでしょうし、この方法は非常にうまくいっていると自負しています。

さて、我々が支援をしている学生ですが、今現在の状況を話します。私がディレクター、所長です。学生担当の副所長もいます。その上には学長がいます。ですので、非常にいい配置状態です。1 人を間に挟んで学長が上にいるという非常にめぐまれた立場にあると思います。オフィスには、4 人のコーディネーターがいます。美香はそのうちの 1 人です。あと 3 人います。いずれも障害学生をそれぞれ、専攻科目に応じてコーディネートしています。もう 1 つ、受付の人と、オフィスマネージャーと呼ばれる人もいます。また、5 人の手話通訳がいます。書籍を電子教科書に変換する担当もいます。まだ DAISY まではいっていませんが、我々としては、できるだけそうしたいです。今現在は、大体毎年 250 の図書を変換しています。DAISY ブックも近く導入していきたいと思います。今現在マイクロソフト Word か RTF 図書に限定されています。20~30 人の学生、80 人ぐらいのボランティアがおりますし、また、クラスではノートテーカーもいます。今現在障害学生の 1000 人にサービスを提供しています。現在、全校生徒数は 1 万 4000 人です。

中規模な大学と言われていますが、かなり大きな大学ですし、技術系もあります。例えば重機の操作も指導していますし、博士課程もあります。生物学など、様々な学科が用意されています。1000人の学生が障害を持っていると言われています。数は多いと思います。全体の7%以上が障害学生です。通常の比率よりも大学全米で見ても、かなり高いと思います。通常、障害学生の比率は3%でしょうか。7%とは異例に高い数字です。

モンタナ大学がなぜこんなに高いかという、ミズーラでは障害のあることは一切問題ではない、障害があることは、その人を人間として見た場合、関係ありません。私達オフィスの予算は75万米ドル相当します。これだけサポートをしていますので、高等教育機関ではもっとお金が欲しいところですが、例えば3人学生がいると1人分のスタッフの給料が出ると言われていますが、私達は障害学生を対象とし、大学のためにも仕事をしているので、支援のための支出も多いのですが、その見返りも大きいと思っています。よって、投資としてはすばらしいと考えています。もう少し高等教育と障害について話をしますが、一旦ここで止めて、モンタナ大学におけるサービスについての質問があればお受けします。

会場1/助成金団体でアジア途上国の障害者支援担当です。我々の事業としてアジアの途上国で障害者の学生支援室も展開していますが、まだまだ小さい規模で、これからの発展を期待しています。これまでの経験から、特に大学の職員、学長やスタッフも含めて、障害学生を受け入れる意味での意識の改革、啓発活動といったところが今後非常に大きな課題になると思っています。まだまだ学生数が少ない中、やはりチャリティーというか、入りたいという学生がいるから仕方なく支援しているという現状から、大学に障害学生を受け入れることは有意義であると意識改革するまでの過程、モンタナの大学の場合、経験の中でどのように雰囲気が変わっていったのか、もしくは変えていくことができたのか、教えていただくと大変助かります。

ジム/よくお聞き下さったと思います。まず私が最初に申し上げたいことは、仕事はこれで終わりということではありません。常に私たちは大学キャンパスのいろいろな人に対して、対等のアクセス、障害のある人にも平等な機会を与えることが大事だと分かってもらうことの運動は続けなくてはなりません。アメリカ全国で議論されていることですが、ディスアビリティサービスプログラムにおいては、昨年行われた「高等教育と障害について」の会議で2つの問題を議論しました。社会福祉モデルと社会正義モデルです。社会福祉モデルは障害を持っている人にサービスを提供するのはもちろん悪いことではありませんが、障害を持つ人は、それ以上にファーストクラスの市民として社会に貢献したいと思っているのです。そこで今は、社会正義モデルに移行するということです。平等なアクセス、権利について主張する。正義と平等の概念をもとに運動を進めたいと考えています。

私達はしばし、いろいろな人を説得しなければいけない場面に直面します。つい最近、モンタナ大学において、近代、古典、文学、言語という部門があるのですが、日本語科もその中にあります。障害を持った若い日本人女性ですが、車いすは使っていませんが、歩行器を使っていました。小児まひで、四肢を動かすのが難しい人でした。授業で、日本の漢字、文字を手で書かなくてはならなくなりましたが、障害があるので、英語も書けません。そこで彼女がテクノロジーを使ってもいいかどうか、つまり、これは学習の基本的な基準をこわすものになるかという議論になりました。その意味ではいろいろなことが常に起こっています。私達が実現させたい変化を得るには、とにかく継続的に努力することだと思います。私たちの成功について説明する、こんなインクルージョンをするとこんな良いことがありますよと説明する。教育

を通して、あるいは合理的な説明を通して世の中の人に私たちのことをわかってもらう、平等のアクセスがあることで社会全体をよくできると、説明していく努力は常に必要だと思えます。

会場2／ご自身のことをサービスをコーディネートするブローカーとして見ておられるのか、それとも障害



学生に対して直接サービスを提供していると思えますか？この法律では様々なサービスが想定されています。一人一人にサービスが提供され、その人が学内だけではなく、外でも活用できるといいます。アメリカでは DSS を直接的なサービスを提供する機関として頼るという傾向もありますが、一方で DSS はコーディネーターという見方もあります。こういうサービスの管理、提供する側は直接提供すべきなのか、外部を使ってそのコーディネーターをすべきなのか、どういうご意見でしょう

か。

ジム／障害のある人にとって、2つの選択肢があると思えます。1つは、自らの考え方、障害のとらえ方、自分たちのスキルをかえ、ツールを使って参加するという、自らを変える方法です。もう1つは環境を変えるアプローチです。つまりバリアを取り除き、アクセシビリティを向上させる働きかけをします。多くは両方だと思えます。片方では自己責任でしょうし、それによりこの世の中で生きていこうとしますが、同時に外に対しては対等なアクセスを求める働きかけもします。

DSS はアクセシブルな環境を担当しています。私たちのような DSS が直面する問題の1つは、ありとあらゆる障害の問題、環境の変化を求めるもの全部を自分たちがやろうとするものです。それは間違っています。障害のある人自らが解決策を見いださなければいけないケースもあるわけです。リハビリテーションと DSS の間のパートナーシップが必要です。優れたリハビリテーションを行うことによって、人々は、例えば自分たちはこういった機能があるのか、どうすればノートを取れるか、どうやって技術が使えるのか、また、どうやれば移動できるか、どうやってリソースへのアクセスができるかが分かるわけです。

モンタナ大学の学生、その他、高等教育機関において、こういった学生はそういう意識のもとでやろうと、一方で環境においては差別はない、バリアがないという前提で来校します。したがって、自分たちのアクセスを阻むようなバリアはない、そういった意識のもとに大学に来ます。両方が組み合わさっています。リハビリテーションの対等のアクセスによって最もいい成果がうまれると思えます。時として、私たちはあまりにもアクセシビリティだけを考えてしまう傾向があります。が、例えば私が最もアクセシビリティの高い環境にいたとしても、視覚障害は消えません。目が見えない中でどうやってやるべきかを考えなければなりません。障害者すべてが共通していることだと思えます。ですので、一番成功し、またファーストクラスの市民となるためには、環境バリアを除くと同時に自らも変わるという両輪が必要です。

私たちのオフィスでは、「自己決定」が重要です。障害者自ら、サービスをどう選ぶかを自分で決めるわけです。我々がすべてを決めることではないですから。私たちはあくまでファシリテーターです。いろいろな要素を組み合わせ、アクセシビリティを実現・提供するという役割です。DSS は人々が勉強に必要

なツールを提供する立場にあります。あくまでも自分たちはファシリテーターです。障害者自らがコントロールできる形でこのようなサービスを提供するよう、努力しています。

私の友人でミシガン大学に勤めている人がおり、その人が DSS の責任者ですが、そこで、2人の障害学生がいたという話がありました。2人とも非常に賢い能力のある学生でした。うち1人は、DSS を非常に重用視していました。いつもサービスを求めにくる。大学の障害者プログラムをうまく活用していました。もう1人はほとんどサービスを使っていませんでした。私の友人は、2人の卒業後を追跡しました。ほとんど DSS サービスを使わなかった学生はキャリアを築き、どんどん出世した。そして、非常に能力ある社会人として活躍していた。もう1人の学生は成績がとてよく、頭も良かったのですが、サービスを何かと利用していた。結局仕事が見つからず、なかなか安定しないという問題がありました。高等教育は全体を考えるべきでしょう。依存性が高い人を育てるべきではなく、解放すべきです。そのためには私たちは障害とは何かを理解すべきでしょう。広い文脈で捉え、本人が自己管理できるように、DSS がコントロールしてはならないと思っています。

会場3／支援のモデルについて2点、簡潔にお伺いします。障害の病理的などころを重要視せず、環境面に目を向けるように変革したということでした。その変革の背景として、今、障害学生が増加したと言われましたが、他に何かあったのか、というのが1点。もう1点は、モデルを変えるに当たって、おそらく大学内でさまざまな議論があったかと思います。これで本当にうまくいくのかと。どうい議論があったかについて、少し補足をいただければ幸いです。

ジム／変化を見るためには、社会福祉モデルから社会正義モデルに変化させたということですが、やはり障害に対する考え方の変化が必要ですね。啓蒙すると同時に心を開くことも必要です。難しい変革ではありますが、多くの人が障害をもっている人にサービスの在り方をゆだねているともいえます。それは悪いことではありません。障害をもっている人たちは、この世界の他の人たちと相互依存関係にあるわけです。私たち全員がそうだと思います。例えば食事をするとき、いろいろな人の手が私たちを助けてくれます。食事を私たちがするには、農家の人があるものを作り、それを運ぶ人がいて、そしてパッケージをする人がいて、それを料理する人がいる。私たちは全部をやっているわけではなく、私たちはお互いに依存しているわけです。

障害をもっている人たちは、社会福祉モデルの中では「障害をもっている」ということがどういうことなのかを認識しなければならなかった。これは障害をもっている人にとっては非常に難しいことでした。一方、社会正義モデルでは、障害があろうとなかろうと自分で物事を決定したい、自決の権利を持ちたい、選択を持ちたい。社会正義モデルでは、それでいいんですよ。成功したいなら、自分自身一定のことをしなければならぬ、やっごらんない、成功するかもしれないし、しないかもしれない。でも一緒にやりましょう、と。成功にしろ失敗にしろ、否定されません。バリアがあるから制約されるとか、あるいは否定されるということがないように、障害のために、環境のために、あるいはサービスが足りないために、それがバリアになるということがないようにしましょうということで、共同作業するわけです。

社会正義モデルというのは、私たちの心に非常に深く響くものであったと思います。これは普遍的な真理ではないかと思ひます。福祉モデルから社会正義モデルに移るのは簡単ではなかったですが、大事なことだったと思ひます。

会場4／貴重なお話、ありがとうございました。日本でインクルージョンが進まない大きな理由の1つに、学校の先生がどう対応したらいいかわからないという点があります。学生さんを支援するお話がありましたが、学生さんを教える先生方を支援することもやっつけらるんでしょうか？

ジム／私たちは教職員も、サポートしています。大変面白いですが、私たち DSS の役割は例えば障害者のアドボカシーをするということではなく、正義のアクセスのためのアドボカシーです。ですから、すべての人がこの中には含まれます。障害学生だけでなく、教職員も、大学のある地域コミュニティもそうです。教職員は例えば高い期待、学問上の自由、介入せず自由にさせてもいいという発想を持ってもいいんだと思います。ですから、教職員は自分たちの権利を主張しますが、障害学生と全く同じで、その点は認めるはずで、ギブアンドテイクがあると思います。

私たち、教職員に対して3つのことを言っています。1つめ、障害学生を受け入れなくては行けない。二つ目、障害学生のクラスへの参加方法を変えることを受け入れるべき。これは法律上規定されており、正義上必要です。三つ目、すべては交渉によって決まる。何かを改造、修正する場合、それはあくまでも、いわゆる指導する基準にのっとってできる範囲でやるということ。例えば障害学生がやるべきことがやれるように変換するという。そして DSS は彼らが活用できるツールのようなものであると。

モンタナ大学では例えば学生の数が、1 クラス 500 人にのぼる場合もあります。500 人もいるクラスでは、15 人ぐらいが障害学生ということがよくあります。それぞれに修正・改造が必要で、非常に大変なことですが、先生自身は時間がないのでできません。テストを受けるとき、時間を延長するとか、特別な技術を導入してテストを受けられるようにすることを先生自身できません。そういうときは DSS がやります。大学の使命としては DSS は教育インフラの一部ですので、私たちは単に障害だけではなく正義を中心に考えていきますから。

司会／ありがとうございました。

渡部・テイラー・美香

モンタナ大学障害学生サービス部コーディネーター

「モンタナ大学とミズーラ市周辺における障害者への情報支援」

まず私の話をする前に、自己紹介をさせていただきます。私は名前を見てわかると思いますが、日本で生まれ、日本で育ち、14年前にアメリカに移住しました。そして修士号を取り、カウンセリングが専攻でしたが、その後、モンタナ大学のディサビリティサービス(DSS)という言葉が出ましたが、そこで勤務をし始めて7年目になります。



先ほどの話にもありましたが、モンタナ大学は、ミズーラ市民の生活の一部であると思います。というのは、一

般市民が大学の図書館に行って図書を借りたり、そこで本を読んだりすることが自由自在にできます。日本では大学の図書館になかなか入ることができないという話を聞いています。今もそうだと思います。そして一般市民が大学の施設で食べたり、コンサートに行ったり、そのように市民がモンタナ大学のキャンパスを利用することができます。このように地域との関係が深い大学で、障害者、特に障害学生にどのようにアクセシブルな情報を提供しているかを、この短い時間の中で話させていただきます。まずは、障害学生がどのようにDSSに来るかを話します。

DSSに障害学生が自分で登録しにきたり、教員とか、ジムさんの話にもありましたが、リハビリテーションサービスで紹介を得て、DSSのサービスを使ったらいいという話を聞いて、サービスをリクエストする学生がいます。そして今日のセミナーのテーマでもある、読みに困難を持つ障害がある学生がどのようにアクセシブルな教科書、代替教科書を得るかを、話します。

まず障害学生がDSSに来て、あなたの専門は何ですか？と聞きます。その専門に応じてコーディネーターとアポイントメントをとります。コーディネーターが話をし、合理的配慮にはどんなものがあるかを話し合います。その時の合理的配慮の1つとして、代替教科書とか、支援技術の利用という話をします。アメリカで勉強された方、このホールの中に何人かいますか？手を挙げて下さい。何人かいらっしゃいますね。

私は、アメリカに渡るまでに日本で学士号をとりました。それと比べますと、アメリカの大学は本当に本を読まないといけないし、単位どころか卒業もできません。それくらい読んで学ぶことが大切になります。となると、読みに困難を持つ学生は一般のプリントでは、それがバリアになるんです。そのためにDSSが代替教科書を提供する形になります。

具体的に言いますと、昨日セミナーに来た方は聞かれたと思いますが、レコーディング・フォー・ブライ

ンド・フォー・ディスレクシクとか、Bookshare.org とかがありまして、その会費も DSS が学生のために払って、学生自身もその協会、例えば RFB&D とかから自分で得られるようにサポートをします。でも中には専門的な本とか、例えば私は心理学、カウンセリングを学んだんですが、RFB&D とか、ブックシェアにはない教科書もありますので、その場合は代替教科書に変えてくださいとお願いします。フォーマットはジムさんも言ったように、リッチテキストやテキストを使っています。

具体的に言いますと、先ほどジムさんが 1000 人の障害学生にサービスを提供すると言っていましたよね。モンタナ大学は2学期制、セメスターと言います。新学期は1月末に始まりました。そのとき、RFB&D とかブックシェアにない教科書で、代替教科書をつくってほしいという学生が何人かいました。1月末には 50 冊のリクエストが来ていました。それぐらい多いのです。

でも代替教科書を得ても、使えないと意味がありません。代替教科書というのは、支援技術を使って読むことが多いのですが、その支援技術も見ただけではわかりません。なので、DSS では支援技術を有効に使えるようにアシティブ・テクノロジー・コーディネーターが1人いまして、そのスタッフが障害学生に1対1でトレーニングをし、支援技術をちゃんと使えるようにサービスを提供します。アクセシブルな教科書を提供するというのは、DSS が力を入れている、ごく1つですが、アクセシブルな教科書を提供するだけでは、アクセシブルな教育の場にはなりません。何に DSS で力を入れているかについて話します。

1つは、地域や大学内でのアウトリーチが大切だということ。

具体的に言うと、DSS はどこにありますよという宣伝をウェブサイトでもする。皆さんモンタナ大学でウェブサイトでサーチのところに Disability とやってみると、50 くらいバツと出ます。例えば日本の大学の障害支援部を探すのはすごく苦労します。個人的な経験ですが、それぐらい DSS とか、障害者にとってアクセシブルな状況を提供するために、ウェブサイトで宣伝することも大切だと思います。大学内でも、職員のトレーニングやコミュニケーションも必要だと思います。DSS がどんなに努力してアクセシブルなキャンパスにしようとしても、DSS だけの力ではできないことはたくさんあります。



教育の場を提供することが DSS だけじゃない。教員もそうです、働いているスタッフもそうです。そういう決断力を持っている権利のある人、例えば学長でもあるし、アクセシブルな情報を提供することが大切だと。この前数えたら、24 の委員会の中に入っていました。大学職員や地域との機関、例えばリハビリテーションサービスや障害者に対するサービスや情報を提供している地域の機関などとネットワーク、パートナーシップを結ぶことも大切だと思います。それを広げることは、その地域だ

だけでなく、州レベル、国レベルでのネットワークを確保することも必要です。それも一例として、ジムが AHEAD で次期会長としてやっていることはその具体例だと思います。

もう1つは、支援技術を使うことの大切さを主張したいと思います。大学側が使えるアクセシブルな情報を提供しても、それを読める器具とかツールがないと、ユーザに情報が入らない。支援技術をいくら買っても、それを DSS だけのオフィスに置いてしまうと、学生は 24 時間の仕事ですから、勉強ができない。それも考えて、支援技術のソフトウェアを買った場合は、キャンパスのいろいろなところに置いてあります。

図書館はもちろん、スチューデント・ユニオン、要は学食と、大学生がよく集まる本屋さんなどがいっぱいあるところですが、そこにあるコンピュータ・ラボにソフトウェアを幾つか入れて、スキヤンも置いて、学生が自由自在に、障害のない学生とも勉強ができる環境につくっています。

また、幾ら大学側がアクセシブルな情報の保障をしたとしても、障害学生の声がないと、なかなかそれが生かされないところがあります。先ほどジムさんがおっしゃっていましたが、ADSUM、障害学生が運営する学生の声が必要になります。最近ですが、ADSUM のメンバーが地方の新聞にコメントを書き、どれだけ支援技術が大切か、大学で、まだ不十分であるとも新聞に載っていました。そういうアドボカシーがあり、それを学生が言えるような環境をつくるのが大切だと思います。

日本に帰ってアメリカの善し悪しと日本の善し悪しがよく見えます。アメリカのいいところは、個性を主張するところですが、日本は一貫性を美とするところが国柄ではないかと思っています。でも、日本の一貫性を美とするところが、たまに、バリアを生む要素になることがあります。具体的に言うと、これを言うと日本語を教えている先生に怒られると思いますが、「木」という漢字があります。左から棒を横に伸ばし、上から下へのばし、その後には枝をつけますが、それにも順番があります。

アメリカならば、こう言うと失礼ですが、「木」というような文字をとりあえず、順番なしでも、書けたらいいという風土があると思うんですね。私が言いたいことは、結果を出したら、どのような方法でもいいですよ、というような、アメリカの風土があると思います。もしかしたらそれが、アメリカで障害者の権利が主張できるということの助けになっているのではないかと私はたまに思います。しかし、日本には悪いところ、いいところもあって、日本の得意とするのは、悪いところを改めてよいものにするという、改善をうまくできることだと思います。例えば日本の車、日本の機械なども、改善していいものをつくろうという、風土があります。それを教育にもしっかりと生かしてもらいたいと私は思っています。

ありがとうございました。

神山 忠

岐阜県立関特別支援学校教諭

「ミズーラ市の情報支援の現場を見て思うこと」

今、特別支援学校に勤務しておりますが、私自身、ディスレクシアという特性があります。そんな私がミズーラ市の情報支援ということで、昨年夏、5日間ほど行ってきました。ミズーラはモンタナの、地図で言うとこの辺りで、とても自然もすばらしいところで、機会があればまた家族を連れていきたいと思っています。私自身の特性、ディスレクシアで、学齢期、すごくつらい時期を送りました。そのためにいつも思っていたのは、自分は生まれてくる価値がある人間だったのかな、生きていく意味があるのかな、どうやって死のう、いつ死のう、そんなことをずっと考えて、学齢期、多感な時期を過ごしてきました。



いろいろなきっかけがあって自衛隊に入り、そこで自尊感情を取り戻せて、自分の力に気づくことができ、夜間の短大に通い、教員になり自分の特性をカミングアウトできて、ちょっと明るく、こんなふうにならなりました。そんな私が視察の機会をいただきました。私の夢、願いがあります。それは、死ぬ間際、瞬間に、また次、生まれ変わったとしても、このディスレクシアという特性をもってまた生まれてきてもいいかな、そんな明るい気持ちで思うことができ、死んでいけたらいいかな、どんな障害があっても生まれてきてよかったと思えるような社会を目指していきたいなと思っています。

ミズーラを見させてもらって、非常に思ったのが、物理的にも人的にも心的にも、支援が行き届いているなというか、ベースができていたことを感じました。ミズーラに入る前に飛行機の待ち時間があつたのでシアトルの図書館に行きました。入り口に、ボタンを押せば自動で開くものもあり、一番最初のジム・マークスの言っていたボタンのデザインがいいとおっしゃっていましたが、押せばすぐ開くドアがありました。図書館の入り口さえもアクセスしやすくなっていて、中に入ってコンピュータでの図書検索も誰でもできるような機器がそろっていました。

先ほど美香さんの話にあつた支援ソフトの JAWS も入っていました。帰ってきたら日本語版もあつて、早速購入しました。そんなすばらしいものも配備されていました。普通に、どんな特性があつても、拡大させたり、いろいろな器具があつて、すばらしいなという印象を持ってきました。

画面は、廊下、通路にパソコンで、何階のどこにあるよという書物を調べていたら、床面に大きく表示がありました。これは車いすの目線で、どんな人でも目につく工夫があつた。

建物もらせん状になっていて、自然に下に降りてくるつくりでした。目線の高さには、本棚の横にどんなカテゴリーがあるか、ここはカセットの棚、ここは CD-ROM、VHS、DVD もあるよと、同じ本のタイトルであっても CD で聞くこともできるし、DVD で見ることもできたり、普通の単行本でも読め、選べる場所にも驚きました。

これは飛行場で見た車いすです。幅が 90 センチくらいあつて、日本で見たことのないような大きなものでした。どんな人でも利用できることがベースにある町なんだと思いました。

これは DSS の入口にあったボタンです。押しやすい、軽い力でも操作できるものでした。DSS に行って話を聞いて、最初に驚いたのは、やはりジム・マークスさんが言ったように、障害を聞くのではなく、その人の願いを聞くことによってコーディネートしていくことにまず驚きました。日本だと、まだ障害名を聞いて、担当者が決まる。その人の願いというより、その人の障害名、その人に名前があるにもかかわらず、障害名が先行してしまう、そんな側面がありますが、向こうでは違うなど実感できました。

障害がある学生さんとも話げできました。とても明るくて、こちらに帰ってからもメールのやりとりもさせてもらっていますが、日本だとちょっと控えているのが当たり前というか、暗くしている人が当たり前というような時期、今は変わってきているかもしれませんが、そんな感じもあるのにとても明るかったです。福祉機器もスタイリッシュでおしゃれでした。この女性は難聴と目の視力も失っていく過程にありますが、とても明るくて、今のうちに点字をマスターするんだということで、すごい短期間にマスターされていました。障害者になることに対して、それほど悲観的ではない、まったく悲観的じゃないという気がしました。

この方は、「僕はスクーターは要らないんだ」と言いながらすごいスピードで走っていました。時速 45 キロくらいは軽く出るよって言って楽しく走り回っていたので、障害というよりは特性というか、強みぐらいに感じて生活してみえるなど感じました。支援機器も、音声化するものとか、コンピュータを操作するインターフェイスとか、拡大するものとか、生活用品の中でも、大きさ、色、そういうものを配慮するだけで、その人が生活しやすいよってというものを、いっぱい見ました。

これは、作業所に行ったときのものです。働いている方は、ここでもとても前向きで明るく働いていました。その方と話をしていると、利用者さんができないところに目を向けるのではなく、できるところに目を向けると。また、できる環境作りをすると。これは何かと言うと、製材した木をうまく詰めないからダメではなく、うまく詰めるよって環境作り、この枠をつくるよってできる、そういう配慮をするだけで、この人たちはしっかり働けるよってできる。本人に頑張り、頑張りではなく、そういうところに工夫しているよってということで、そういう視点は大事だなど思って帰ってきました。休憩する場所には、壁一面に、余暇を楽しんでいる写真がはってありました。

これって何か素敵だな、人として楽しむよってことをも作業所で保障してもらっている、また、それを視野に入れてもらっているよってのはいいことだと感心しました。これは違う作業所ですが、ラベルをボトルにはるのにも、補助具があるよって簡単に貼れるよってなっていました。物の工夫によって誰でも働けるよって喜びにつながったり、休憩するところにはテレビやピアノ、パソコンや、談話できるよってところ、ビリヤード、いろいろなものがありました。



日本の作業所に行くと、こんなものはあまりなくて、働く場だけというところが多いですが、余暇を楽しめるよってところも含めて支援しているよってことは、人としての権利を認めている現場、そういう国柄なんだよってことを実感しました。物理的にもいろいろな支援ツールがあったよってことに驚きました。

この写真は、歩道で、歩道と車道の間にこれは段差がありすぎるかなと思っただけですが、聞いてみると、目が不自由で杖をついていられる方に、まったく歩道と車道の間に段差がないよって分からなくなるからよってということで、段差を意図的につくってあるよって話を聞きました。

このよっての段差なら車いすでも難く行けるから、両方の特性をカバーしたデザインになっているよって

思いました。

人的支援も、求めればもらえます。サービスをもらうばかりではなく、先ほどの大学生2人の方は、自分がサービスできる場面ではサービスしています。互いにサポートし合える環境、それが普通という社会性がいいと思いました。身をもって感じてきたことは、人はそれぞれ違っていいということをベースにみんなが感じている国柄、地域柄なんだなど。それによって、障害をもとにその人を見るのではなくて、人として、初めから見る、ということがスタンダードになっているんだと思いました。つまり人権、権利としてその人を認めることで心的にサポートしている現状だと思いました。日本だと「弱者」だから、してあげる、という面もありますが、そうではなくて人として見ているという気がしました。

最後になりますが、いろいろ見てきて、特別じゃなくて当たり前の支援、「人として」ということをこの日本でも、どんどん広めていければと思います。日本にはあたたかい風土があるので、それに誇りをもちながら、見てきたことをどんどん生かして、広めていって、よりよい社会を目指していきたい。そうすることが、自分が死ぬ瞬間に、また生まれてくるとき、ディスレクシアとして生まれてきてもいいなと思って死ぬことができるかなと思いました。

ジョージ・カーシャー講演

DAISY コンソーシアム事務局長、RFB&D(Recording for the Blind & Dyslexic)、IDPF 理事、NIMAC

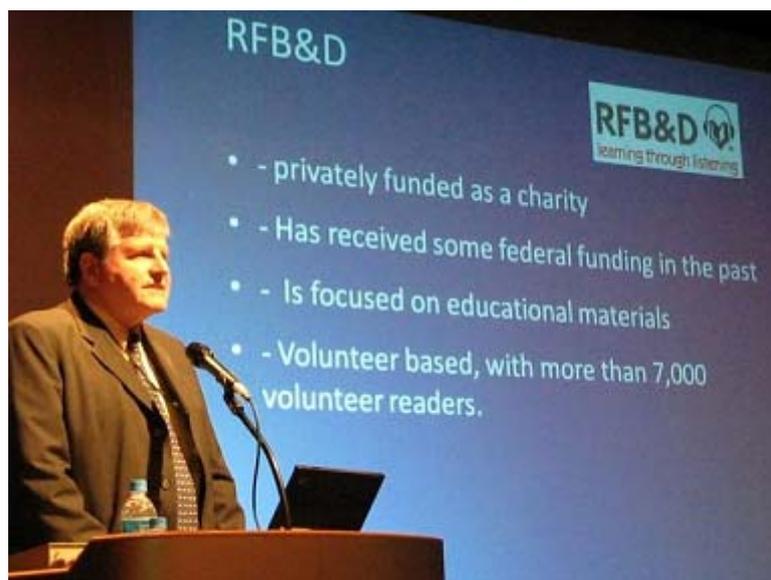
「アメリカにおける図書館サービスと DAISY 規格について」

アメリカにおける図書館サービスネットワークと DAISY 規格について話をします。アメリカには3つの図書館があり、1つは議会図書館です。これは視覚・身体障害者のための国立図書館です。もう1つが RFB&D (盲人録音図書館)で、もう一つがブックシェアです。

まず視覚障害者のための図書館から話しましょう。これは議会図書館に内設されています。視覚障害者、ないしは身体に障害があり問題を抱えていることが証明される人は無償で使えます。そのためには医師の診断が必要です。ここは 50 万人近いユーザーがいます。無償でプレイヤーが提供されます。すべての人に対して無償です。今現在はまだ古いカセットプレイヤーが使われていますが、来月から DAISY プレーヤーが配布されます。毎月2万台が提供されます。日本のプレックスターという会社が提供しています。出荷が既にはじまっていますが、今後が楽しみです。

議会図書館は、専門の音読者を使っています。有償でナレーションをやっていて、非常に質の高いすばらしい声の録音図書になっています。毎年 2000 タイトルほど新たにつくられています。いま現在、1万3千タイトルが蔵書として存在します。いま現在は主に高齢者が多いです。若い視覚障害者の数は非常に限られています。しかし、ほとんどの人たちは年を取るにつれ、目の問題を抱え失明するケースが出てきます。そういう人たちがサービスを利用しておりますから 50~80 代、90 代や 100 歳以上の人もいます。素晴らしい図書です。DAISY ですし、見出しのナビゲーションもあります。ページ数はできませんが、学生対象の教材ではなく、あくまでも人生を豊かにするための図書です。また専門誌、雑誌も含まれています。

次に、視覚障害者そしてディスレクシアの人のための録音をしている、Recording for the Blind & Dyslexic (RFB&D)、ここは民間の慈善団体です。多少は助成金がありますが、ほとんどは寄附金です。教材を中心に製作しています。ここは 60 年以上の歴史を持つ組織です。5 年前、ここから DAISY 図書を CD-ROM で製作し始めました。現在は 4 万 3000 タイトルが存在します。毎年 7000 タイトルほど作っています。これらを約 10 万人の学生に配布しています。利



用するにあたり、登録制です。配布に際しては、先ほどの議会図書館やブックシェアと同じような形で配布をしています。従って著作権法の例外規定が適用されています。今のところ、音声つき DAISY がフルナビゲーションで提供されています。ページ数も含まれています。もちろん学生は本を沢山読むため速く検索しなければなりませんので、DAISY のこのような機能が備わっているということは非常に役立ちますし、評判も高いです。

教科書は非常にグラフィックが多い上に、情報がかなり豊かです。単なるテキストではなく、グラフィックも非常に多いので、ボランティアを使ってグラフィックスの記述を行っています。そのためには記述ボランティアが必ず中身が分かっている人であるという確認のためにテストを行います。そして専門分野の学位を持っていることが確認できれば、その内容に関して録音をしてもらいます。例えば物理学に関する本であれば、理科、科学の先生が起用されます。数学ならば、数学に通じた人がナレーションをします。そのような専門知識がなければ、朗読を行えません。これが RFB&D という組織のやり方です。毎年 7000 タイトルほどがつくられています。アメリカでは新刊が毎年 30 万冊ほど出てきています。が、例えば、議会図書館では、毎年 2000 冊、また RFB&D が年間 7000 冊の新しいタイトルを出していても、まだまだ数が足りません。

RFB&D はこういった教材を幼稚園から高校3年生18歳まで提供しています。けっこういい仕事をしていますが、その6割は大学レベルの教材です。それでもなおかつ、数は足りません。高校3年生まではある程度の本が用意されていますが、大学に行きますと、必要な本の数が圧倒的に増えます。したがって、大学レベルでは、自分たちに必要な本がなかなか手に入らない現状があります。先ほど、ジムと美香から、毎年、数百タイトルをつくっているという話がありましたが、RFB&D やブックシェアの仕事では図書が足りないためです。

さて次にブックシェアですが、ここは障害者対象の最も新しい組織です。それほど年数はたっていません。定かではありませんが、7~8 年前にできたと思います。ジム・フラクトマンが創始者です。彼はアーカン・ストーンという会社の創始者です。アーカン・ストーンを売って、幾つかのサービスを提供する組織をつくりました。そのうちの1つが、ブックシェアです。アーカン・ストーンでは相当数のスキャナーを売っていたという実績がありましたので、例えば1人で5000 冊、スキャニングをしたという視覚障害者の話を聞いています。そのスキャンしたテキストを他の人達に提供をしていいかという問い合わせがあったとき、勝手に提供すると違法行為になります。そこでブックシェアではジムが個人的に知っていた視覚障害者に連絡を入れ、彼らから本を譲ってもらい、ブックシェアを介して本の配布を始めました。当初は草の根サービスからスタートしました。

例えば、小説などは、かなりスキャニングはうまくいきます。一方、教科書は非常にグラフィックが多いだけに、ないしは、科学的な内容のものはスキャニングには向いていません。したがって、ほとんどジムがブックシェアで手にした本は「人生を豊かにする図書」など、簡単にスキャニングできるものばかりでした。一方、教科書は非常にスキャニングが難しいという問題がありました。ブックシェアは、テキストオンリーです。録音音声はありません。RFB&D は

オーディオと DAISY ナビゲーションですが、ブックシェアはテキストだけで音声はありません。ブックシェアでは支援技術を活用しています。つまり、障害者は読むための支援技術を活用しています。CD-ROM は使わず、最初からダウンロードですがテキストオンリーの小さいものですので、録音図書と比べてダウンロードは比較的速くできます。よって、様々なテーマを扱った内容になっています。教育だけではなく、人生を豊かにする図書などもあります。昨日、質対量の話をししました。ブックシェアは、お金をかけて質の高い本とそうでない本との弁別を始めています。図書コンテンツの質の格付けをしているところです。もう 1 つ、ブックシェアと RFB&D はいずれも、議会に働きかけ法律を可決させるなど、我々は直接出版社からいろいろな材料がもらえるよう働きかけをしているところです。

アメリカにおいて議会図書館は、視覚障害者、身体障害者を対象にサービスを提供しています。が、これは高齢者が中心です。RFB&D は教育関連が中心です。RFB&D とブックシェアは学生の審査において、同じ基準を使っています。それは、議会図書館よりも簡単な基準



です。いずれの組織も資格のある人というのは、自分は障害があり、標準的な印刷物を読めないということを書いた紙にサインしてもらっただけです。議会図書館は医師の診断書が必要です。ディスレクシアないしは学習障害の人たち、例えば精神科医に、身体に問題がある場合、身体検査を受けるのは非常にお金がかかります。学校側でお金は出せませんので、RFB&D やブックシェアは医師でない人が検査をし、障害を確認する方法をとって

いますが、それに対しては賛否両論があります。

ブックシェアは元々、NIMAS フォーマット、全国指導教材アクセシビリティ標準規格にもとづいて教材を提供していますので、法案が通ったので、幼稚園から高校3年生にいたるものまでを DAISY フォーマットで作るようになりました。これは XML テキストです。ナビゲーション録音ではなく、テキストだけなのですが、これを受けてブックシェアは DAISY 版をつくっていますが、人の音声はありません。170 ぐらいの本が既に変換されています。全部で1万 3000 あるうちの 170 が終わっています。そして RFB&D はこれに応じて音声をつけます。TTS ないしは肉声のナレーションによって加えます。RFB&D は 10 歳までの対象図書は TTS でなく、肉声をつけたほうが良いと決定しました。生徒が十分に内容をわかるためには合成音声ではダメで、小学校3年生のものまではすべて肉声になります。

RFB&D や議会図書館は非常に古い組織です。一方で、ブックシェアは新しい組織ですので、もっと進歩的な取り組みをしています。例えば議会図書館は、暗号化によって、本を保護しています。従って本を手にした場合、それに合ったプレーヤーがないと聞くことができません

ん。この認証を受けているプレイヤーは少ないのですが、来月からは無償で提供されるようになります。その他、ヒューマンウェアのストリームが1つですが、プレクスターのポケット版も数週間以内に承認されると思います。あと1つ2つ、プレイヤーが使われていると思います。

RFB&D、ここも暗号化技術を使っています。DAISY タルライツマネジメント、この中には特定の本、PDTB があり、これを使っています。もっとも近代的な考え方を持つブックシェアは暗号技術を使っていません。これを使うと正当な利用者が排除される可能性があるという考えのもとに使っていません。が、一方で出版社はブックシェアを危惧しています。「やめろ」とまでは言っていないが、出版社側としては、この点を多少懸念しています。暗号技術を使わないために、障害のない人たちの手に渡ってしまうのではないかと心配しているのです。ブックシェアは代わりに、ウォーターマークを使っています。電子透かしです。障害のある人だけが利用しています。ブックシェア配信であると確認するためです。もう1つ、フィンガープリントがありますが、その人の身元の確認をします。その本がその人を対象に、ダウンロードされると。その人の名前が本についていますので、万が一ほかの人に渡した場合、わかってしまうというのがフィンガープリントです。



将来的に出版社の協力を得て、今現在は議会図書館、RFB&D、ブックシェアと出版社の関係は決して良好ではないのですが、法律ができて出版社と協力できることを期待しています。ブックシェアは出版社に働きかけをし、協力も呼びかけています。今現在、出版社からNIMAS だけではなく、この個々の契約に基づいて本を提供してもらい、ブックシェアから提供できるようにしようとしています。海外のものにも興味を持っていますので、他の国々とその種の契約を結ぶこともしています。コレクションの一部はパブリックドメインなので、世界のどなたでもダウンロードしてもらえらることもできますね。

米 国 視 察 報 告

～NIMAS 会議と ATIA カンファレンスで考えたこと～

(社福)日本ライトハウス 点字情報技術センター

福井哲也

私は、NPO 法人支援技術開発機構のご助成により、2009 年 1 月 26～31 日、同法人の濱田麻邑氏・日本ライトハウス盲人情報文化センターの久保田文とともに、米国視察の機会をいただいた。訪問先はフロリダ州オーランドで、同地で開催された NIMAS (National Instructional Materials Accessibility Standard = 全米教材アクセシビリティ規格)の会議を傍聴し、また ATIA 2009 Conference (Assistive Technology Industry Association = 支援機器工業会の展示会)を見学した。

折しも日本では、2008 年 9 月に教科書バリアフリー法(障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及の促進等に関する法律)が施行され、障害児のための教科書供給に新たな展開が見え始めている。拙い英語力と予備知識の不足から、特に NIMAS 会議については、内容の大枠を理解するにとどまったところもあるが、教科書供給における電子データ活用の先進的取り組みの一端に触れたことはまことに貴重な体験であった。

以下、点字出版施設で点字教科書等の製作に携わる立場から、今回の視察を通して考えたことなどを述べたいと思う。

1 . NIMAS 会議

会議は二日間にわたり行われ、初日(27 日)が NIMAS Implementation Advisory Council Meeting (実施諮問会議)で、システム全般にわたる事項の討議、二日目(28 日)が NIMAS Board Meeting (規格委員会)で、より技術的な課題についての討議が行われた。

(1) NIMAS の概況

米国では、幼稚園から高校段階で使われる教科書類を出版する会社は、活字書を直接利用できない生徒のために、その電子データを提供することが義務付けられた。NIMAS とは提供すべき電子データの規格で、XML をベースにしている。NIMAS の規格策定にあたっては、DAISY 規格がほぼそのまま採用されたと聞く。そして、全米の教科書会社からのデータを一括管理し、必要に応じて提供する機関が NIMAC (National Instructional Materials Accessibility Center)で、これは米国有数の点字出版施設である American Printing House for the Blind の中に設置されている。NIMAC はインターネット上で教科書のデータの授受を行う。

NIMAS データの利用形態は大きく次の二つに分かれる。一つは、NIMAS に対応するソフトウェアを組み込んだパソコン等を用い、生徒が直接スクリーンや点字ディスプレイ等で読

んだり合成音声で聞く方法。もう一つは、専門業者(AMP = Accessible Media Producer)や教師の手により、NIMAS データを元に大活字版・点字版・音声版などを製作する方法である。NIMAS データの提供は、各地の認可機関(authorized user)を通じてのみ行われる仕組みになっている。

NIMAC のサーバーの書庫にはこれまでに約 13,000 タイトルのデータが登録されており、その内訳は 5 分の 1 が教科書(textbook)、残りが副読本(supplementary reader)である。2008 年のダウンロード数は約 1,200 タイトルで、その多くは教科書であった(教科書の登録タイトル数に対するダウンロード数の割合は約 35%、副読本のそれは約 3%)。ダウンロード数は前年に比べ大きく伸びてはいるが、書庫に蓄積されたタイトル数に比較するとまだまだ小さな数字と言わざるを得ない

利用が広がらない原因としては、現場の教師が NIMAS のシステムをよく知らなかったり、障害児がそれを必要としているのにそのことを理解できなかつたりすること、利用手続きが複雑なこと、さらに NIMAS の規格や利用のためのソフトウェアなど全てが発展途上で、必ずしも満足に機能する状態にないことなど、会議の中で実に多くの課題が論じられていた。また、教科書会社から提供されるデータに質的に問題のあるものも含まれている(書誌情報が欠落していたり、図や写真に適切な説明が付されていないなど)ことも多く話題になっていた。

(2) NIMAS でできること、できないこと

NIMAS は XML をベースにしているので、そのテキストデータから大活字版の文章部分を作成することは容易であり、見出しの構造も反映させられるはずである。表形式のデータについても(会議の中ではほとんど言及されていなかったが)対応は可能と考えられる。

ソフトウェアによる点字や合成音声への変換も可能である。点字化や音声化は精度 100% というわけにはいかないし、合成音声については発音やイントネーションが肉声とは異なり多少不自然になることは避けられない。しかし、英語には漢字の読み下しや分かち書きの問題がないため、機械点訳・機械音訳の精度は日本語に比べて数段上と言える。日本語の場合、機械点訳・機械音訳したものを、人による校正を経ずに教科書として使用することは考えにくいし、またするべきではないが、英語では供給のスピードやコストの低さを考慮すれば、それも現実的選択の一つと考えられているようだ。また、人による校正を行うにしても、製作の手間の軽減につながるのは確かである。

テキストと音声・画像を同期させたマルチメディア DAISY も、NIMAS データを利用し合成音声を使えば、製作を相当自動化できるものと考えられる。

数式については、以前はその記述方法が規格化されていなかったため、数式部分だけ画像データではめ込まれたりしていたが、MathML と呼ばれる記述方法が NIMAS に組み込まれたことから、点字化・音声化の自動処理が可能になったと言う(ただし MathML はかなり複雑で、これを作成するには高度の技術を要するとの指摘もある)。

楽譜についても、MusicML というような記述方法がアイデアとしてはあるようだが、ま

だ研究段階である。MusicML が NIMAS に組み込まれれば、楽譜部分の自動処理も可能になると言われる。もっとも、楽譜の表現形式は数式に比べてかなり複雑かつ自由度も大きいので、どこまで規格に盛り込めるかはまだ不明である。

図・イラスト・写真などのグラフィックデータは、多くは JPEG 形式で、一部は PNG や SVG などの形式で文書データに付けられている。グラフィックには多くの課題があるが、まず問題になったのは、データサイズが非常に大きくなることだ。1冊の本が数 GB という例も報告され、通信インフラに過大な負担がかかると指摘されていた。そのため、画像の解像度を 300～600dpi までに制限することが論議されていた。

グラフィックデータは、原図をそのままか単純に拡大して印刷または画面表示するには大いに有効だが、弱視者に見やすくするためデフォルメしたり、表現方法を変えたり、一部の情報をカットするなどの加工が必要な場合には、人の手による処理が不可欠となる。また、触図の作成に関しては、触読の特性を考慮し一からデザインしなおす場合も多く、原図のデータが省力化に結びつくケースはかなり少ないと考えられる。

教科書を音声化して利用する場合、グラフィックは言葉による説明に置き換える必要がある。点字化においても、触図にするよりも言葉による説明の方が有効な場合は多い。このため、グラフィックデータには言葉による説明を付加することが求められている。しかし、適切な説明文を作るには、図や写真で表現しようとする内容を理解する力と、音声や点字でそれを伝えるテクニックが必要で、実際に教科書会社から提供されるデータの中には、説明文がほとんど意味をなしていないものもあると指摘されていた。これは NIMAS の規格そのものの問題とは性質が異なる。会議では、図や写真に説明を付けるためのガイドラインや模範事例集の必要性が訴えられていたが、それでどこまで改善が図れるのかは私にはわからない。

(3) なぜ NIMAS なのか？日本もまねるべきか？

今回の会議を傍聴したかぎりでも、NIMAS はその実施運用面で多くの課題をかかえていると同時に、規格そのものについても多岐にわたる高度な要求が提示されている。規格の高度化・複雑化(例えば MathML・MusicML の導入)はデータ利用をより効果的に行うために必要とされているが、それは教科書会社の負担を増大させ、実施面の問題をさらに大きくする危険もあるのではないかと感じたのである。

しかも、前述のように、NIMAS が障害児の教科書問題の全てを解決できるわけではない。そのことを会議メンバーはどうとらえているのかに私は大きな関心があったので、休憩時間に何人かの人に、グラフィックの問題などを例に尋ねてみた。その結果、この点についての彼らの認識は私の見方とほとんど同じだと理解した。彼らもけっして NIMAS が万能と考えているわけではない。ただ、二日間の熱い議論を聞く中で感じたのは、NIMAS で救いきれない部分はもちろんあるが、NIMAS で実現し得る部分を最大限広げようという強い意志と

使命感だった。活字教科書の出版には全面的にコンピュータが使われているわけで、その電子データを活字以外のメディアで教科書を読む生徒のためにもフルに活かすことが最も合理的だという信念があるのだろう。だからこそ、道は遠く険しくとも一歩ずつ前進しようとして努力しているのだと思う。

では、日本でも NIMAS を手本にシステムの整備を進めていくべきであろうか。教科書バリアフリー法の施行により、日本でも教科書会社は文部科学省検定教科書の電子データを文科省に提供することが義務付けられた。文科省はそのためのデータ管理運営機関の設置を予定していると聞く。拡大教科書・点字教科書等を製作する団体・施設は、この機関を通じて必要な電子データを入手することになるようだ。

日本のシステムはこれから運用を開始するところで、予測のつかないことが多いが、教科書会社が提供するデータの形式は PDF、画像については JPEG と決められた。このデータは、あくまで拡大教科書・点字教科書等を製作するために利用されるのが前提で、米国の NIMAS データのように、生徒がそれを直接パソコン等で読むことは想定されていないと思われる。PDF/JPEG というのは、教科書会社にとってそれほど大きな負担がかからない形式として規定されたのかもしれない(きちんとしたデータを供給するのに本当に負担が少なく済むかはわからないが)。まずはその運用の実態を見守りつつ、具体的問題点を洗い出すのが先決であろう。

また、日本語は欧米の言語に比べて、機械点訳・機械音訳の精度を上げることが難しいという現状は直視しなければならない。すなわち、日本の方が点字版・音声版を製作するのに自動で処理できる範囲が狭いということであるさらに、レイアウト、グラフィックの処理等、人手をかけざるを得ない部分の質をいかに高めていくか、わたくしの想いはどうしてもそこへ向いてしまうのである

もう一点、教科書というのは、学校教育の一つのツールであるという位置づけを再確認したい。すなわち、教科書を全ての生徒にとってアクセシブルにすることは極めて重要な課題ではあるけれども、活字教科書の中の写真・イラスト・図などを含む全ての内容を点字(触図)・音声・拡大等で伝えなければならないかは検討を要すると思うのだ。例えば、晴眼の生徒には教科書の図や写真で容易に説明できることでも、視覚障害の生徒には実物観察(教室外含む)、立体模型、あるいはもっと別の方法が有効な場合がある。「教科書で」教えることだけに拘らない方がよいように思うのだ。特に、一般校で学ぶ障害児の場合には、現場の教師・教科書製作者と専門家がタイアップして、教科書の何をどのようにアクセシブルにするかを検討できる体制が必要ではないだろうか。

2. ATIA カンファレンス

今年で 10 周年を迎えた ATIA の展示会は、28～31 日の 4 日間開催された。障害者の情報・コミュニケーション機器を中心に約 130 社が出展し、また展示会と並行して、テーマ別の 1 時間程度のセッションも数多く行われた。私たちは 28 日の夕方と 29・30 日に会場内のブ

ースを回り、いくつかのセッションにも参加した。

(1) 特に印象に残った製品

gh PLAYER (gh, LLC) : NIMAS ファイル、DAISY ファイル、デジタル・トーキングブック、テキストファイルなどを音声・拡大文字・点字で再生するソフトウェア。MathML による数式のスクリーンへの表示と音声読み上げ、表形式のデータをキー操作でセルごとに移動しながら読ませる機能などを体験した。ショートカットキーをわかりやすく配し、洗練された操作性を実現していた。デジタル図書の近未来の形を実感させるソフトウェアである。

Music Scanning, Lime, GOODFEEL (Dancing Dots Braille Music Technology, L.P.) : 視覚障害のミュージシャンをサポートするソフトウェア群。墨字楽譜をスキャナで読み取り、音符を一つずつ音声で読み上げたり、点字楽譜に変換。パソコンのキーボードから音符データを入力・編集し、墨字楽譜としてプリントするなど、多彩な機能を持つ。スキャナの認識精度が気になるところだが、魅力的な製品と感じた。

Braille Star 80 (Handy Tech North America) : ハードウェアで最も印象に残った製品。80 マスの点字ディスプレイだが、特長は点字セルの下端の方が少し浮き上がるようにカーブしていること。点字ディスプレイは、パソコンのキーボードの手前に点字表示部がくるように配置するのが普通だが、こうすると点字を読む手は指をやや曲げた形となる。この手の構えのとき、指の腹が点字セルに自然にフィットするように、カーブが付けられているのである。これが実に読みやすい。

Pocket Money Brailier (independent living aids, LLC) : 米ドル紙幣は、1 ドルから 100 ドルまで全てサイズが同じで、触覚識別マークもない。そこで、紙幣に点字と浮き出し文字で数字を刻印するのがこの道具。平たいクリップのような物の間に紙幣をはさみ、パチンと押すだけのローテクの道具である。自分の財布の中の紙幣だけでも触覚で識別できるように、外出前に印を付けておくのであろうか。店で受け取るおつりは店員を「信頼」するしかないが、こんな強引な方法でも金銭を自分で管理しようという発想がおもしろいと思った。(ちなみに同社では、Note Teller という、紙幣を差し入れると金額を音声で知らせてくれる小型の電子機器も発売している。)

(2) 触図に関するセッション

30 日の夕方、会場で過ごした最後の時間に、“ So, What About the Graphics for Students Who Read Braille? ” と題するセッションに参加した。発表者は Lucia Hasty (Rocky Mountain Braille Associates, Tactile Graphics Committee of Braille Authority of North America 議長)、教育関係で長く触図に関わってきた専門家である。

彼女は、「子どもたちの教科書では、文章中にはなんの説明もなく、単に絵だけで表現されているようなところがたくさんある」というようなことから話し始め、「墨字の図をなんでも触図化すればよいというものではなく、どれを触図にするかの見きわめが大切」「触図にする場合は、いかに必要な情報だけを残し、デフォルメするかが重要」といった、最も基本的な考え方をレクチャーした。その内容に目新しいことがあったわけではないが、私

たちが点字出版の仕事の中で、触図を作る際に何を大切にし、何に心を配っているかということと彼女の話とがあまりに一致していたので、ある種の感動を覚えたのだった。

セッションの初めに、普段触図製作にどんな道具を使っているかの確認があったが、参加者は異口同音に ViewPlus Technologies の Tiger Braille Printer を挙げていた。この点字プリンタは、日本でも輸入販売されている。展示会の各社のブースでも尋ねてみたが、比較的精細な触図が描けるプリンタとして、Tiger 以外の情報を得ることができなかった。なお、American Printing House for the Blind では、亜鉛板で図を作るのに PEARL という機械を使っているとのことである。

最後に私が、「点字出版での触図製作をもっとコンピュータ化したいと思うが、今の点字プリンタの描画機能では満足できない。手作りの亜鉛板の図の方が多彩な表現が可能」と言ったところ、「あなたの悩みはよく理解できる。解決策はわからないけれど」と答えてくれた。

以上、個人的見解や印象が中心となってしまったが、これをもってこの度の米国視察の報告にかえさせていただきたい。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった NPO 法人支援技術開発機構に心より感謝申し上げたい。

24th Annual International Technology & Persons with Disabilities

Conference 参加報告

—主にロービジョンの支援機器について—

福岡教育大学教育学部 准教授 氏間和仁
(特別支援教育講座)

2009年3月16日から21日にかけてロサンゼルス Los Angeles Airport Marriott ホテルを拠点に開催された。この会議は California State University Northridge(通称 CSUN) が毎年開催する支援技術・機器や規格等に関する国際的な会議であり、最新の支援機器やそれにまつわる研究等が一同に会する点で支援技術に携わる者にとっては興味深い場である。その中で特にロービジョンの支援機器に関する内容について概括する。

1. 拡大読書器について

据え置き型の拡大読書器は液晶ディスプレイを利用した形式が一般的となり、画面の大型化や高精細化、アームによるディスプレイの位置のフレキシビリティの向上、PCなどの外部入力や遠用の拡大機能の装備などが共通してみられた特徴であった。近用においても画像の高精細化や遠方画像の取り込み、画像の保存などが共通して見られた特徴であった。中でもユニークなものをいくつか取り上げる。

下図は Optelec 社製の ClearView+ という拡大読書器である。据え置き型で液晶ディスプレイを表示装置にした一般的な拡大読書器の形式である。下図の左の写真はオプションを取り付けて操作系を覆い隠しバーコードリーダー機能を持たせた状態である。ClearView+ はこのようなオプションを取り付けることで、左端の写真に示したようなバーコードを刷り込んだコントロールカードを拡大読書器のカメラに写し、それを読み取らせることで操作する形式をとることができる。つまり、40ポイントというコントロールカードを ClearView+ に写して、それを本体が認識すると、印刷された文字の大きさによらず画面に映る文字サイズが40ポイントに調整されるといった具合である。ClearView+ は下図の真ん中の写真のようにディスプレイが90度回転して縦長にできる。ディスプレイを縦長にすると当然画像は反対に90度回転され普通に読むことができる。また、その右側の写真のように眼前までディスプレイをせり出すことができる。ディスプレイを回転させたりせり出させたりすることができるのは液晶タイプのディスプレイで軽量化されたことのメリットの一つであろう。ClearView+ はディスプレイの仰角と水平角の両方を操作することができるのも特徴の一つである。



下図は ELMO 社製の VuHorizon VH-9 である。スタンダードな形式の据え置き型拡大読書器の一つである。VH-9 は左の写真にあるように、網膜色素変性症の人に対応するために低倍率の画像も鮮明に映すような配慮が施されている。真ん中の写真のようにディスプレイをせり出して仰角を操作することができる。また、操作盤は手前に配置され操作性を向上している。操作盤にはホールド機能が付いており、御操作を防ぐ工夫も施されている。XYテーブルにはX側とY側の台のそれぞれに持ち手がついており、テーブルの操作性の向上を遂げている。



下図は sight enhancement systems 社製の WatCam という拡大読書器である。写真をみて分かるとおおり 10cm 四方程度の大きさで、650g と小型軽量であり、オプションにキャリングケースが用意されていることから分かるとおおり携帯型拡大読書器の一つである。WatCam は遠方と近方の両方を映し出すことができるタイプの拡大読書器である。写真の左側が近方を映す状態である。真ん中の写真で分かるとおおり、出力は、USB、VGA、コンポジットを備えており、映像を PC、コンピュータ用ディスプレイ、一般のテレビに映し出すことができる。このように、今回、拡大読書器で表示装置として PC を用いたものを多く見かけた。写真の右側が遠方を写す状態である。右側の写真では WatCam の正面に丸い部品が見えるが、これは近方を写すときに取り付けていた凸レンズである。操作系は全て



本体に備わっており、大きく、配色と形の異なったボタンで視認性の向上が施され、快適に操作ができるようになっていた。

下図の写真は、APH 社製の MaximEyes という据え置き型拡大読書器の一つである。この拡大読書器にはマウスが取り付けられている。このマウスの役割はカメラの位置を移動させることである。つまりマウスを前後左右に動かすと、本体に取り付けられたカメラがマウスの動きと同調して移動する機能が特徴的である。写真の右側と左側とでは液晶ディスプレイの奥に取り付けられているアームの位置が異なっていることが確認できる。これは、マウスを左から右へ移動したのに同調してカメラが左から右へ移動した結果である。



下図の写真は Optelec 社製の Far View という携帯型拡大読書器の一つである。Far View は通常の近方の拡大読書器と遠方の拡大読書器の両方の機能を備えている。通常の携帯型拡大読書器としても使えるが、Far View のコンセプトとして PRL の活用が挙げられる。Optelec のセッションで聞いた話であるが、通常の拡大鏡や近方の拡大読書器は読書中機器本体が移動するのに同調して視線を移動する必要があるが、中心暗点などがあり PRL を活用して読書しなければならない人にとっては苦勞があった。そのため、画像を取り込んで、取り込んだ画像を画面内でスクロールして利用する、新たな携帯型拡大読書器の活用法を提案した機器である。確かに、写真右手にあるように取り込んだ画像に対して行の右端と左端を指定することができ、取り込んだ画像を拡大してスクロールさせながら読書すると、行末の右端のラインで自動的に行替えする機能があるなど、視線の移動や、取り込んだ画像の活用法について検討がなされた機能が取り入れられた仕様になっていた。このような近方用の活用のみならず、遠くに示されている時刻表や授業中の板書などを取り込んでお



いて後で自分のペースで見直すなどの遠方の読書にも活用できることを提案していた。画

像は 100 枚保存でき、大きさは 168mm×81mm×33mm、重量は 290g と小型軽量である。日本ではこの春 Active View という商品名でタイムズコーポレーションから発売が始まったばかりの機種である。

右図の写真は Reinecker 社製の MANO という携帯型拡大読書器の一つである。最大の特徴は写真からも分かるとおり名刺より一回り大きい程度といったサイズの小ささである。74mm×89mm×21mm の筐体に 3.5 インチ TFT を備え、1 から 20 倍までの拡大、配色の変更、3 枚の画像保存が可能である。通常の携帯型拡大読書器のようにも利用できるが、イメージを画像ファイルで保存して、それを利用することができる。保存した画像を拡大表示した際の



パンニングは、MANO を机において上下左右に動かすと、それに同調して画像が本体を動かしたのと同じ方向にスクロールされるようになっており、小型画面による視界の狭さを補う工夫が施されていた。

右図の写真は ABISec 社製の Eye-Pal Solo である。据え置き型拡大読書器のように見えるが、本体の上に原稿を乗せると自動的にスキャニング及びOCRを行い、画面上にテキストを表示し、音声で読み上げ始める。画面を見ると分かるように、発声中の単語がハイライトされるようになっており、ロービジョンや全盲の人々以外にも、発達性読み書き障害のような人々にとっても利用しやすい機器であると思われた。



処理系は厚みのある原稿台に組み込まれていた。原稿台のサイズが A 4 大になっており、ガイドも備わっていて原稿をカメラに対して水平に置くことができるようになっていた。

下図の写真は enhanced vision 社製の Jordy である。携帯型拡大読書器と据え置き型拡大読書器、テレビ出力方とヘッドセット型拡大読書器、あるいは近方と遠方の拡大読書器の機能を兼ね備えた機器である。下図の左側の写真は遠方を見るためにヘッドセットした状態である。筐体の中には液晶ディスプレイが入っており顔を向けた映像がそのディスプレイに映り、ストレスなく遠方を見ることができた。液晶は輝度比も高く鮮明であった。



また右側の写真はステーションに Jordy を装着して近方用として利用している様子である。

2. 拡大鏡

拡大鏡も多種多様なものが出品されていた。全般的に LED 光源を使ったものが増えていた印象であった。CCTV のようなインパクトのある機器はみられないが、ロービジョンの読書支援機器の基本ともいえる分野であり、各社、質を高めると同時に用途に特化した仕様に挑戦しているようであった。ここでは、特徴的な仕様の拡大鏡を取り上げる。

下図の写真は SCHWEIZER 社製の PowerMag+ という拡大鏡である。PowerMag+ は本体にベースを組み合わせて利用する形式である。写真の左のようなキットのボックスがありベースと本体を自由に組み合わせて試すことができた。持ち手部分は握りやすい形状に工夫されていた。



下図の写真は ESCHENBACH OPTIK 社製の MAKROLUX という Stand Magnifier に類される拡大鏡である。写真の上側が従来型の 2.2 倍のモデルで、新登場したのが下側の 3.6 倍のモデルである。視界全体が均一の照度に保たれ、歪みもなく鮮明な視界といった印象である。日本ではまだ発売されていないとの説明であった。



右図の写真は、Maxi-Aids 社製の ATMAX という、Coil 社製のレンズを用いた照明付きの手持ち式拡大鏡の一つである。LED を光源にした照明付きの拡大鏡はめずらしくはないのだが、ATMAX はグリップを手で軽く握るだけで照明が点灯するといったタッチコントロール機能が施されていた。またグリップは手に密着するように素材と形状が工夫されており、握っていて疲れにくい工夫がされて



いた。写真は3倍の8273というタイプであるが、このシリーズはこのほかに5倍と7倍も用意されていた。

右図の写真はCOIL社製のVisual Tracking Magnifiersというシリーズの拡大鏡である。スタンプ型拡大鏡に類する拡大鏡である。レンズの対物側に半透明のタイポスコープを貼り付けたつくりになっている。したがって、レンズの中心に水平の帯状に明るい部分が見える。このスリット部に文字を入れて読むのである。こうして、一定の行のみを相対的にハイライトすることにより限られた行に注意を向け、ページの中の行を眼で追うことを助け、行替えの際の動きもスムーズになることを狙いとして作られているようである。



右図の写真はMaxiAids社製のMAGNIFICO PLUSという拡大鏡である。板から伸びた2本の支柱にレンズが取り付けられているといった見慣れない形状をしている。これはPDAやGPSなどの携帯端末を拡大するために作られた拡大鏡である。支柱の角度と、レンズの角度及び高さをそれぞれ操作でき、ねじで固定することができるため、様々な携帯端末に対応できそうであった。残念なことに会場に携帯端末がなかったためMAGNIFICO PLUSのみの写真を掲載した。



3. 画面拡大ソフト

ロービジョンの人々がPCを使用する際に必要となる場合がある画面拡大ソフトも進化を続ける分野の一つである。共通した特徴として読み上げ機能やマウスのナビゲーション機能といった具合に拡大機能以外の機能を含む傾向にあるようだ。

右図の写真はAi squared社製のZoom Text 9.18の画面の様子である。写真でも分かる通り、デュアルディスプレイ対応になっての登場である。それ以外の大きな特徴としてはパンニングがスムーズになったこと、Zoom Text Scriptingといわれるスクリプト言語を実装し、ソフトの動きをカスタマイズできるようになったこと、様々な機能の強調が行われること、Windows Vista



64bitに対応したことのようなのである。パンニングは拡大画面でのパンニングが全般的にスムーズになったこと、文字の入力時やアプリケーションソフトの動きに応じてスムーズにパンニングするようになったこと、マウスの動きに応じたパンニングがスムーズになったことなどが挙げられる。Zoom Text Scriptingは、特別に拡大画面に表示したい場合や、アラートなどのイベントで特に表示したい場所、Zoom Textを停止したい場合などにあらかじめプログラムしておくことで、Zoom Textのオリジナル機能とは異なった機能を追加する

ことができるようである。デュアルディスプレイ対応になり、写真のような表示が可能になった。つまり、セカンダリーディスプレイにオリジナルサイズで表示し、プライマリーディスプレイに拡大で表示するといったことである。この際、オリジナルサイズの画面には現在拡大されている場所を長方形でハイライトで示し、さらにそのハイライトをXYラインの交点で示すといったナビゲーションがついており、画面の全体と部分とを同時に確認しながら作業したいといったニーズに対応できるようになっている。もちろん拡張デスクトップにも対応している。Zoom-Text には、Magnifier と Magnifier / Reader が用意されているが、これまで通り、日本語化され際には読み上げ機能は引き継がれないとのことであった。なお、デュアルディスプレイ対応は ver.9 から実装されているようである。

Zoom Text 以外には下図の写真の左側に示した、Vision CUE 社製の i Zoom や、下図の写真の右側に示した IBM 社製の EVAS、また写真は割愛するが Ai squared 社製の Zoom Ware などが展示されていた。



Zoom Text と i Zoom に共通していたこととして USB メモリーを用いたアクティベーション機能がある。つまり、例えば Zoom Text USB の USB メモリーを PC に差し込むことで、USB メモリーが差し込まれている PC で Zoom Text が利用できる機能である。この機能により、複数台の PC を利用する必要のあるユーザーは 1 ライセンスでソフトウェアを利用することができ、経済的である。

4. その他のロービジョン機器

拡大の文字が刻印されたキーボードがいくつか見られた。下図のこの写真の左側は 400% の拡大を行っている the Key Connection 社製の KEYS-U-SEE である。同機種にはマウスと併せてワイアレス接続できる機種も発売されていた。下図の写真の右側は Ai Squared 社製の Zoom Text Large-Print Keyboard である。同機種は Zoom Text 9.0 以上に対応した機能キーを搭載した機種である。



右図の写真は Sight enhancement systems 社製の Sci-Plus という拡大文字の関数電卓である。キートップの文字サイズと画面の文字サイズが大きく表示されるようになっていた。音声の外部出力も可能であり、音声電卓としても利用できるようになっていた。関数は高校で習う程度のものまでを備えているとの説明であった。液晶が電卓程度の仕様であり、式の表示に難があるものの、耐久性・操作性はよい印象であった。



5. おわりに

世界最大級の機器展示会である本会に参加させていただいたわけだが、本会議は視覚障害のみならず、聴覚・肢体など全ての障害が対象の会議である。その中であって、ここでは紹介しなかったが点字印刷機や点字ディスプレイ、GPSをはじめとしたモビリティ支援機器などを含めた視覚障害を対象にしたブースは会場全体の半数以上を占めており、視覚障害の人々のアクティビティの高さ、そしてニーズの高さを改めて感じた。また、機器の開発を行ううえでの、日本語ならではの困難さも感じた機会となった。つまり、拡大読書器やPCの画面拡大ソフトの英語版、スペイン語版、フランス語版などには標準的に音声読み上げ機能が備わっているものが存在するのだが、これらはアルファベットの特殊性が可能にすることであり、日本語に対応したものは見られなかった。この点で日本語を使うユーザーは世界の最先端の機器の恩恵を受ける機会を大幅に制限されており、残念な印象を受けた。しかし、光学系の拡大機器や拡大読書器、画面拡大ソフトの拡大機能の部分では、関係者の尽力があり、世界をリードしたり、世界の最先端の機器を利用できたりする機会に恵まれることが多く、ロービジョンの読書支援機器という点では世界レベルの機器の恩恵を受けられることが多いように感じた。特に拡大読書器の市場では **Far View** のように日本の企業が世界をリードして完成された機器も見られ、日本の関係者の尽力を海外で知ったよい機会であった。しかしながら、光学系、PC画面の拡大ソフト及びその他で紹介したような周辺機器は海外で生産されるものが多く、日本で利用できるまでに余分に時間がかかったり、日本語化されないものや縦書きの日本語に対応できなかったりするものもあり、また海外に比べて高価になってしまうこともあり、海外の輸入に頼るだけでなく日本語の特性や日本の風土に応じた機器を日本において開発する必要性を感じた。

フランシスコ・カルボ講演 オンセ スペイン盲人協会図書館長 「スペインにおける DAISY」

私はオンセに 20 年、勤めております。今は文化部にいます。1996 年の DAISY コンソーシアム設立以来のボードメンバーでもあります。オンセは国立スペイン視覚障害者全国組織で、全盲、弱視の障害をもつスペイン国民に図書を提供していますが、本日はオンセで製作する DAISY 図書にしぼってお話いたします。

オンセでは 2004 年から DAISY 図書を製作しています。いわゆる音声のみの NCC です。これは小さな HTML ファイルがついた録音図書なのでナビゲーションつきです。音声は音読の専門家が声入れ



をしています。そのほとんどはオンセのラボで製作しています。1つはマドリッド、もう1つはバルセロナにあります。残りは小さな録音会社に外注しています。2003 年、DAISY 図書製作を始める1年前からテープの録音図書のデジタル化を始めていました。WAP オーディオファイルに変換しはじめました。当時、1万 6000 件ほどのアナログ録音図書がありました。まだ終わっていませんが、全蔵書の 90%ぐらいは済んでいます。同時に、オリジナルの音声ファイルから、DAISY 版図書も製作しています。現在では2万冊のコレクションまでできています。そのうちの 60%は DAISY フォーマットです。5年ぐらい DAISY 図書を製作していますが、去年は 900 の新しいタイトルを作りました。

そして去年は我々の短い DAISY 製作の歴史上非常に重要な年になりました。2008 年 12 月 31 日をもって、オンセはアナログ録音図書製作をやめました。新しい DAISY 図書に関して 1800 件のリクエストがありましたが、そのうち 400 件は教科書でした。結局半分ぐらいしか、つくることはできませんでしたが、我々は教材の製作を第一に考えています。教材はたった1人の読者のために非常に長く、複雑な本を製作しなければなりません。全体から言うと、リクエストの半分ぐらいしか応じられませんでした。教材は別です。ほとんどすべての要請に応えることができます。

オンセの DAISY 図書製作は、その中心が音声のみあるいは NCC 付の録音図書です。これは大変喜ばれますが、一方で、いわば行き止まりのようなタイプの図書です。つまり、音声のみの図書をつくと、それから先、そのままでは応用のしようがありません。だからこそ、現在私たちはもっとオープンな図書製作に力を入れています。ほかの DAISY のメンバーたちが非常に大きな成果を報告していますが、ソースファイルベースの DAISY に変えているわけです。フルテキストの XML ファイルないしは HTML ファイルにして DAISY などに応用しています。この XML DAISY ファイルだと、点字や大活字など様々な応用図書にも使えます。この新しい考え方ではオンセの図書製作体制や方針までも変えなければなりません。

DAISY 図書製作を始めてから、うなぎのぼりにリクエストも増えていきます。2009 年以降も右上がり傾向を望みます。2008 年は、DAISY 図書を使いたくない、あるいはアナログ録音図書がいいと言う人に対しても DAISY 図書をどんどん勧めましたし、アナログ録音図書の製作は 2008 年末に終了しましたし、テープレコーダーの販売も終わりました。2009 年からは、今あるアナログ素材のコピーは行いませんし、プレーヤーの販売も止めて、あるものを貸し出すだけです。2010 年末にはすべてのアナログ素材の配布を終了させます。

2008～2009年にはいろいろなことを試み、なるべく利用者がこの技術を使えるようにしました。CDによるDAISY図書を利用者に配布し始め、既に数千枚のCDを発送しました。スペインでは障害者の場合、郵送料が無料なので、そういう形にしました。2006年3月にオンセはDAISY録音図書の提供を始めましたが、その6カ月前から電子図書館が既に創設されてましたので2005年10月から2006年3月までは、この電子図書館から唯一テキストファイルで提供しました。当時からダウンロードでき、パソコンで読むことができました。

DAISYがダウンロードできるようになると、強い反応がユーザーからでました。最初の月は、ダウンロード数が5,000～2万5,000ぐらいでしたが、2年間で10倍に増え、1カ月600が、1カ月6,000にまで増え、それ以来着実に増えてきています。オンセの利用者は現在11,500タイトルのDAISY図書から本が選べます。これまで図書館を利用したことのない人や図書館を利用しなくなった人たちが図書館に戻ってきました。ほとんどの人たちがダウンロード派の若い層や図書予約に待ちくたびれた人たちです。

オンセは図書をCDで発送するサービスを未だにやっていますが、DAISYローンサービスのようなものはないです。オンセではCDを返す必要はなく、ユーザーは1ユーロで自分のものにできます。去年1年でDAISY図書を借りる新しいユーザーが増え、このシステムを多くの人に知ってもらうことができました。今まで1回もDAISY図書を借りたことのない人たちに7500冊以上も配布しました。最寄りの図書館に返すように言ったのですが、一度読むと、夢中になるようで、ダウンロードに夢中になり、コピーを買うようになりました。2008年の間におよそ2,800人のユーザーが6万5,000タイトルを電子図書館からダウンロードしました。

現在私たちは新しく幅広い、効果的、効率的な配布を考えています。オンラインディストリビューションをやってみて、成功していますが、みんなが家にコンピュータがあるわけではなく、それを使えるとも限りません。CDは傷がつきやすいですし、CDの場合には、スペイン国内であっても郵送には数日かかります。今の忙しい時代に、2日も待たなければいけないのは長すぎます。ですので、私たちはメモリーカードによる普及を考えました。また同じ輪だちを踏むかもしれませんが、来館するたびに、メモリーカードに2～3冊の本をローディングするのが1つの求心的なものになると思います。ストリーミングがもう1つの可能性です。ただ、多くのユーザーがコンピュータの前で何時間も座っているとは限りませんよね。

また、新しい可能性としてモバイルフォン技術があります。携帯電話でダウンロードします。、スペインのソフトウェア企業のコードファクトリーは昨年、携帯DAISYプレーヤーを販売し始めました。既にスペインでは有名な存在です。テキストを読み上げますので、メモリーカードが入っているノキアという携帯電話で使えます。コードファクトリーは現在、マイクロソフトのポケットPCなどのモバイルデバイスにも手をだしています。

DAISYコンテンツは、テキストオンリーでも音声オンリーでもハイブリッド図書(音声付きのテキスト)でも使えます。DAISYのナビゲーションを使うときは携帯電話のキーパッドが使えます。ブックマークも、音声ガイドも使えます。DAISY2.02とDAISY3の図書をサポートします。十分な残存視力がある人にとっては、恐らくこれは役に立つのではないかと思います。とはいえ、このように携帯電話のメモリーカードにダウンロードするためには、本を持っていないといけません。CDないしはデジタル図書館からダウンロードしたコピーでもいいのですが、いずれにしても、こういったものをダウンロードする必要があります。しかしテキストオンリーのDAISY図書は容量が小さいので、TTSエンジンのついた携帯であればオンセ電子図書館のウェブサイトインターネット接続して、ダウンロードできる日も、もうじきでしょう。モバイルスピークを使うことになるかもしれません。携帯電話で本の内容を聞くのは必ずしも快適ではありませんが、いくつか利点もあります。

まず、この時代携帯電話を持っていない人は数少ないと思います。ということは、専用プレーヤーを買う必要はなくなります。携帯電話は途上国でも使われていますので、高い機械を買えない人にとっても朗報です。また、数回電話

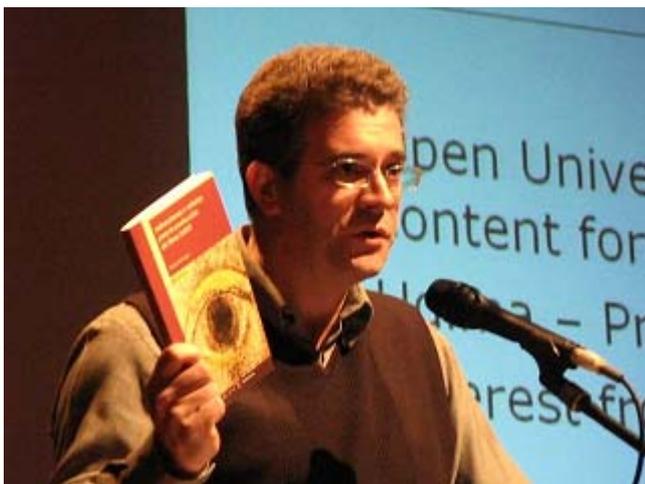
をかければ、携帯電話の使い方はわかりますし、そこからすぐに DAISY 図書プレーヤーとして携帯電話が使えるようになるでしょう。特別な訓練は必要ありません。しかし、それだけでは不十分で、本を携帯電話に提供することを考えなくてはなりません。現在、特に一番安い携帯電話機では DAISY 図書を読むサポートはありません。しかし今や若い層は携帯電話で音楽を聞いていますから DAISY プレーヤーとしても携帯電話は近い将来、使えるのではないかと考えます。

少しここで DAISY 図書が昨年作られた数をおさらいします。昨年は 1000 近いタイトルがオンセでつくられました。一方、それに加えてほかのアクセシブルな図書を加えると、例えば主に点字や E テキストファイルですが、全部合わせても昨年、スペインで発表された新書 8 万タイトルの 4%にも満たない数字です。残念ながら、このパーセンテージはまさに視覚障害者がアクセスできる図書の数そのものをあらわしていると言わざるを得ません。これまでも全体に対して数が少ないという問題にいつも責任を感じていました。これらのユーザーにしか使えないフォーマットですので、限定的な仕様しかできず他の人たちには、まったく関係ないということから、非常に限られた用途であるがために逆に著作権の例外規定もあり、現状維持が進んできました。

しかし、今は状況が大きく変わりました。人々の見方も変わっています。そのきっかけはいくつかあります。第一に 2006 年、新しい著作権法が決まりました。かつて足かせとなっていた 2 つの言葉が消えました。「限定的」と「点字」です。今は専用のフォーマットを使う必要はなく、あくまでもユーザーのニーズに適用したフォーマットを使えばいいと制定されました。

もう一つ、DAISY が今はあります。視覚障害者のためにつくられたこのシステムは、もはや国際規格ですし、すべての人達のために使うことができるようになりました。そして、もう一つの点は、最近アクセシビリティに対する関心が高まっているという事実があります。今は法律もあります。公共機関では、アクセシビリティを担保しなければいけないという規定になっています。障害者権利条約もできました。また、私たちは、国際的にも情報をアクセシブルにしなければいけないという要件があります。それが DAISY によって可能になりました。

これらによって、オンセでは DAISY への取り組みが変わってきました。DAISY を自分たちの組織以外のところでも出版のツールとして使ってほしいこと、メインストリームのプレーヤーのメーカーも DAISY 規格を採用してほしいことや DAISY 図書をもっと広く使ってほしいことを推進したいと思います。例えば公立図書館のサービスに組み込むということで、言うなれば、DAISY をメインストリーム化するのが我々の狙いです。活字印刷図書に比べて DAISY 図書の数は



非常に限られていますから、もともとのコンテンツをつくっている人たちが最初から DAISY コンテンツを用意すればいいと我々は考えています。アイポッドから車の CD プレーヤーなどで使えるようになると思います。すべての公立図書館に DAISY 図書が提供されると嬉しいですし、国内の本屋にもおかれるようになりたいものです。

コンテンツの製作者を考えると 2 つの可能性がありますが、1 つがマイクロソフトのオフィス製品にあるオプションです。Save as DAISY というものです。これは何百万にあたるコンピュータに既に備えられたものです。DAISY は、そういう意味では、何百万もの家庭と企業に導入される可能性がある

あると思いますし、マイクロソフト Word の文章が DAISY 図書に変換されることが容易にできます。もう一つは、Adobe インデザインです。これはプロの出版ツールとして広く使われていて、XML の文書として保存し、DAISY 図書をつくるこ

とが可能ですが。したがって、この2つのツールでコンテンツ製作者があつという間にアクセシブルな文章を作り出すことが可能になってきています。

数ヶ月前に発覚したのですが、今言ったようなことが実現しようとしたイニシアティブがカタロニアでありました。学生に対して様々な電子フォーマットですべての教材を提供するもので、その1つのフォーマットがDAISYでした。オンセは関わっていませんが。スペインの中でも北東部にあるところですが、ここは、何ヶ月もかけて、オープンかつ完全にアクセシブルな規格を探し、すべてのユーザーにアクセス可能なものを提供しようという調査をしました。そして彼らは、単に数少ない視覚障害の学生だけではなく、キャンパスにいる学生すべてを対象に考えました。このときは私も、DAISY コンソーシアムの一員であることを、大変誇りに思いました。こういった技術者は懸命に、いろいろなフォーマットを試した結果、「DAISYこそがアクセシビリティの問題を解決する上で最もいい解決策である」という結論に達したのです。私に見せてくれたのは、プロトタイプですがフルテキストの音声 DAISY 図書、彼らはカラオケタイプと言っていました。これを見せてくれました。これをきっかけに、スペインのほかの放送大学とも連絡をとりました。

最近、マドリッドで設立された私立の放送大学、ウディマにも連絡をとりました。ここは新生に、オンラインで教材を配付するためのサーバーをつくっていました。DAISYこそ、すべてのニーズを満たすフォーマットであるといっていました。一方、印刷でも出していますので、印刷物もちろん扱っています。インデザインの利用者でもあります。作家のほとんどがマイクロソフトユーザーであることも知っているの、クライアントとスタッフに対し、コンテンツを出版社に提出する際には DAISY 図書の要件を満たすようにいっています。

この本、できたてのほやほやですが、DAISY 図書をつくるためのガイドラインであるとオンセは考えています。スペイン語でしか書かれていませんが、オンセ以外で、DAISY 図書を使いたい人たちに使ってもらうためのものです。公共の施設ないしは視覚障害者、障害者のための団体など、すべてに使っていただきたいですし、できるだけ中南米で使っていただきたいと考えていて、電子図書の参考にガイドラインとして使っていただければと思います。

もう1つ重要な要素は、公立図書館のセクターです。彼らは蔵書への完全アクセスを目指していて、非常に最近活発になっています。法律が変わって、スペインにおける公立図書館のネットワークはもっとインクルーシブなものになっていくと思います。その点、オンセが提供している図書館サービスは効果は高くても、すべて公立図書館が提供できるものを提供しているということではありません。また、オンセ図書館は閉ざされたサービスで、あくまでも重度の視覚障害を持った人に限定されています。一方、公立図書館は開かれたシステムであり、すべてのコミュニティ、人々を取り込むことができるシステムが整っています。なので、公立図書館とオンセが連携することにより、共同のサービスを提供でき、視覚障害者が、もっと豊かな読書経験を味わうことができると信じています。

最後にまとめます。まず、オンセとしては、もっと多くの、いいものをつくりたいと思っています。が、オンセだけが DAISY 製作者であっては困ります。我々はもっと早く、うまく、広く配布したいのですが、我々が唯一の DAISY 提供者にはなりたくありません。

会場1／大阪枚方市立図書館です。一点、お伺いします。スペインの状況を聞かせていただくと、デジタル化が急激に進んでいるという印象を受けました。日本でも、今現在非常に大きな問題になっているのが、有力な点字図書館がアナログの図書の製作を終えて、どんどんデジタル化を進めています。そんな中で、デジタル化についていけない、特に高齢の方、年配の方の利用者からの反発の声がどうしても出てきています。私はテープレコーダーでしか読書しないという声が上がってきて、それに対する図書館の対応が大きな問題になっています。

スペインでは、そういう問題が起きているのかということと、そういう声に対してどのように対応されているか、聞かせていただければと思います。

会場2／1ユーロで本がCDにのせられ、それが提供されているとのことですが、販売となると著作権の問題はどうなっていますか。

カルボ／ありがとうございます。

まず、最初の質問ですが、私自身もユーザーの人たちが DAISY の技術を受けられないのではないかと心配していました。しかし、幸いなことに、いったん、こういう本を試してもらおうと「他はいらない」と言われます。唯一問題は、プレーヤーを買うためのお金を獲得する方法だけで、本そのものは全く問題はありません。特に学生は、この DAISY が非常に役立っていることを理解しています。本当に驚くべきことだと思いますが、テープには戻りたくないということを言います。ですので、今のところおっしゃったような問題はありません。

むしろ、他の国に比べ、出遅れたと思います。デジタル化サービスの提供は出遅れました。しかし、それは何かというと、利用者からの反発が怖かったのです。そして、2010 年末にはもはやアナログカセットは配付なくなります。もうカセットなんて存在しないも同然です。したがって慣れるしかありません。オンセは昔のテープレコーダーをあきらめるしかなかったのです。読みたい人は、どんなフォーマットでも読みますから、DAISY というのは、かつてのものに比べて特に難しいことはないと思うので、読み続けると思います。

もう1つの質問ですが、販売ではありません。1冊あたり1ユーロというのはサービスの対価であり、本に対する対価ではありません。本来ならもっとお金がかかることは皆さんもご存じですよ。これはサービスに対する対価です。

マーク・レイノ講演

フィンランド セリア図書館 IT 開発部部长 「フィンランドにおける DAISY」

本日はフィンランドにおける DAISY 図書について、図書館による図書製作と貸出サービスについて、「オーディオ・ストリーム」という DAISY 図書のオンライン貸出システムと将来的に計画されている電子図書館の話など電子サービスに関する話をします。

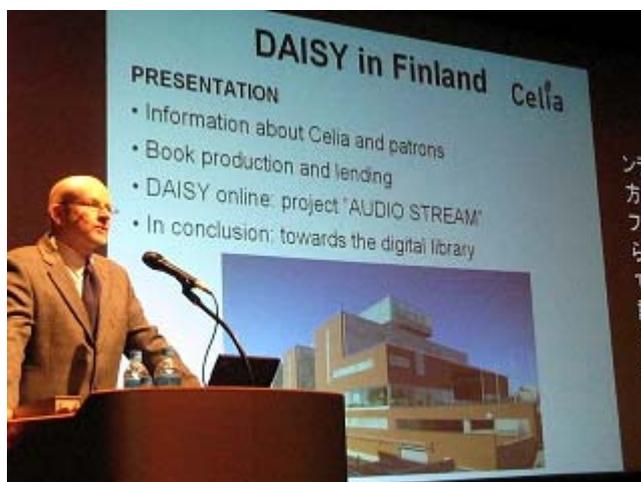
1890 年に設立されたセリア図書館は 1978 年から国営となったフィンランド唯一の障害者向け図書館です。録音図書、点字図書や電子図書を貸出および製作をしています。利用者は 15,500 人程度ですから、フィンランド全人口 500 万人に対して、8 万人の視覚的に障害のある人がいると推定されます。利用者数はずっと増えると予想されます。当図書館では高等教育および就学者向けの教材もそろえています。

DAISY 図書に関しては試験的に 1995 年から DAISY 形式での提供を数年続けた結果、次世代の録音図書としてフィンランドでは DAISY 形式を選択しました。5-6 年前まではテープ図書だった録音図書全てが現在では DAISY 形式となり、すでに 2 万 3 千冊の蔵書となっています。年に 1,000 冊のペースで今後も製作していきます。DAISY 録音専用のスタジオが図書館にもありますし、外部で製作されたものを図書館が購入したりもしています。今後は DAISY 教科書や DAISY の XHTML テキストファイルをマスターファイルとして配信できるように考えています。その際は、DAISY コンソーシアムが提供するツールを可能な限り活用していきます。

さて今後フィンランドに電子図書館をつくるにあたり、ソフトを充実させないといけません。電子図書の貸出に関してフィンランドにはパラスというシステムがあります。DAISY 図書専用のシステムと言ってもいいでしょう。その他にセリアネットがあります。こちらではインターネットサービス(検索サービス?)や図書カタログを配信しています。利用者は www.celia.fi にアクセスします。英語、フィンランド語およびスウェーデン語があります。

我々がテープ図書を電子化した時は、SAN 古文書システムというオンデマンド貸出システムを購入しました。製作部ではこのエンタープライズ・リサーチ・パッケージを活用し、可能な限り効率的に製作しています。製作物はオンラインで販売します。小中学校には製作教材を販売し、高等教育には無償で提供しています。

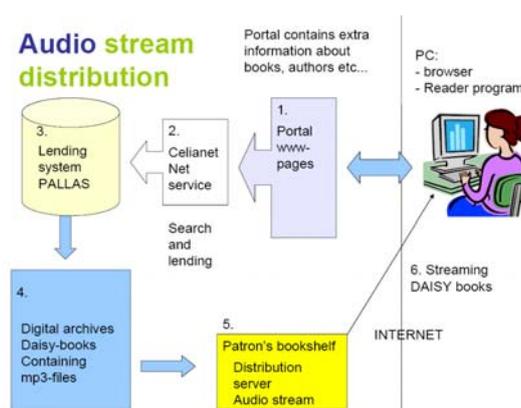
「人生を豊かにする図書」に関しては必要な時に貸出しますが、基本的に利用者は登録制で、借りた DAISY 図書は聞いたら CD を破棄する約束を結んでいます。図書館に返却しなくていいのでかなり合理的です。2008 年は 80 万枚の CD を焼きました。数年後には百万枚となり、



15,000 人の登録者を考えると、年に一人当たり 60-70 冊を借りていることとなります。図書館としてはいい数字ではないでしょうか。

今年からは DAISY 図書オンライン貸出システムを始めました。フィンランド語で Audio virta、英語でオーディオ・ストリームと呼んでいます。これはインターネットを配信媒体としてセリアにある図書全てをオンライン貸出にする計画です。既に 2 万 3 千冊の DAISY 図書がオンライン化されており、新しい貸出システムを今後も探っていきます。あらゆる IT システムを統合化し、CD に焼いていた録音図書の効率化を図り、かつ他の図書もすべてオンライン貸出となるように考えています。時間はかかるでしょうか。その他のサービスでもネット上でできることを考えます。

多国間図書館というものも構想にあり、特にスウェーデンとフィンランド間での図書貸し借りには電子システムは欠かせません。スウェーデンでフィンランド語を話す人は相当数にのぼり、スウェーデンの TPB との連携、ひいては北欧諸国間での連携を視野に入れています。この図書サービスを可能とする原則は、マルチセンター配信です。DAISY 図書で示されているように、「アクセシビリティ」と「すべての人へ」という原則はこの手のサービスには外せません。よって、DAISY コンソーシアム仕様を我々も活用しています。



これまでに DAISY 図書のオープンソース配信を3度試みました。2000-2001 年に行われたものは期が熟していなかった感があります。去年行った二つ目の試みではフィンランド製の Netplex というソフトを使いました。すべてのソフトがオープンになることも想定されてましたが、今後もその方向で速やかに修正を繰り返していく予定です。

利用者の貸出システム(ポータブルサービス)を図式化しますとこうなります。ブッククラブには図書館員がバーチャルな本棚を作っていますし、セリアネットにアクセスしてもらえば、利用者自身が図書を検索できます。借りたい図書が見つかったら、手続きをした後にブラウザを閉じて、図書を聴きます。しばらくログイン画面をスクリーンショットでお見せしましょう。



オンラインサービスに登録していない人は CD を借ります。もちろん、登録している人でも CD を借りることはできますよ。全ての登録者にオープンですから。貸出図書の更新もできますし、マックス 50 冊まで一人が借りられます。

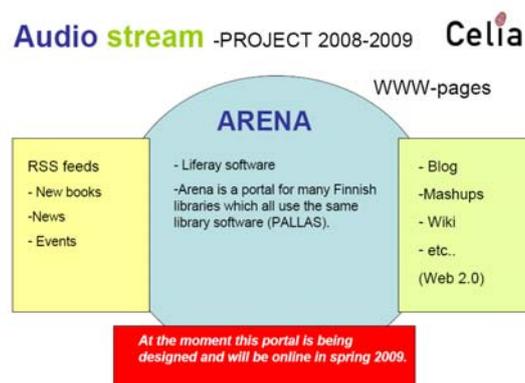
これはフィンランドの朗読プログラム、プラタムです。ブックマークができ、DAISY 図書に対応できます。どのプレイヤーでも使えるようにいずれはしたいですね。

次にご紹介するのは、別の DAISY サービスです。図書館職員がエンターテイメントなどのブッククラブやインフォメーションチャンネル、雑誌チャンネルに別けて、図書を載せていきます。例えば、推理小説のブッククラブに入ると毎月 5 冊まで個人の本棚に置かれますし、CD

に焼くこともできます。とても人気のあるサービスです。今年の12月でこのプロジェクトは区切りをつけますが、その後も続けます。このプロジェクトには3つのモデルが想定されています。一つはPCを持っていて自由にインターネットにアクセスし、自分で図書を検索する人です。2千から3千人の利用者がいると思います。二つ目はプレイヤーユーザーで図書館員に本を選んでもらう人です。三つ目はインターネットを使いたくない人や使えない人も多くいますから、例えば、電話をかけて図書館員に本を探してもらうこともできます。見つかった本はバーチャル本棚に載せてもらって、彼らの使用するプレイヤーで聴いてもらいます。

また、アリーナというポータブルサービスも準備しています。これはセリアとフィンランド国内の公立図書館との間の貸出サービスです。フィンランドでは同じ貸出サービスを利用しています。セリアはDAISY対応もしくは電子対応ですが、他の公立図書館と同じ会社が作成していますので、他の図書館のカタログからも貸出が可能です。将来的にはWeb2.0も取り込んで、利用者がアクセスできる限り、利用内容の幅も拡充していきたいと考えています。

最後に電子図書館について話します。私たちはDAISY図書を単なる図書とは考えていません。DAISYは情報の保管庫になると考えています。今は必要なくてもいずれは必要となる情報の保管庫です。そして配信方法はマルチ・チャンネル化による貸出です。何度も言いますが、私たちは図書貸出のオンライン化によって利用できなくなる人がでてきては困るのです。インターネットを使わない人も利用できるものでなくてはなりません。利用者はDAISY図書を使うにあたり、プレイヤーも違えば、ソフトやデバイスも違います。ですから、私たちの役目は多様なプレイヤーに対応できるコンテンツ制作なのです。また、この手の新しいサービスをフィンランド国内の病院や施設にも配信できるようにするのが私たちの希望です。「全ての人に」が私たちの目的ですし、そのためには国際的な協力を絶やさず、DAISYコンソーシアムのツールを活用していきたいと考えます。



ライラニ・デイビッド講演 フィリピン自閉症協会 「自閉症児のためのソーシャルストーリー DAISY 図書」

ここ数日間起きていること、いずれも私にとっては非常に感銘深いことです。まず1つ、天気。一部の人には暖かいと感じられますが、一部の人の人にとっては寒いです。私の出身地で考えますと、これは不思議な国の冬と感じられます。あまりにも寒くて、トイレでもヒーターをつけるような状況です。もう1つは、いろいろな情報、皆さんの経験を共有させていただき、すばらしい経験です。

今日の私のタイトルは、「DAISY という便利な真実-自閉症のフィリピン人のためのソーシャルストーリーをつくる」というものです。私はフィリピン自閉症協会のネットワークにおいて、ボランティアをしていますが、もう1つ、DAISY のトレーナーとして活動しています。私は DAISY の製作に携わるまで、トレーニングのコーディネーターをして地域に根ざした訓練を行っていました。自閉症のための DAISY の製作は新しいものです。昨年2月、我々は初めて DAISY の製作のトレーニングを受けました。ASP というフィリピン自閉症協会は非営利組織です。全国に38支部があり、会員は6000人です。もっと増えることを期待しています。フィリピンにおいては自閉症のある人たちのほとんどは、何らかの知的障害を伴っています。従って分類上は知的障害の位置づけになっています。

この DAISY の潜在的利用者はフィリピンには数多く存在すると思います。いま現在、国勢調査のもと、自閉症の人がどれぐらいいるのか把握できていません。全体で人口は8900万人ですので、150人に1人が自閉症という比率から考えると、おそらくは50万人くらいと推定されます。病院での統計を見ますと、全体の5%だけが自閉症として診断されています。また、その診断ができる医師が不足している問題もあります。2%のみがきちんとした治療、ないしは管理プログラムを受けているのが現状です。

さて、フィリピンの現状について理解していただきたいと思います。DAISY に関する限り、次のようなことが言えます。これはフィリピンにおける DAISY ネットワークの現状です。2008年4月、DAISY コンソシアムフィリピンネットワークは正式に NGO として設立され、DAISY の製作推進に携わることになりました。現在、フィリピン国立図書館が DAISY フォーマットでつくられたすべての文書を持つことになっています。が、今はゼロです。今は図書館にはまったくありません。まだネットワークで図書を作っている段階ですので、まだ現在はありません。

もう1つ、DAISY 事務局がつくられました。全国障害者問題評議会、NCDA と略します。関係政府当局、NGO 等に DAISY をプロモーションするものです。この NCDA が、DAISY を、印刷物を読むのが困難な人のためのアクセシブルな図書をつくるための規格として採択しました。私たちはフィリピン大学のコンピュータ工学部と一緒にフィリピンの音声エンジン開発を進めてきました。現在、他の政府機関、例えば運輸通信省、保健省、教育省、その他地方自治体などが既に自分たちの文書を DAISY フォーマットに変換することに興味を示しています。

これらが ASP における DAISY の製作者5人です。3人のうち一人はASPの会長で、会長自らが



DAISY をつくる立場です。もう1人、関係者、映像担当、ボランティアは私、そして、自閉症の1人が製作に加わっています。ジェッド・アロン・デーさん。今、写真に出ている人で、22歳。図書館学で学士を取得しました。彼は、アスペルガー症候群と診断されました。集団に適應できないものです。発達障害の1つです。社会に溶け込むのが困難です。ジェッドは去年11月、DAISY 図書の製作に携わるようになりました。週に3回、1日3時間の仕事をしてくれています。

ASPにおいては、自分たちのDAISYキャンペーンをオンラインニュースレターを通して進めています。これはその記事の1つです。フィリピンの主要新聞に掲載されたものです。ここにはDAISY、自閉症の人々が読む上で、大きな手助けになると書いてあります。マイセンさんが、DAISY がいかに日本人の学生の助けになっているか、それに基づいて書かれたものです。これが私達の協会のEニュースレターの一部です。

これはDAISYの種を植えたフィリピン人第1号。DAISYを花の種に例え、全国にDAISYが花開くようにと期待しています。全国のコミュニケーションセミナーのあとに配られました。言語聴覚士協会が主催したセミナーです。私達はその中でDAISYのオリエンテーションをしました。ほかの団体から要請があった場合、DAISYに関する情報提供を行っています。協会のメンバーは、Eニュースレターを通して、情報を伝え、それを読んだ人が我々を招いてこのようなオリエンテーションを行います。

ASPはフルオーディオの素材をつくっています。テキストはナレーションに合わせて同期、ハイライトします。肉声、合成音声を使っています。映像も入れています。しかしまだ実験中ですが、例えば、動画を入れられるかどうかを考えています。もしそれが沢山ありすぎると、避けたいと思います。自閉症の人たちは物事に集中するのが困難だからです。従って、何か多くの絵が入っているような絵を見るとメッセージがわからなくなってしまう。色に注意が奪われ、本来のメッセージが伝わらないことがあるので。ここでは3つの種類の素材が出てまいります。

まず一般情報。それから防災。そしてソーシャルストーリーです。一般情報は、もう既にでき上がったものがあります。例えば協会のパンフレットなどをつくっていますし、私のDAISYのトレーニング報告もあります。こうしてDAISYをメインストリーム化できるのではないかと期待しています。他のユーザーにも使っていただけると。特殊なニーズを持っている子供たちだけでなく、一般にも使ってもらえると期待しています。

べてるの家と同様、私たちも防災のための資料をつくっています。公共のもの、例えばポスター、チラシ、マンガなどを使っています。正式・非公式にこういったものを使わせてもらっています。ここでお見せしているのは、フィリピンの科学技術省が管轄している火山学地震学研究所のもので、今現在進めているプロジェクトの1つは、津波のマンガ、これをDAISYフォーマットに変換しようとしています。マンガのレイアウトと同じようなものを使っていますが、できるだけシンプルにつくり変えています。

ソーシャルストーリーは、生活技術に関するものです。これもまたこういった材料を使用する許可が必要です。ソーシャルストーリーブックのフィリピン版はありませんが、キャロル・グレーのソーシャルストーリーブックを訓練目的だけに使用許可がおりています。が、DAISYフォーマットに変換する許可がないので、訓練目的に限定されています。新しいソーシャルストーリーブックと書いてあります。私たちは、特殊教育の専門家、先生にボランティアとして参加していただき、フィリピンの価値や伝統に基づく内容をつくってもらっています。従ってこれに基づいて独自のフィリピン版のソーシャルストーリーをつくっています。

あくまでもフィリピンの文脈に基づく内容となっています。これまで私たちの使用してきたツールは Save as DAISY で、ドルフィンというのは一般に市販されているものです。私たちは今現在、AMIS、これもまたべてるの家で使われていたものですが、タブ(TAB)はタイのもです。ドルフィン・イージー・リーダー、ビクター・リーダーを使っていますが、まだ主流化されていませんが、こういったプレーヤーを使っています。

こういう本をどのように入手するかですが、私たちがこれまでつくってきた DAISY 図書は一般に使用できる状況ではありません。今現在プリテストを行うということで、これらの図書は特に知能の高い自閉症の成人を対象にテストをします。その目的は、テキストの見せ方、フォント、イメージ、映像、背景の色、どのような趣向があるか確認するためのものです。私たちとしては、これを一般に自閉症の人たちに提供する際、慎重にと考えています。そもそも自閉症は多感覚の障害です。ですから、「絵」はいろんな感覚を使うものなので、私たちとしては、DAISY が自閉症の人たちにどのように受けとめられるかを確認したいと思います。DAISY によって彼らの状態がより悪くなることは、ぜひ避けたいと思います。したがって、まだ今はすべて研究中です。

ではソーシャルストーリーの仕組みについて。私どもは保護者、専門家などと相談してきました。自閉症の治療にあたる専門家、また管理プログラムの実施者に相談しました。彼らの話では、DAISY 図書は役立つツールだが、これは自閉症の中でも知能の高い、ないしはアスペルガー症候群の人に適していると言っています。自閉症の人たちは、えてして誤解されています。というのは、彼らは社会に適応できないと言われますが、私自身だって適応できていないと思うときがあります。ソーシャルスキルを教えることが重要だと思います。こうしたスキルは、仲間に受け入れられること、教職員に受けられること、またインクルージョンにもつながり、学校を卒業後にも役立ちます。成人してからも役立つものです。ソーシャルストーリーは、彼らに日常の生活技能を教えるためのものです。

これまでに私どもはソーシャルストーリーを導入するためのガイドラインを作成しているので、お見せします。DAISY のソーシャルストーリーブック、自閉症対象のものを製作する際のガイドブックです。DAISY フォーマット、ソーシャルストーリーを開発するにあたり、まずは、自閉症の全体像をきちんと捉えて、知識を持つ必要があります。非常に幅広いものです。自閉症は非常に幅広い障害で、いろいろな症状があります。一人一人、人格障害等の現れ方が違っている。これを把握することが必要です。ここで十分に配慮すべきことがあります。皆様理解していただきたいのですが、保護者、専門家の間で、緊密な連携を図り、それを通じてソーシャルストーリーをつくるべきです。家族がプロセスに関わるのが重要だと考えます。

さて、こうした連携を通じて、慎重かつ配慮した情報収集ができますし、きちんと情報を持って観察ができます。また、どういった内容がいいのか、状況設定の選択と、適したタスクを選んで、その設定のもとにつくれます。ユーザーにきちんと合ったソーシャルストーリーを作ることができます。ソーシャルストーリーの中には、言葉は数行しかありません。1つの画面に入っています。絵は1つか2つです。ソーシャルストーリーはシンプル、かつ明確でなければいけません。

DAISY の製作者にとって重要なことは次のことです。まず、現実的で、かつ機能する場面設定の中でのソーシャルストーリーを選ぶ。そして、言葉は一般的でわかりやすいもの。必ずしも敬語でなく、丁寧語で十分です。また、複雑なレイアウトは避けるべきです。できるだけシンプルな構造で、一貫性があり、きちんと境界線がはっきりしているものを使うべきです。それによって、利用者がもっと楽しめます。いろ

いろ複雑なレイアウトを見てしまうと、彼らはわからなくなります。変化を好まないからです。

オバマ政権は「チェンジ」という言葉を使いますが、子どもたちは逆にチェンジを嫌います。オバマ大統領に、例えば私どもからのアドバイザーが派遣されたら、その辺は難しいかもしれません。また、あまりにも芸術的なフォントの工夫などは避けるべきです。非常にシンプルにするべきで、できるだけ背景の色も避けるべきです。ただ、症状の現れ方はいろいろで、1人、1人が違うのも事実です。子どものニーズを踏まえたものにすべきです。

もう1つのアドバイスは、できるだけ文章は短く、分かりやすい区切りで見せるべきです。例えば、一部の DAISY フォーマットは文章を使って、全体をハイライトさせることもあります。自閉症の人は、文章を区切ることを好みます。ポーズ、間をおくところでは、ハイライトを止めるべきでしょう。もう1つは、必要な絵だけを入れるべきです。ここで3つのデモンストレーションがあり、ジェッドが製作したもので、彼の肉声で吹き込まれています。自分の声で吹き込むのが彼は好きです。私は自分では録音できませんでした。私、1つだけ、自分の声でソーシャルストーリーを吹き込みました。

ジェッド／ガムをかむのを学ぶ。

時々、人はガムをかみます。通常は1つずつかみます。しばしば、ガムは包みに入って提供されます。まず、口の中に入れる前に、包み紙を外します。そして、ガムは口を閉じてかむ方がいいです。そうすることで、静かにガムをかむことができます。かんでいる間は、口の中に残します。味がなくなってしまうたら、口の中から取りだし、ゴミ箱へと捨てます。ゴミ箱に入れる前に、小さな紙ないしはティッシュに包んで捨てます。

ジェッド／贈り物を贈る。贈り物というのは人にあげるものです。人は他の人に贈り物をします。大きいものもあります。小さいものもあります。人に何か贈り物をする時、「これはあなたのための贈り物です」と言うことがあります。また、私が人から贈り物をもらうことがあります。贈り物をもらう時、私は「ありがとう」と言うようにしています。「ありがとう」と言うことは、ていねいな行為です。人は何か贈り物をしたとき、その人から「ありがとう」と言われるのが好きです。

デビッド／すみません、テキストがきちんとハイライトしていませんでした。最後のものです。

これはソーシャルストーリーで、フィリピンの文脈に合わせて、我々の価値観を表す内容となっています。フィリピンの人が、「ごきげんいかがですか？」と、タガログ語で話しています。フィリピンの人たちはいつも「カムスタカ」と言います。誰かに出会った時、知っている人に会った時、誰かに紹介されたとき、この言葉を使います。「カムスタカ」という言葉を知り合いに会った時、必ず言います。「カムスタカ」と言うことによって、相手は笑顔になります。そして他の人と出会い、知り合える楽しみを知ります。私も、これからできる限り、「カムスタカ」と言うようにしたいと思います。「カムスタカ」です。

デビッド／今お見せしたのはソーシャルストーリーの例です。

非常に短いものです。自閉症の人があたかも自分自身がソーシャルストーリーを書いているかのようになっています。こういう手法をとることによりソーシャルストーリーの価値が何かを考えることができます。

ここで、フィリピンで今後どうするか話したいと思います。DAISY の製作は今始まったところです。従って私達はまだ経験が浅いので、皆さんにお話しすることはほとんどないのですが、今後の話をしたいと思います。「DAISY プラン」という名前がついています。できるだけ、学校や治療センターに DAISY の種を植えたいと思っています。そして保護者、専門家には DAISY の製作者になってほしいと思っています。彼らこそが自閉児やその他の人たちのニーズを把握していますし、患者の状況を一番よく知っていますので、彼らに製作をしてほしいと思っています。また自閉症のある人達に会って、ソーシャルストーリー、防災や雇用の話を作っていきたいと思っています。

彼らに就職の機会を提供したいと思っています。先ほどのジェッドはあくまでもボランティアだったのですが、ほとんど無償です。一日 50 ペソで、片道の交通費にもなりません。彼らは私どものマニラのオフィスで仕事をしています。彼の住んでいるところから1時間半ぐらいかかります。でも、今は 50 分ぐらいです。50 ペソしかありません。彼らに雇用の機会を提供したいと思っています。就職につなげていきたいと思っていますし、もっとジェッドのような子に教育していきたいです。その中には兄弟も含まれます。フィリピンでは家族の支援が大切になります。DAISY の製作者になっていただきたいと思っています。この機会を利用して、ここにいる皆さんに、私たちはまだまだこの先、大変エキサイティングな製作を予定しています。このような動きを通じ、私たちは DAISY を広く普及できると考えています。できるだけ早く次のような分野における努力を進めていきます。研究開発、訓練教育、情報、広報、皆さんに認知してもらおうということです。そしてもう 1 つ、技術がメインストリーム化され、こういった自閉児の生活に役立てることが大切だと思っています。私どもはもっと多くのものをこれから DAISY に変換していきたいと思っていますし、また私どもの協会への支援も増えることを期待しています。様々な連携を今後、はかっていきたいと思っています。



最後にいくつかフィリピンの写真をお見せします。自閉症と暮らす家族の写真です。河村さんが昨日おっしゃっていましたが、DAISY は特別な技術です。そして自閉児も特別な存在です。どうか皆さん、自閉症の天使になってください。見えない方は歌詞を聞いて下さい。

／子どもたちのためのよりよい世界をつくりたいと思います。そして子ども達にとってもっといい世界である、そして、自分たちでよりよい場所にできると思えるような環境をつくりたいと思います。

デビッド／16歳のパトリック、アンジェロ8歳、エイドリアン5歳、デリック7歳、ヘンリー10歳、政府の職員であり、かつ運動選手です。これはメー40歳。ジオ、14歳です。DAISYによって自閉症の人々にとってよりよい世界が実現することを祈念します。ありがとうございました。

ノルウェー ディスレクシア協会 青年部 理事 マイ・リン・ホルト氏 発表概要

私の名前はマイ・リンです。16歳です。ノルウェーのオスローから来ました。高校(カレッジ)のコミュニケーション科で学んでいます。小学校3年生のときに、ディスレクシアと分かりました。小中学校時代は、暗くて困難ばかりの日々でした。あまり記憶がありません。小学校6年生、11歳のときに、読み書きを学ぶための担当の教員がつけました。録音図書を手に入れる前は、両親が読みあげをしていていました。ディスレクシアがあったので、録音図書を読む資格がありました。小学校6年生で録音図書を手に入れましたが、一部の教科のみでした。家で宿題をするときに録音図書を使いましたが、あまりよく覚えていません。中学校にあがった頃から、



変化がありました。好機が増え、人々は私に期待を持つようになりました。私は、DAISY 図書を手に入れましたが、その DAISY 図書は、正しく再生できませんでした。次の年も、同じことが起こりました。そこで、私の両親は、きちんと再生できる DAISY 図書を手に入れるための活動を始めました。私は、初め、DAISY 図書を使う気になれませんでした。なぜなら、自尊心を失っていたからです。しかし、あるとき、DAISY 図書を使わなければならないことがあり、その後、時が過ぎるにつれて、自分から DAISY 図書を使いたいと思って使うようになっていきました。私は、初め DAISY 図書を使うのが嫌だったのですが、今は、楽しんでますし、頼ってもあります。もし

DAISY 図書がなければ、私は、どの教科においても、今ほどの点数を得られることはなかったと思います。今後、DAISY 図書が手に入らなくなるのではないかと気がかりです。

どのように、DAISY 図書を活用しているかですが、AMIS というソフトをノートパソコンで使っています。イヤホンを使うこともあります。DAISY 図書を聞く間、私は印刷された原本を手元に持ちます。

必要なものが手に入らない状況では、自尊心は簡単に失われてしまいます。例えば、パソコン、教育、録音図書などの必要なものです。私には、私のことと、私のディスレクシアを尊重(リスペクト)してくれる良い友達があります。私は、スポーツをしていましたので、それも、自尊心を回復するのに役立ちました。録音図書は、私の自尊心を回復するのに役立ちました。そして、録音図書のおかげで、自分にとって十分な成績をとることができました。

最後に、DAISY ユーザーへのアドバイスです。良いアドバイス、技術、解決策を含む、良いサポートを得てください。良い、自尊心を持ってください。

自分が、秀でられる場所、得意なことができる場所を、いろんなところでさがしてください。DAISY を活用してください。いろんなことが、断然うまくいくようになります。

ノルウェー 国立盲人図書館(NLB) 製作部部長 アーニー・シルシェブー氏 発表概要

ノルウェーの DAISY サービスについて、すべての学校へのサービスと、生徒への付加的なサービスについてお話しします。私は、ノルウェー国立録音図書と点字図書館(以下、NLB)の、製作部門の部長をしています。ノルウェーの法律では、視覚障害者とそれ以外の障害者で、入手できるサービスに違いはありません。教科書、人生を豊かにするための図書すべてにおいてです。著作権上における違いはありません。教育法上、生徒は、DAISY 図書や点字図書を手にする資格があるという書き方はされていませんが、生徒は、必要な支援を受ける権利があると明記されています。政府の社会サービスは、障害のある国民に、支援技術と機器を提供します。例えば、視覚障害のある生徒は、DAISY 再生機を政府から、好きなだけ持って良いという条件で借ります。

ディスレクシアの生徒は、コンピューターやその他の機器をもらうことができます。

DAISY の提供団体は、2つあります。NLB は、大学に DIASY 図書を提供しています。小学校から高校までは、国立のヒューズビー・リソースセンターが DAISY 図書を提供しています。

もともと、NLB もヒューズビーも視覚障害者を対象としたサービスを行っていましたが、視覚障害者も、その他の理由で読むことに困難のある人たちも、同じサービスを利用することができます。ノルウェーでは、視覚障害者は、どんな図書も、必要な形式で入手する権利があります。例えば、点字、e テキスト、DAISY 等で必要だとリクエストすれば、入手できます。ヒューズビーは、視覚障害のある生徒のための施設であるけれども、ディスレクシア等の、他の読むことに困難のある生徒達のために、読めるフォーマットに変換する権利があります。

学校は、どの生徒がアクセシブルな教材が必要かの判断を行い、アクセシブルな教材を発注する責任があります。提供する側は、学校が必要だと判断した生徒に提供するという保障を得られます。図書の値段は、一人の生徒の一冊の図書に約20US\$で学校が購入します。学校によっては資金的な困難で購入が難しい場合もあります。ヒューズビーでは、現在は音声のみの DAISY 図書を製作しています。日本での事例や、マイ・リンの発表からも分かるように、フルテキストの DIASY 図書は、大変重要です。ヒューズビーは、フルテキストの DIASY 図書を製作する準備を進めています。リソースが問題で、技術と資金の両方が必要です。

ヒューズビー・リソースセンターの統計によると、2006 年から 2007 年では、1,455校の小学校が、2008 年から 2009 年では、1,775校の小学校が、DAISY 図書を入手しています。これは、ノルウェーの全小学校の54.3%です。高校では、2006 年から 2007 年で 235 校、2008 年から 2009 年で 327 校、これは、51.9%の学校です。今年ヒューズビーで入手可能な図書の合計は、1,423タイトルで、昨年より 180 タイトル増えました。ユーザーは、9,797人で昨年より400人増えました。

ノルウェーの全生徒数の1.5%が DAISY 図書を利用したことになります。潜在的に、どれくらい利用者があるかというのは、難しい質問ですが、だいたい、3-5%くらいだろうという話もあります。わかっていることは、活用できる生徒は、現在使用している生徒数よりも、もっともっと多くいるということです。

地域の公立学校は、生徒にアクセシブルな環境を提供する責任があります。国のリソースセンターがありますし、ディスレクシア協会は学校用のガイドラインを出していますが、国の規定はありません。

十分なサービスが提供できるかどうかには、次の要素があります。1. 資金2. 技術的なスキル3. 支援技術の知識があつて、教員達をサポートできる、リソースパーソン4. 生徒が、DAISY 図書を入手できるように導く両親です。大学の教材ですが、これは、NLB が責任を持っています。NLB は、初めは、視覚障害者のための施設でしたが、規定には、視覚障害者へのサービスに影響しない範囲で、他の読みに困難のある人たちへのサービスを提供するとあります。つまり、法律的に、読みに困難のある人たちへのサービスを提供することになら問題はありますが、リソースの問題があります。視覚障害者は、製作の権利があります。必要な図書のリストを送ります。NLB や、他の提携団体(海外含む)に、既存のものがあるかどうか確認し、あれば提供し、なければ製作します。

読みに困難のある人たちは、既存の教科書 DAISY を借りる権利があります。既存のものがあれば無償で入手できます。NLB のサービスは、すべて無償です。しかし、製作してもらう権利はありません。私たちは、論文や概論等の大学で使われる図書を製作します。50%は、朗読者による録音で、50%は、パソコンの合成音声の声でフルテキストのものです。昨年は、150の教科書 DIASY を作成しました。そのほかに、e テキストや、点字の図書も作成していますが、数は少ないです。大学でも同じで、学校が、アクセシブルな環境をつくる責任を持っていますので、学校が、NLB にリクエストを出します。学校によって、サービスの質はまちまちですが、学校では診断をしますし、NLB のことを含む、様々な情報を提



供します。また、支援技術や機器の提供を行ったり、国に申請するように助言したりします。ここ2年ほどで、学校でも代替フォーマットの作成を始めたところもあります。スキャンしたものや、テキストファイルや、TTS を活用したもの、DAISY 教材等です。ノルウェーでは、現在、大きな変化が起きています。

今後の展望ですが、DAISY コンソーシアムも、NLB も、DAISY 図書を製作する効率の良い方法を考えています。パイプラインやパイプオンライン等のツールは、効率的な製作に大いに役立つと考えています。早くて、安い手法です。同じお金で、より多くの教材を作ることができるようになるのは重要なことです。外部のリソースも活用しています。北欧の国では、互いに、図書の相互貸し出しを行っていいいます。スウェーデンやノルウェーでは、図書の30%は、英語です。英語の DIASY 図書は、すでにアメリカの RFB&D 等で製作されている可能性が高いです。ですから、国際的な相互貸し出しは、入手可能な図書の数を増やすのに大変重要です。今年から、北欧の国々では、国境を越えた、相互貸し出しをはじめました。ウェブ上の製作ツールを使えるようにしました。すべての大学からアクセスできます。パイプオンラインです。今年の2月から活用できます。生徒は、ファイルをアップロードして、DAISY フォーマットのファイルをダウンロードすることができます。

ノルウェーの ディスレクシア団体の活動

兵庫県LD親の会 たつの子
山中 香奈

NPO法人 支援技術開発機構
濱田 麻邑



ノルウェー



- 北欧 スカンジナビア半島の西岸
- 国土は日本とほぼ同じ
- 人口約480万人 兵庫県の85%くらいの人口
- 20年前 ノルウェー王が自らのディスレクシアを公表
- 移民が多い アジアからの養子縁組も・・・
- 個性を尊重している(服装や髪の色 装飾品も自由)

ノルウェー(オスロー)視察

2009年3月22日～26日

- ディスレクシア協会
- NLB(国立盲人図書館)
– 大学生の教科書
- ヒューズビー・リソースセンター
– 小学校から高校までの教科書
- ディスレクシアのDAISYユーザーとの交流

ディスレクシアの診断

- 4歳児検診
- 小学校2, 4年生でスクリーニング
- 各学校に付属しているPPT(教育心理センター)が、より詳細な診断と支援(PCやソフト等)の提案
- 数年前までは、診断が必要だったが、今は、ニーズがあれば、支援を開始(診断名別→ニーズ別)
- 大学のディスレクシアの学生の40%が診断を受けていなかった
- 新しく、簡単に診断ができるテスト(Logos)ができた

児童の環境(日本との違い)

- 必要な子どもには国からパソコンが提供され、学校で利用できる
- 学校は必要な子どもに支援を提供する義務があると法律で決められている
- 子どもには必要な支援を受ける権利がある
- 一人一人のニーズによって教科書も選ぶことができる
- 「読み 書き パソコン」が学習の基礎(政府の方針)
- デイジー・e-テキストなどの代替教科書および支援ソフトは学校が購入し、提供する
- 特別支援の修士号を持つ教員が各学校に1人いる

ディスレクシア協会

- ディスレクシア当事者と家族が運営
- 数年前より家族主体→当事者主体へ移行
- 資金の2/3は国が補助 文化省 厚労省 教育省(当事者の自立を支援する団体への補助金含む)
- メンバーが6000人(内1000は学校)
- 全土に35の支部がある
- 青年部(26歳以下の会員の理事会がある)



今年の重点活動(2年毎に更新)

- ディスレクシアフレンドリースクール認定のための講習
- 自尊心を向上させるためのワークショップ(家族で参加)の開催(→自立支援)
- ICTの講習(自立のため パソコンと支援機器・支援ソフト)
- 早期介入(4歳児健診)・早期支援
- 英語教育(将来の仕事獲得のため)

ディスレクシア・フレンドリー・スクール

- ディスレクシア当事者が講師
- 学校の先生のための講習
- 海外のノルウェー人学校からも受講
- 内容
 - ディスレクシアの理解
 - 有効な支援方法



ICTトレーニング

- 支援ソフト
 - 単語予測
 - スpellチェック
 - 読み上げ(TTS)
 - 文字認識(OCR)
 - 辞書
- ワード
- エクセル
- パワーポイント
- デイジー
- スーパーユーザー(当事者のエキスパート)は、学校の先生や他の生徒を支援



NLB(国立盲人図書館)

- 国立施設
- デイジー、e-テキストと点字図書 of 製作と提供
- 学生部では大学以上のデイジー教科書提供を担当
- 視覚障害者のための施設として設立したが、ディスレクシアを含む読みに困難がある人たちへもサービスを広げている
- ディスレクシアへのサービスは5年前から開始(既存の本の貸し出し)

NLBでのデイジー図書

- 1年で350タイトル
- 制作費は政府から出ている
- 録音は、俳優等のプロに、1冊ごとの契約で、賃金を支払う
- DAISY編集は、NLBのスタッフが行う
- 50%は人が録音、50%は合成音声(TTS)でフルテキスト
- 大学への製作技術移転をはじめた
- 現在はCDで配布しているが、ダウンロードできるようにする準備をしている

ヒューズビー・リソースセンター

- 国立施設
- 1975年に視覚障害者のためのリソースセンターと、学校へのコンサルタントとして、活動開始
- 2006年にディスレクシアへの提供開始
- 小学校から高校までの代替教科書(デイジーと点字)の製作と提供
- ノルウェーの生徒数は、視覚障害者数百人に対してディスレクシア1万人
- スタッフは、フルタイム10人、学生アルバイト25人

ヒューズビーのデージー教科書

- 2009年で、全学校の50%以上がデージーを購入
- 1年間にデージー図書約200冊を製作し、それ以外は、デージー製作会社から購入
- 製作費は政府から出ている
- ほとんどは音だけのデージー、フルテキストのデージーも製作し始めている
- 録音アルバイトは、教科の専門知識を持つ学生
- ガイドラインを使って製作トレーニングを提供
- 視覚障害者にもディスレクシアにも同じデージーを提供



当事者からの希望



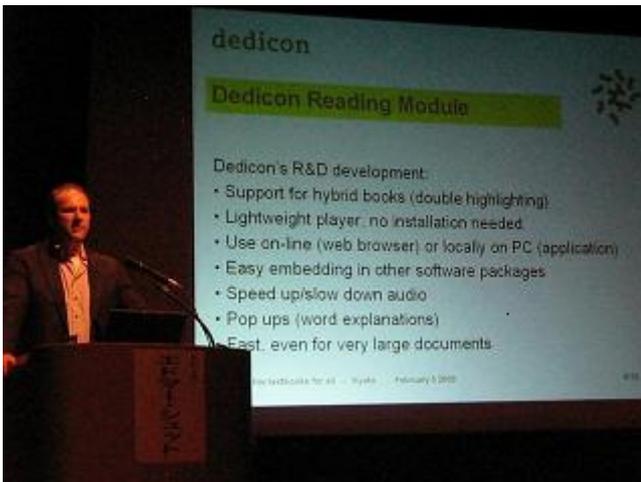
- 日本でもディスレクシアのことを理解してくれる人が増えるといい
- 自立するための技術を学べる環境と支援する体制があるといい
- 日本でもデージー教科書を学校に持って行けるようになるといい
- ディスレクシアの早期発見・早期サポートがしてもらえるといい
- 必要な支援を国が保障してほしい

エドマー・シュット

デディコン

「オランダの DAISY 版教科書提供の現状」

デディコンはオランダにおいて最大のアクセシブルコンテンツ製作者です。3万人以上の利用者の多くは視覚障害者やディスレクシアで、6歳以上の方が利用しています。製品としては、人生を豊かにするための図書や新聞や雑誌そして教材を使っています。それから点字図書や録音図書です。音声は DAISY フォーマットです。5年ぐらい前から使っています。それから電子テキストとハイブリッド図書も作っています。CD で本も配布していますし、来月にはストリーミングサービスを始めることになっています。1年間に160万CDを作っています。新しい流通システムとして、ストリーミングというものが使われるようになるということを期待しています。



います。

ハイブリッド図書とは何か簡単に説明します。フルテキストの図書、つまりテキストのみの図書とフル音声の図書、つまり音声のみの図書を組み合わせたものです。したがってマルチメディアを使って、このテキスト・音声を組み合わせることができます。そしてこの2つが同期化されます。音声を聞くと同時にテキストのその部分がハイライトされるので、どこを読んでいるかが分かります。画面上で見ながら耳から聞こえてくるという仕組みです。ナビゲーションも簡単にできます。本の構造は非常に分かりやすくなっています。

なっています。

またハイブリッド図書はどこでもテキスト検索することができます。見つけると同時に、音声・テキスト両方を見たり聞いたりすることができます。また画像を提供することができます。重要なのは、もともとの活字のレイアウトを維持できることです。子どもたちは他の生徒、クラスメートと違う本があるというのは嫌です。オランダの状況というのはイギリスと似ていると思います。ですからほとんどの生徒は、普通の学校に通っています。特別な存在になりたくなくて、他の子どもたちと同じことを望みます。したがって他のクラスメートと同じ本、教科書を手にして勉強したいという、そういった気持ちが非常に強いと思います。

私たちは他の主な出版社、特に児童図書や学習教材を出版している会社と共同で動いています。多くの出版社と緊密な連携を図りながらいろいろな活動をしていますし、このようなハイブリッド図書を自分たちのために作ってくれないかという働きかけは比較的多くあります。

私たちが今現在出版している3つの製品をご紹介します。子どものためのリーディングメソッドとコーランのオランダ語訳とディスレクシアの子どもたちのためのものです。その違いはソフトウェア・パッケージに組み込まれたリーディングモジュールだったり、独立したものだったり、3つ目はオンラインのもので、画面上を見ていただきたいんですけども、これが左側のページをコピーしたものでありまして、まったく同じレイアウト・色。唯一、フォントを多少調整しています。と言うのは、私たちは同じものを作れませんのでフォントだけ違います。一番下のところにコントロールがあります。非常に簡単なリーダーです。再生、一時停止、停止ボタンしかありません。フォントを拡大することができますし、またスピードを調整することが

できます。

これはハイブリッド図書です。したがってオーディオが聞こえる限り、テキストがその部分をハイライトします。普通に同じものを読みたいという子どもの要望にこたえています。これはオンラインのハイブリッド図書です。ハイブリッド図書はオンラインでもオフラインでも同じモジュールで見ること、読むことができます。先ほどの本と違って、こちらはワードレベルでハイライトされます。

こういった本がどのように製作されているかという点、元の出版社からの PDF ファイルしかありませんので、PDF ファイルをもとに作ります。そして変換ツールを使って HTML に変換します。そしてそれによって言葉がどういった位置にあるのか、本のレイアウトがどうなっているかが分かります。それに基づいて、その結果いろいろと変えて DAISY2.02 の本に作り替えます。私たちはドルフィン社の Ease Publisher を使っています。ナレーションを入れて、テキストとオーディオの同期化を図ります。その後、Dreamweaver を使ってレイアウトの問題を修正します。まだロード集約型の作業であると言っていいと思います。

そしてさらにここで単語レベルの同期化を図りますと作業は複雑になりますけれども、同じ方法を使っています。PDF を HTML に変換します。そしてこれを DAISY2.02 に変換します。一方で別にオーディオを製作します。ですから1つの製作ツールではなく、別なツールで、テキストとオーディオをそれぞれつくります。オーディオとテキストをオランダのフィリップスの変換ツールを使って、自動的に単語レベルで同期化させます。結果的に、単語ごとの時間情報が記入された XML ファイルができます。それをまた DAISY コンテンツの構造へと変換し直します。そして最後レイアウトの調整を図ります。最終的には文章よりも単語レベルの同期化のほうが簡単です。と言うのは他のツールを使って同期化が図れるからです。

シェル・ハンソン発表概要

スウェーデン国立録音点字図書館

「スウェーデンの DAISY 版教科書提供の現状」

スウェーデンで DAISY 版教科書が大学生にどのように提供されているのか、お話しします。私はスウェーデン国立録音点字図書館(TPB)を代表してこの場にいます。TPB は、文化教育省のもと、政府の助成金で運営されている図書館です。2009 年は、おそらく 350 万米ドルの予算が提供されています。

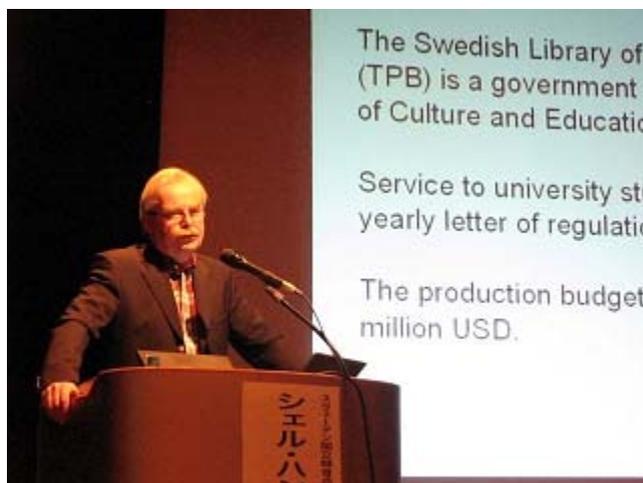
さて、政府の目標は、男女とも、経済状態あるいは障害により制限されることなく高等教育を受けることができるというものです。また、政府のもう 1つの目標は、読むことに障害のある大学生がアクセシブルな教科書を使用する権利を持つというもので、TPB による教科書サービスは、学生が無料で利用できるようになっています。また、すべてのスウェーデンの大学に適用されている障害のある学生への差別を禁止する法律もあります。

また、スウェーデンの人口は 900 万人で、50 の大学そして単科大学があります。そしてどの大学にも障害学生支援コーディネーターが置かれております。2007 年には印刷字が読めない障害だけでなく、様々な障害がある 4,300 人の学生がコーディネーターに相談してきました。そしてそのうち 2,500 人はディスレクシアでした。ですから大半の障害をもつ学生は、何らかのディスレクシアを抱えているということでもあります。2007 年、TPB は、2,100 人の活字を読めない学生を支援しました。そのうち 1,600 人はディスレクシアでした。そのうち 70%が女性でした。そして 2007 年から 2008 年にかけて、このような学生が 13%増加しました。高等教育の学生の大半は女性ですので男性の学生を増やすため、多額の資金を投下しています。

2006 年以来、TPB ではスウェーデン語及び英語の合成音声による図書の製作が増加しています。完全なテキストと、それから音声が付いたものです。2008 年に TPB が製作したのは肉声による録音図書 695 タイトル、合成音声による録音図書 719 タイトル、そして点字、電子テキスト、大活字図書が 142 タイトルでした。この図書は、CD-ROM で学生に配布されます。コピーは大学、単科大学の図書館によって、インターネットを通じてダウンロードされます。また、それぞれの大学で学生用の CD-ROM が作成されております。昨年度は 80 の図書館において 14,000 タイトルがダウンロードされました。

さて、サービス全体の概要をご紹介します。それぞれの学生が地元の大学図書館に相談してきます。そうすると図書館が Web ベースのカatalogでタイトルを検索します。それから図書館が TPB のアーカイブから利用可能な図書をダウンロードし、CD-ROM コピーを作成します。そして TPB が学生を登録し、ソフトウェアとハードウェアプレイヤーを学生に送付します。現在ビクターやプレクスターのプレイヤーを提供しています。

また、TPB は、データブックファイルから合成音声に変換することのみを行っており、デンマークとスウェーデン、そしてインドなどの業者に教科書の製作を外注しています。将来は、直接学生に配布したいと、「ス



「チューデント・ダイレクト」というプロジェクトを立ち上げました。80 人の学生、スウェーデンの総合大学2校と単科大学1校が参加しております。インターネットを通じて図書を配信し、学生が自宅でダウンロードもしくは、ストリーミングできるようにするというのが目標になっています。

最後に、学校制度には、もう1つ政府機関が関係してきます。これは全国特別支援教育学校局というもので、このSPSMは電子テキストと点字DAISYによる教科書を製作しております。そして商業出版社が印刷図書をアクセシブルなフォーマットにする取り組みに対して財政支援を提供しています。TPB はカタログを作成し、ダウンロードできるように学校の図書館などに提供しています。

パリ・ストックホルム・オスロ出張報告書

日本障害者リハビリテーション協会
情報センター 野村美佐子

はじめに

2009年1月9日から17日にかけてパリ・ストックホルム・オスロの3ヶ国を以下の目的で訪問した。

- 1) パリで開催されるIFLA/LBS(LBSは、現在、LPDと名称変更)常任委員会において、フランス、イギリス、スペイン、オランダ、フィンランド、ベルギー、ドイツ等の各国図書館における障害者の情報支援に関する聞き取り調査を行う。
- 2) スウェーデンにおける読みやすい図書基金(Easy to Read Foundation)の活動状況取材、DAISY版義務教育教科書の製作および活用状況およびその周辺環境の調査等
- 3) オスロのNLS(ノルウェー録音・点字図書館)で2月のDAISY関連シンポジウムにディスレクシア当事者を招聘するための打ち合わせに出席

日程は以下の通りである。

1月10日(土)

ParisでIFLA/LBS常任委員会2日目出席および取材

場所: バランタン・アユイ協会(AVH)

担当者: 上記委員会委員

1月12日(月) 午前

7歳～15歳の生徒へのDAISY版教科書プロジェクトの聞き取り調査

場所: 王立点字・録音図書館(TPB)

担当者: Ms. Jenny Nilsson (児童図書司書)

1月12日(月) 午後

義務教育における代替教科書の提供を担当する機関 National Agency for Special Needs Education and Schools (SPSM)の聞き取り調査

場所: TPB

担当者: Ms. Harriet Kowalski (製作と販売・管理部部長)

Mr. Bjorn Nyquist (ICT コーディネーター)

1月13日(火) 午後

DAISY関連ツールについてのTPBの開発状況

場所: TPB

担当者: Mr. Kjell Hansson, Mr. Markus Gylling

1月14日(水) 午前

読みやすい図書ガイドラインに関する会合

場所: Radisson SAS Royal Viking Hotel

担当者: Mr. Bror Tronbake (読みやすい図書基金所長)

1月14日(水) 午後

DAISY 版教科書プロジェクトの実施者に聞き取り調査

場所: Radisson SAS Royal Viking Hotel

担当者: Ms. Anita Hilden (レークニツタン (Leknyttan) 教育社)

1月15日(木) 午後

2月の京都でのシンポジウムに招待予定のディスレクシア当事者、
Ms. Mai-Linn Holdt に取材

場所: Norwegian Library of Talking Books and Braille

上記の予定で調査および取材を行い、日本における障害者の情報支援およびDAISY版教科書製作の活動に参考となる情報を得ることができたので、訪問した国ごとに報告を行う。

パリでの各国図書館における障害者情報支援の調査結果

王立点字・録音図書館(TPB)スウェーデン

スウェーデンではマルチメディア DAISY 図書の製作が始まり、現在 300 タイトルが完成している。そのためのプロジェクトについてはストックホルム訪問の報告の中で詳細に触れる。2008 年の 10 月から、2つの大学と1つの単科大学が関わって、学生による直接ダウンロードに向けたプロジェクトが始まった。

ドイツ

2008 年後半に点字楽譜に関するシンポジウムを開催した。その際のプレゼンと資料は、www.dzb.de/bachに掲載している。また楽譜を点字に点字を楽譜に変換するソフトウェアを開発した。ドイツにおいてはArgonというドイツの大手出版会社が商業用音声コンテンツをDAISYに変換した 100 タイトルを一般市場で販売する予定だそうだ。

南アフリカ点字図書館 南アフリカ

南アフリカ点字図書館では、それぞれの出版社との合意書を作成して、個人に対してサービスを行えるようコピーライトが免除されることが可能となった。12月8日には、障害者部門における DAISY のイニシアチブが始まり、南アフリカの11の言語でのエイズに関するマニュアルが完成した。

セリア(GELIA):フィンランド

フィンランドの出版社と交渉して 99 パーセントの電子ファイルを手に入れることが可能になり、DAISY 製作を依頼ベースで行っている。ロシアと共同でさわる本を作成し、ロシアの Murmansk でさわる本のワークショップを開催する予定である。セリアの利用者が増加していて 15,000 人になり、毎月 200 から 350 人の利用者が増えている。

Luisterpunt 点字図書館: ベルギー、フランダース地域

2 つの点字図書館がフランダース地域レベルでサービスを提供するために統合した。製作と図書館機能が分離した。図書館は、オーディオブックを製作することはなくなり、製作者から買うために国が資金提供をおこなう。このことは図書館にとって市場開発と推進の多くの機会となっている。300 ある公共図書館は、Luisterpunt により提供される DAISY を利用している。また国は、老人ホームがそれぞれ DAISY 再生機を所有する上での経費を負担している。現在までに、約 2,000 台が購入されている。

バラタン・アユイ協会(AVH) フランス

ルイブレイル生誕 100 年の記念会議を開催した。また新しい図書館がオープンした。著作権が変わり、前もって許可が必要なくなったが、実施する上においてファイルのフォーマットに関わる問題があり解決していかなければならないと考えている。グローバル・ライブラリーの構築のためのプロジェクトに関してカナダの点字図書館である CNIB と作業を行っている。また 2 人の盲人が司書の資格を得ることができた。

王立盲人援護協会(RNIB) イギリス

今後 3 年間の高レベル戦略を構築した。最近の古い DAISY 再生機を新しくするプロジェクトで 19,000 台が発注された。イギリスでは 2 つの点字図書館が一緒になったので、更にその調整を必要としている。

デディコン(Dedicon) オランダ

デディコンでは、今後、ビジネスを行う組織にしていくために、内部の変革を始めている。外部のコンサルタントが雇われ、予算の 1 部はそのために使われる。またその他の予算は、革新的なプロジェクト、オンラインや電話でのサービス、コンテンツのストリーミングサービスなどに使用される。更に、テキストと音声のハイブリッド図書(電子図書)を製作するというパイロットプロジェクトを出版会社と行った。DAISY 再生機をベースにした再生ソフト、AMIS が出版会社の学校を対象とした販売図書に組み込まれている。

DBB(デンマーク点字図書館): デンマーク

図書館の名前は新しく「Nota」と変更し、公式には 2009 年の 4 月から使用する。リクエストに応じたデジタル図書の製作を行っており、今後 4 年間の新しい合意を文化省と締結し、目的とビジョンが合えば、助成が増えていくそうだ。利用者が視覚障害者に次いで多いグループはディス

レクシアである。また児童と青年に対して図書館サービスを行う。DBB のサービスを推進するためにサービスを利用したことのない人達を対象として MP3 フォーマットの CD を配布している。ウェブ上での DAISY のストリーミングが可能となるポータルサイト(E17)の運用開始をはじめると予定だそう。また、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、そしてアイスランドの点字図書館と共に、グローバル・ライブラリのミニ版となるパイロットプロジェクトを行っている。

日本における DAISY の取り組みについても報告をする機会があり、報告を行った。日本障害者リハビリテーション協会は、国から助成を受けて、ディスレクシアキャンペーン事業を行い、DAISY のセミナーや展示の開催、小・中学の通常の教科書を利用できない生徒の希望に応じて DAISY 版教科書の製作・提供を行ったことを話した。また 2008 年には、教科書に関わる著作権の改正により、ニーズに応じた DAISY の複製が許諾なしに可能となったこと、更に、2009 年度より教科書出版会社からデータが提供され、提供に関わる経費が国の負担となるが、現実にはすぐにそこまで実施されるかは疑問であることも報告した。

2 月には、DAISY コンソーシアムの理事会が日本の京都で開催されるのでその日程に合わせて、理事会終了後、日本障害者リハビリテーション協会と特定非営利活動法人支援技術開発機構(ATDO)が DAISY に関わる DAISY 版教科書についてのセミナーを、また ATDO は地域における障害者へのインクルーシブな情報支援のシンポジウムなどを企画していることを話した。また DAISY の利用事例を集めた当協会製作の「Enjoy DAISY」という英語の字幕付きビデオを希望者に配布することを約束した。

スウェーデン

7 歳～15 歳の読みが困難な生徒への DAISY 版教科書プロジェクトの聞き取り調査

スウェーデン国立録音点字図書館は、2008 年の春の 1 学期間、スウェーデンのリーディングエー市において、マルチメディア DAISY 図書を製作し、学校で試してもらい、生徒たちに適合すかどうか、またどのようなものであるべきかを調査した。対象児童は読み書きが困難な 7 歳から 15 歳の普通の学校 36 人の生徒と養護学校の 16 人の生徒に対して行われた。生徒のほとんどが ADD(注意欠陥障害)やディスレクシアであり、発達障害(自閉症、知的障害者)の生徒もいた。実際の調査は、子共向けの教育的なソフトを扱っている ティレスエー市 レークニッタン(Leknyttan)教育社のアニータ・ヒルデンが担当した。今回、上記調査に関わったジェニー・ニルソンとアニータ・ヒルデンにお話を聞いた。

ジェニー・ニルソンによると、調査のために図書は、6 冊から 7 冊製作をしており、テキストと音声、そして画像を使ったマルチメディア図書である。オリジナルは出版した本となる。ストーリーは年齢に合わせてそれほど優しくないが、テキストはやさしく書かれている読みやすい図書(LL book)を利用していた。知的障害者を対象とした DAISY 図書は簡単な内容である、違った声で読む、サウンドを利用するなどの工夫をしている。また写真を多く利用している。あるいはテキストと写真の併用を多くしている。しかしそのためのコストがとて高くなってしまったそう。

DAISY 化においては、センテンスごとに読んだもの、パラグラフで読んだものと 2 種類用意をしていた。合成音声を一切試用せず、リラックスをした状態でゆっくりと読むことで読書に慣れる

きっかけとした。再生ソフトはフリーのソフトウェアの AMIS と有償のスウェーデン語の EasyReader (Dolphin Computer Access) を使用した。また利用方法として、マルチメディア DAISY 図書を 1 ページずつ聞き、その後読み上げを停止し、同じ文章を自分で読み、教師に質問をするという形態を取ったということだ。

DAISY 図書は、クラスで読んで貰い、利用した生徒に対してアンケートを行った。ほとんどの人が黄色い反転があるとどこを読んでいるかがわかって良いという結果を得た。また基本的に原本と同じにしたが、絵が先にきてその説明が後にあるほうが良いという希望も合ったそうだ。日本でも教科書について同じような希望を言ってきた生徒がいたので、今後の課題として考えたい。

前述のアニータにもインタビューを行った。マルチメディア DAISY 図書は、先生から読書トレーニングに効果があるというコメントをもらったと話をしている。幼児のコンピュータ使用についてお話をしているうちに、アニータさんが子共コンピュータ・プレイセンターのプロジェクトに関わっていたことがわかった。スウェーデンでは、1992 年からは、2 歳半から 18 歳までの機能障害を持つ子共達は、国内のコンピュータ・プレイセンターで遊ぶことができるようになった。スプーンがもてるようになればマウスも使用できるとして 2 歳半からになったそうだ。養護学校の各クラスにも少なくとも 1 台のコンピュータがあるそうだが、就学前に子どもたちにコンピュータでゲームを楽しんだりしてコンピュータに親しませていく。また親も引き入れていく。このプロジェクトについては、ビルギッタ・イツバリイ氏を 2003 年の 10 月に日本障害者リハビリテーション協会主催の ICT セミナー「認知・知的障害者の社会参加と情報技術」に講師として招待した。(http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/conf/031025/index.html) その打ち合わせに同年 8 月にスウェーデンを訪問し、その際にアニータに会ったことを思い出した。その頃から障害を持つ子どもたちへのパソコン指導、教師への支援などを前述のビルギッタと行って来たという。

尚、今回のマルチメディア DAISY プロジェクトでは、パソコンの習熟度について DAISY 図書を利用した生徒に聞いている。36 人が慣れている、11 人が大変慣れている、2 人が慣れていないと回答をしており、多くの人がパソコンを使用していることがわかった。今後、TPB のジェニーとレークニッタン (Leknyttan) 教育社のアニータの協力を得て、DAISY マルチメディア教科書についてスウェーデンと日本の関係者で意見交換が行うことができればと考えている。

義務教育における代替教科書の提供を担当する機関、特別支援教育庁 (National Agency for Special Needs Education and Schools (SPSM)) の聞き取り調査

SPSM は特別支援教育のサポートの国の機関、スウェーデン特別支援教育研究機関、ろうおよび難聴のための学校が統一され、特別支援教育と特別支援学校のための教育機関として、政府のサポートをコーディネートする目的で 2008 年の 6 月に設立された。この機関の目的は、児童、障害をもつ青年および成人が質、参加、アクセシビリティ、および交友をベースとした教育を受けることを保証することであった。上記機関は、通常の教科書を利用できない障害者に E テキスト点字、少数の DAISY 録音図書を製作している。自分で作成すると言うより、TPB から合成音声の DAISY 図書を購買し、アクセシブルなフォーマットで印刷版の教科書を製作している企業に経済的な支援を行っている。

昨年1月にもミーティングを持っており、今回は、SPSM から Ms. Harriet Kowalski（製作と販売・管理部部長）と Mr. Bjorn Nyquist（ICT コーディネーター）が参加した。SPSM 側からは、DAISY コンソーシアムが進めている技術開発のプロジェクトに協力したいとの意向が示された。それを受けて、TPB の Mr. Markus Gylling が、DAISY コンソーシアムにおける DAISY 関連ツールの技術開発について説明をした。更に、同行の河村宏氏が DAISY コンソーシアムの会長として、SPSM と TPB に、DAISY コンソーシアム主導の共同プロジェクトの要請を行い、今後の活動が期待される場所である。

オスロのディスレクシア当事者に DAISY 利用のインタビューおよび 2009 年 2 月の京都における DAISY 関連シンポジウムの打ち合わせ

ノルウェー録音図書・点字図書館のアーニー・シェルシュブーにミーティングの設定をお願いして、ディスレクシアの当事者、Ms. Mai-Linn Holdt とその父親に取材および日本への招待の打ち合わせを行う。彼女は現在 16 歳で、読むことに困難を抱えている。そのため、DAISY 版教科書を使い始めたそうだ。日本の DAISY 版教科書とマルチメディア DAISY 図書を見せたが、彼女の DAISY の利用方法が日本とだいぶ違っていた。彼女はパソコンで DAISY の音声を聞き、その前に本のコピーを置いてテキストを目で追っていくという方法を取っていた。同行の河村氏が日本での日程、彼女が参加するシンポジウムの概要、目的などの説明を行い、質問を受けた。Ms. Mai Lin の来日には父親が同行することになった。

秋山里子、吉田公子、池松麻穂

北海道浦河べてるの家

「自分たちの津波避難マニュアルで安心を手に入れた経験の報告」

池松ノただいま紹介いただきました、「浦河べてるの家」から参りました。私はソーシャルワーカーといひまして、精神障害をかかえる皆さんの相談にのったり、いろいろと将来と一緒に考えている池松麻穂です。よろしくお願いいたします。

秋山ノこんにちは。秋山里子です。私は、4年前に浦河に来ました。その前は精神科に半年入院していました。当時は、うつ状態がひどかったのですが、浦河に来てからは、薬を2週間だけ飲み、今は薬は飲んでいません。仲間に支えてもらいながら毎日、生活しています。よろしくお願いいたします。

吉田ノこんにちは、統合失調症の吉田公子です。浦河には3年前に来ました。今は薬を少し飲んでいますが、仕事は、ニューべてるでグッズ部門の仕事をしたり、お店でも店番などもしています。よろしくお願いいたします。

池松ノ限られた時間なのですが、もりだくさんのネタを用意しているので、60分で収まるか心配です、駆け足でやっていきます。浦河町は、北海道の襟裳岬の近くにあります。私たちは昨日の昼1時に浦河を出発し、京都のホテルに着いたのは9時、8時間かけてやってまいりました。浦河町の概要は、人口は1万5000人を切りまして、産業としては牧場、馬(サラブレッド)の生産と、海があるので、コンブやイカをとって産業が成り立っています。しかし課題としては過疎化が進んで、産業が衰退し、北海道でアイヌ民族の方がいらっしゃる地域でもあるので、歴史的差別が昔から続いている地域でもありました。今、写真に出ているのは浦河の様子です。イカがとれたり、牧場で馬がのびのびしていたり、桜がきれいだったり、海がきれいだったり、非常に田舎な感じなんです。こんないろいろな課題のある浦河町で生活している中で、昔から一番みじめだと言われていたのは精神病で病院に入院することでした。現在は日本人の35人に1人が精神科を受診していて、日高管内でも30人に1人が通院中ということで、決して珍しい病気ではないのですが、例えば統合失調症。吉田さんは当事者ですが、その病気になると幻聴といって、周りの人には聞こえない、その人にしか聞こえない声が聞こえたりして思うよう



な行動ができないことがあります。周りの一般の町民から見ると、何が起きているかよくわからないので「変な人」となり、精神科病棟に入れられてお先真っ暗な状況が続いていました。この写真が現在の浦河赤十字病院です。私たちべてるの活動はこの病院を退院した統合失調症の当事者である、べてるの家の理事長、佐々木実さんが退院したときから始まり、病気があっても浦河という地域で暮らしていく上で、地域で役割をもって、地域に貢献してやっていくためにはどうしたらいいかを考えるところから始まりました。そこで考えたのが、地域の特産品である日高昆布を全国に売ること、商売をすることを始めました。商売をすることはなかなか難しいことでした。健常者と言われる人ですら苦勞する取り組みです。病気になったからといって保護されるだけではなく、人として生活する上で当たり前の苦勞をしようということで、作業ではなく商売をすることにしました。浦河町内にある小さな教会から数人で始まったべてるの家の活動ですが、現在は統合失調症、うつ病、依存症、いろいろな障害をお持ちの方が100人以上参加して成り立っています。べてるの組織としては、最初に佐々木実さんが始めた当事者組織から派生して、有限会社ができたり、社会福祉法人、NPO法人ができたりといろんな活動になっています。役割としては、働く場と生活する場。グループホームとか共同住居を持っています。あとはSSTといって、自分たちの苦勞をみんなに情報公開をして練習するという、ケアする場にもなっています。町内のメインストリートに沿って浦河べてるの家の活動拠点がたくさんあります。地図が映像で映っています。赤い

丸のところすべてべてるの共同住居や活動拠点であります。この写真は、現在私たちが活動しているべてるの昆布作業をしている場所です。みんなで漁組から直接仕入れた昆布を袋詰めして全国に発送しています。今日も持ってきました。廊下で販売していますので、手にとっていただくだけでも結構ですので、ぜひのぞいてください。そろそろ本題に入ります。私たちが活動していく中で一番大切にしているのが、「三度の飯よりミーティング」という理念です。ミーティングをすることで自分たちの苦労をみんなに公開する方法で自分を助けています。ミーティングの基本の構成は気分・体調、よかったこと、苦労していること、さらによくする点を報告するという流れでやっていますが、口で説明しても、どんな感じなのか理解しにくい部分があると思いますので、今、この場で私たちが毎日やっている朝ミーティングの様子をやりたいと思います。朝ミーティングというのは、その日一日、朝の気分と体調を報告するものです。仕事の前に行くことが多くて、それをすることによって、自分は病気で、昨日幻聴さんがひどくて眠れなかったから、今日は働けないかもしれないとか。ぐっすり眠れたから私がお互いの分、働くよという、お互い助けるといことにつながっていきます。吉田さんから今朝の気分と体調、もうちょっと詳しい苦労の情報公開もお願いします。

吉田／おはようございます。今日の体調は夜遅かったので眠れないので寝不足気味です。

気分はいいです。ちょっと躁鬱なところがあって、躁状態になると人のことを顧みず、お騒がせで先走った方向に行くことがあります。今日は度数からいえば、ちょっと高いです。でも皆さん、よろしくお願いします。

(拍手)

池松／私たち、活動の中でも、誰かがしゃべったら、常に拍手をするのが癖になっています。よかったらみなさんも拍手してください。

秋山／おはようございます。今日の体調気分は、昨日8時間かけて京都にきたので、充実感があって、いいです。気分は、こういうステージの上でミーティングしたことがないので緊張しています。苦労の情報公開は、私の場合は、頭の中に「マイナスのお客さん」といって、マイナス思考がよくあって、それによって自分の行動が制限されたり、輪の中にいれなくなったり、感情をどのように出していかわからなく、気持ちをため込みやすいです。それがたまると急に感情が爆発して、ゴムで言うと、ゴムが伸びちゃったような状態になって、キャラクターがバラバラになりやすいというのがあります。

池松／ありがとうございます。(拍手)私、池松の気分、体調ですが、体調が昨日夜スライドをつくって遅くなってちょっと眠たいのですが、気分はとってもいいです。苦労は毎日、夜遅くまで仕事をしているんですけども、自分の苦労として、自分は仕事あまりできないんじゃないかというそういうマイナス思考があります。それを打開するためには忙しくすることなんです。自分を忙しく働かせていけば、「自分はよくやっているぞ」とほめたくなくて、こんな私でもそれなりに頑張っているからまあいいかと、自分を納得させる癖があるんです。でもその副作用としては、人とのつながりが薄れてしまうんです。忙しくしていたら、なかなかコミュニケーションがとれなかったりとか、お友達とコミュニケーションとれなかったりして、大切な人とのつながりが薄れてしまうという苦労があります。こんな感じで…ありがとうございます。(拍手)メンバーが苦労の情報公開をするのはもちろん、私たちスタッフも、メンバーに苦労の情報公開もしますし、スタッフ同士もして、お互いが働きやすい、生活しやすい環境を整えています。べてる用語がありまして、日本語でもなかなか伝えづらい部分がありますが、例えば、幻聴という普通にはない声その人には聞こえるということ、その人の中で起こっていることは、現実で起こっていることなので、「幻聴さん」と「さん」をつけて呼んだり、これから紹介します認知行動療法に出てくるマイナス思考の認知、頭に浮かぶマイナス思考の考えを「お客さん」と呼んだり、自分たちの今話してくれたような苦労を、自分たちで研究というアプローチから深めていくという、ちょっとわかりにくい活動をしています。もしかしたらこれからの話の中で、そういった分かりづらい表現があるかもしれませんが、そういうときはぜひ「どういう意味？」とおっしゃってください。その都度説明したほうが、流れが分かると思います。遠慮なくどうぞ。そのよ



うに、幻聴に「さん」をつけて、私たちは自分たちの苦労を情報公開しています。毎年、この活動を見に、全国から2000人を越えるお客様が過疎の町、浦河に来て、見て行ってくれます。また、幻覚妄想大会として、自分たちの幻覚や妄想の体験で、そのとき一番その年でユニークなものを表彰したりしています。海外からも少しずつ注目が集まりつつありまして、アメリカのイェール大学の中村かれん先生が研究に来てくださったり、韓国のソーシャルワーカーの方もたくさん遊びに来てくれたりしています。私たちの活動を支えている、3度の飯よりミーティングですが、そのなかで認知行動療法をしています。認知行動療法は、自らの認知と行動を観察しそれを上手に工夫することで、ストレスに上手に対処できるようになるための考え方と方法、と書かれていますが、難しいので簡単に説明します。認知というのは、ある物事に対して、自然に浮かぶ考えのことで、認知とは、例えば、学校で先生が「おまえって本当にバカだよな」と言ったとします。すると、1人の学生は、

／「先生に嫌われた、もうダメだ」

池松／というように落ち込んでしまうかもしれません。また、別の学生は、

／「俺につっこみいれるなんて、先生も俺のこと相当気に入ってるんだな」

池松／と、逆に自尊心が向上する場合もあります。同じ1つの言葉でも、このように、考え方、頭に浮かぶ思いは、違ってきます。認知行動療法の中では、1つのできごとに対して、どんな気持ちになるか、どんな体の反応が起こるか、どんなことが頭をよぎるか、どんな行動に出たかの4つに分けます。具体例を挙げると・・・色がみづらいですが、どんなできごとがあったか彼女からのメールが来ないという1つの出来事がありました。それに対して、まず頭をよぎったこと。

／「浮気してるんじゃないか、もし友達と、と言っても、俺は後回しか」

池松／すると、気持ちは怒り、傷つきます。体の反応として、頭に血が上る。どんな行動に出るか。

吉田／怒り、傷つき、その後、怒りのメールを連発。1時間おきにメールをするよう強要します。

池松／結果として、いつもイライラ、口論が絶えない恋人関係になってしまいます。

実は、何か1つのできごとに対して、体の反応と気持ちというのはなかなか変えるのは難しい。

ドキドキする動悸を止めることは難しいし、落ち込んだ気分を上げようとすると、逆にストレスです。でも、頭で考える認知とどういう行動を取るかという、認知行動の部分には修正が可能です。先ほどの例で具体的に。彼女からのメールが来ないことに対し、浮気してるんじゃないかと思っていたものを…。

吉田／入浴中かな？

池松／というふうに変える。怒りで1時間おきにメールする行動をしていたのが…

吉田／返事が来るまで読書しよう。

池松／すると、いつも口論が絶えない関係だったのが、お互いのペースで順調に交際が続くようになります。この認知と行動を変えるのが、認知行動療法のやり方です。この理論を使って、私たちはSST、という活動をしています。

吉田／SSTとは、ソーシャル・スキルズ・トレーニングといって、自分の困ったことを練習して、まずメンバーから相手役を選び、その苦労や問題を対処して、練習して、まず褒めることをして、さらによくする点を出し合って、また練習する場面です。

池松／グループワークなんです。ホワイトボードを目の前にして、みんなで輪になって、苦労を持ち寄り、仲間に相談して、具体的にどうしたらいいか対策をたて、実際にその場で練習して、その後、実際の場面で応用するという取り組みです。SSTは構造化といって、どのように進めるかがちゃんと決まっています。今、スライドに出ているのが、SSTのポスターの文面です。

練習の順序、参加のルール、よいコミュニケーションが貼ってありまして、これに基づいて行います。ここでも、やはり口で説明しても、どんなものか分かりづらいので、実際、私たちのやっているSSTをこの場で再現したいと思います。準備をしますのでちょっとお時間をください。



SSTでは、毎週べてるでは週に2回、病院で2回、合計4回行って、毎週どこかでSSTをやっているんじゃないかというぐらいたくさんあります。みんなで輪になって、グループになって行きます。私はリーダーとして、グループセッションを進めます。参加者たちが苦勞を持ってきて、それについて話し合います。では、やってみます。では、今日のSST、バラバラの会を始めます。よろしくお願ひいたします。(拍手)今日の課題、自分の苦勞を持ってきた方、いらっしやいますか？秋山さんですね、では苦勞の報告をお願いします。

秋山／いつも朝ミーティングをしていますが、その輪の中に入るのが、すごく緊張して、頭の中にお客さんが来て、それによってなかなか輪に入れないです。

池松／はい。朝ミーティングの輪に入るのがなかなか難しい。人がたくさんいますしね。秋山さんは特に、マイナス思考のお客さんが来やすいタイプなので。本当は秋山さんはどのようにになりたいと？

秋山／本当はみんなと輪に入って一緒にミーティングに参加したり、お話ししたい。

池松／本当はみんなの中に入りたい。なるほど。自分の行動がお客さんによって邪魔されちゃってる感じですね。ちなみにマイナス思考のお客さんは何と言って来るんですか？

秋山／お客さんは、お前が入ると空気が悪くなるとか。あとは、「その場にいるな」というような感じ。

池松／その場にはいけないと。

秋山／というのがきて、なかなか入れないです。

池松／それで体が固まってしまう。秋山さんの苦勞をわかりやすくするために、実際にこの場面を再現してみましよう。秋山さん、お客さんの役と、みんなの中に入りたいということで、仲間の役を選んでもらえますか？

秋山／お客さん役、幻聴さん役をお願いしてもいいですか？ 仲間役をハムちゃんをお願いしたいです。

池松／場面はニューべてるです。朝ミーティングのときに仲間が待ってるんですけど、秋山さん、この場に入りたくてもお客さんが来てなかなか輪に入れない。再現してみましよう。

／お前がこの場にはいけないぞ。

／お前が仲間に入ると空気が悪くなるぞ。

秋山／そうだよ、やっぱりやめとこ。ごめんなさい。

池松／ありがとうございます。

というような形で、秋山さんはうちひしがれて、仲間のところに来られないということですね。

それはちょっと深刻ですね。じゃ、こういうお客さんが来たときの対策として、自分の認知、お客さんに働きかけて、みんなの輪の中に入るという方法がいいんじゃないかなと思うんですが、ここでいいアイデア、何かないですか？

吉田／お客さんに一緒にミーティングに行こうと誘ったらどうでしょうか？

池松／マイナス思考のお客さんもミーティングに連れてくる。いいアイデアですね。

お客さんをなくそうと思っても、なかなかすぐにはなくせませんから、お客さんを連れて仲間の輪に入る。ほかに何か秋山さんの方でお客さんに伝えたいことはありますか？

秋山／私も一緒にみんなの中に入りたいという気持ちを伝えていきたいです。

池松／私もみんなの中に入りたいんだ、だからお客さんも一緒に行こうというふうに伝えるということですね。いい考えですね。それをちょっと練習してみて、仲間のところに行って、気分、体調を報告する、そういう練習をしてみましようか。秋山さんの練習。もう一度、お客さん、幻聴さん役をお願いします。

／こっちへ行ってはいけないぞ。

秋山／お客さん、私もミーティングに入りたいたいなと思ってるんだ。

／お前がみんなの中に入ると空気が悪くなるぞ。

秋山／ありがとう。幻聴さんもお客さんも一緒に輪の中



に行こう。朝ミーティング行ってみよう。ハムちゃんおはよう、今日マイナス思考一緒だけど、お客さんも一緒につれてきた。

吉田／一緒に頑張ろうね。

池松／秋山さん、ありがとうございます。今のよかったところをお願いします。

吉田／お客さんとか幻聴さんがいても、みんなの中に入りたいたんだ、ありがとうねと言って、幻聴さんにお礼を言ってから一緒に行こうと言ったのがよかったと思います。

池松／ほかによかったところは？実際にお客さん役をやってみて、どうでしたか？

／ありがとうと言って、自分の弱い部分を受け入れているところがよかったと思います。

池松／ありがとうございます。秋山さん、今日の練習、すごくよかったので、実際に明日の朝ミーティングから挑戦してみてください。宿題報告を楽しみにしていますので。

秋山／はい、どうもありがとうございました。

池松／こういった感じで、私たちはSSTのセッションを進めています。この後は実際に練習したことを次の日の朝ミーティングの場面で実践してみる。そしてどうだったかを次回のSSTの場面で宿題報告をするというふうにやっています。そして、認知と行動を変えた秋山さんは朝ミーティングで仲間の輪の中に参加ができる、この結果として快適に仕事ができるという流れになっていくわけです。今みたいな苦労を私たちは「当事者研究」という方法で深めることをもやっています。これは、生活上で起こっている苦労をみんなに相談して、研究というアプローチから深めていって、そこでどのように対策を立てたらいいかなというユニークな対処方法を生むものです。実際の研究例を報告します。具体的に。

吉田／お騒がせ先走り症というか、人より目立てという幻聴さんが来て、何か人よりも先走ってやってしまうことがあるんですね。

池松／幻聴さんが来ることによって、一度躁状態になるけれど、いったん上がるんだけど、それでつかれちゃったりして、幻聴さんのボリュームが強くなって、引きこもっちゃうことがありますね。こういう実際の苦労に対して研究をします。幻聴さんがきやすいときは、どんなときですか？

吉田／疲れて眠れないときです。つかれているけど、神経が過敏になると眠れなくなり、お客さんとかマイナス思考とか被害妄想が、幻聴さんみたいな感じで来ちゃいますね。

池松／疲れているときですね。あと悩んでいるときも幻聴さんはきませんか？

吉田／そうですね。

池松／これで幻聴さんが来やすいパターンがわかりました。これに対して、どんな対策を練りますか？

吉田／今やってみたいな問題で、SSTとか仲間に相談したり、スタッフに相談したり、または当事者研究でどんなときにお客さんが来るのかを図式化して、パターンを自分で認識して仲間のところに行きますね。

池松／対策としては、仲間のところに行ったり相談をするんですね。で、実際にさっきのSSTのように仲間に相談する練習をして、実際にやってみる。これが一連の「研究」という形で行われています。そして、地域で、私たちみんな、入院しているわけではなく、グループホームや共同住居、一般のアパートなど、精神障害をかかえながら、一般の地域で生活しています。そうすると病気の苦労だけではなくて、浦河という町は非常に地震が多く、いつ津波が来てもおかしくないと言われています。地震が来たときに津波から自分の身を守ることも、自分を助けるうえでは非常に重要です。防災活動というと堅苦しいイメージで、どうとっつけばいいのか分からないと、最初はそういうイメージですがべてるでは、これも楽しくやっています。それを表現するために、「防災の歌」を作りました。紹介します。

吉田／今日は来ていない替え歌名人が見つけた歌です。水前寺清子の「365歩のマーチ」の替え歌です。

災害は歩いてこない。 だから逃げて行くんだよ
一日一歩、三日で三歩、三歩逃げてはまだ足りない
災害はワンツーパンチ。 汗かきベそかきするんだよ
あなたのつけた足跡も。 きれいになくなる、津波で
腕をあげて、足をあげてワンツーワンツー。 休まないで逃げよ

それ、ワンツーワンツーワンツーワンツー

災害の被害は怖い。 だから歌っているんだよ
一年365日、何かある日も、ない日も
災害はワンツーパンチ。 風あり波ありあるんだよ
千里の道も一歩から。 始まることを信じよう
腕をあげて、足をあげてワンツーワンツー。 休まないで逃げよ
それ、ワンツーワンツーワンツーワンツー

池松／ありがとうございました。津波も地震も、実際に起こってしまうことですから、幻聴さんの対策と同じように、それを嫌だと言って拒否してしまうのではなく、せっかくやるなら楽しく防災活動をしようじゃないかというところから、このような歌を歌いながらやっています。実際に私たちは平成15年に、浦河町で震度6弱の地震を体験し、とても怖い思いをしました。そのとき、幸いに津波は30センチだったか、50センチだったか、被害は少なく、べてるのメンバーは全員無事でしたが、ものは倒れてくるし、こんなに揺れたら津波が来るかも、どうしようと、本当に苦労しました。先ほどの認知行動療法の例で言うと、地震が起き、津波がくる危険性があるとなったとき、頭をよぎる認知は「逃げた方がいいのか、逃げない方がいいのか。どうしたらいいかわからない」という不安な気持ち。体の反応は、涙が出たり、動悸が激しくなる。でも、行動はどうしたらいいかわかりませんので、テレビで確認したり周りを見たりして、行動が遅れます。すると、逃げ遅れる命の危機が、可能性として非常に考えられます。

その時の状況を、アクションを交えて表現します。よろしくお願いします。地震が起きるとき。

吉田さん、地震が来てもどうしていいかわかりません、1人で共同住居の部屋にいました。よーい、スタート！
地震発生。地震発生。

吉田／オー、マイガッド！怖いよ、どうしよう。どうしたらいいかわかんないな。

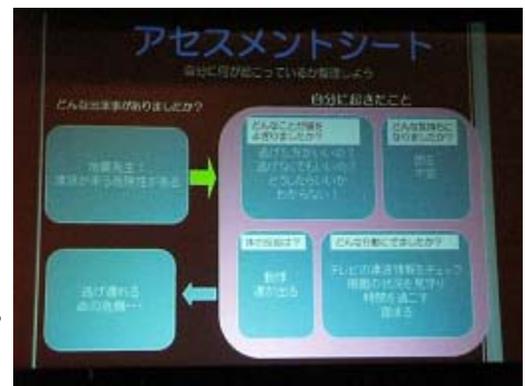
池松／そういう感じで、地震さんと津波ちゃんに対して、どう行動をとっていいかわからず、固まってしまう。そういう状況です。そこで私たちは、平成15年に、とても恐ろしい思いをしてから、日本障害者リハビリテーション協会やATDOのみなさんに協力いただきながら、防災研究を始めました。ここから防災の話、具体的にどのように活動していったか。苦労を具体的にまず挙げました。先ほど、吉田さんが表現したように、地震や津波が来そうだとっても、どうしていいかわからなかったの、まず地震や津波の特徴を知ることになりました。

吉田／地震後、4分で10メートルまで行けば、津波から守れるとわかりました。

池松／浦河に来る可能性のある地震、大きさは震度6～7の可能性があり、それが来たとき、最短で4分で10メートルまで津波が来ると勉強したんですね。どうしようかと。具体的にミーティングをして対策をみんなで考えました。4分で10メートルまで上ればいいので、そこに逃げられれば安全だと確認し、みんなで大きな地図を見て、自分の住居、仕事場からどこに逃げたらいいのか、具体的に選びました。ここで、避難マニュアルとして、DAISYを使いました。DAISYを使うことによって、その場所から具体的にどのように避難したらよいか、写真と字と音で表現され、メンバーたちも非常にわかりやすかったと好評でした。秋山さん、DAISYを使った避難マニュアルを見てよかったことは？

秋山／文字だけじゃなくて映像があるので、実際の避難経路が目で見分かって、「ここを行けばいいんだな」ということで、すごく分かりやすかったです。

池松／ありがとうございます。実際にDAISYマニュアルを見て、練習するという、次に避難訓練という活動に入ります。その時にもみんなが分かりやすいと好評でした。特に知的障害のあるメンバーや、幻聴さんとの付き合いに忙しいメンバーにも、わかりやすいと好評でした。練習の場面が映像でありますので、紹介します。



(上映中)

／暗い中で安全に避難するために夜間の避難訓練も実施しました。

池松／DAISYでまず、避難経路を確認しています。

／レインボーハウス、避難マニュアル。4丁目ぶらぶら座からの津波の時の避難場所はファミリースポーツセンターです。ストーブが入っているときはスイッチを切ります。リュックを持って部屋を出ます。駐車場入り口から、右に上がる道に入ります。ここまで行けば10メートル、あとはゆっくりで大丈夫です。

池松／避難経路を確認したあと、実際に避難訓練をスタートします。

／行くよ、まいちゃん、なっちゃんも行きますよ。

池松／この日はとても寒く、地面も凍ってつるつるでした。

／冬の夜を想定し、防寒対策にも重点を置きました。

／10メートル。

池松／みんなで10メートルがどこかを確認しました。

／危ない。すべる。着いた。着いた。

池松／10メートルを超えて、実際の避難場所の前で、記念撮影。帰ってきてから、避難訓練の振り返りをしています。

／あれは、役立つ。雪が積もったところを歩いたほうがいと分かりました。

池松／イナホリさんという統合失調症を抱えるメンバーですが、いつもDAISYをつくってもらっています。避難訓練後の今やっていたミーティングも、普段やっているのと同じようによかった点、苦労した点などを報告して、次回以降に生かすことをしていました。このような形で、私達は様々な場所からの避難訓練を行いました。自分たちの住む共同住居、グループホームもすべて、働いている場です。スタッフが中心でやるのではなく、住んでいるメンバーたちがどこに避難したらよいかを真剣に考え、避難訓練をしました。先ほども紹介したように、ある出来事に対して認知と行動は修正が可能です。防災活動においてもこれは同じだと私たちは考えています。先ほど地震が起きて、津波が来る危険性があるときに、吉田さんは震えて何をすることもできませんでした。そして逃げ遅れる可能性がある、という状況でした。ですが防災活動を進めたことにより、地震が起きたときに4分で10m、そうすれば大丈夫、という認知が頭に浮かびます。そして行動として、仲間ととにかく逃げる、共同住居で同じ仲間がいますから、仲間と声をかけあってとにかく逃げる。その時、先ほどお客さんもミーティングに連れて行きたみたい、幻聴さんも連れて行くことをポイントにしました。これを行うことで、命の安全を確保できます。安心を手に入れた吉田さんをアクションを交えて表現したいと思います。防災活動を進めていった吉田さん、よろしくお願いします。

吉田／地震だ、そうだ、この前みたいに4分で10m行けばいいんだ、防災グッズを持って、仲間と一緒にこう！

池松／地震が起こっても、津波が来そうでも、吉田さんは仲間と一緒に声をかけ合って、うまく命の安全を確保できるようになりました。もう1つ、映像があります。こういう活動を続けていて、実際に避難を去年の9月にしました。2008年の9月に震度3の地震が発生し、津波注意報がすぐに町の防災無線で流れました。その時も映像を撮ってあるので、それを紹介します。

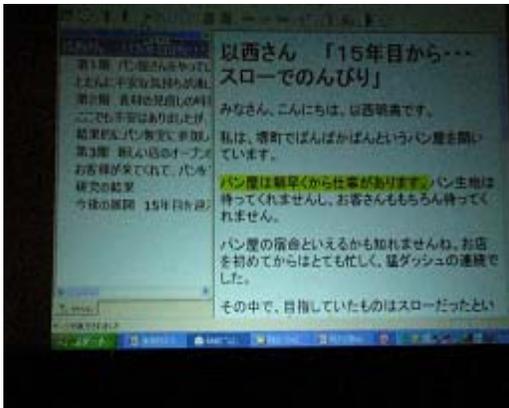
／只今津波警報が発令されました。海岸線や河川付近では…

池松／私達の活動拠点のべてるも、ニューべてるも海のすぐ近くにあります。ちょうど朝ミーティングをやっているときだったので、みんなで避難をすることにしました。

／だめ。だめ。まっすぐ、まっすぐ。

池松／今うつっているのは岡本さんといって、べてるで古いメンバーの1人ですが、精神病だけでなく、高齢化によって足も悪くなってしまいました。みんなで岡本さんのフォローもしながら逃げています。今ちょうど岡本さんがいる辺りが10mの地点です。10mまで来たら安心なので、ちょっとゆっくり歩いています。安全な場所でみんなで待っていたのですが、もちろんここでも記念撮影をしました。避難するときも楽しく避難しました。幸い、このときも津波は10cm程度ですぐに避難注意報が解除されましたので、私達は山を下りることができました。しかし私達の活動「4分で10m、とにかく逃げる、そして命の安全を確保しよう！」という、今までの練習を実践できた、

非常にいい体験をすることができました。そして、私達のこの活動は精神障害という立場で障害があるから守ってあげなくてはいけない、保護してあげなきゃいけないという保護される立場ではなく、私達の取り組み、自主防災の活動を今では地域に還元しています。では、消防の方、自治会の方々と協力して自治会の方で高齢者の方がいれば、その人たちも一緒に安全に逃げるにはどうしたらいいか、私たちの避難マニュアルを提供して、「一緒にここに逃げましょう」という話し合いもすすめています。主に認知行動療法、当事者研究と防災活動、DAISYという、大きく分けて二本立てでお話しましたが、新たな地域の広がりとして、地域の方も当事者研究がはじまっています。どんな活動かという、地域でも商売をされている人が沢山いますよね。べてるとその方たちは商売仲間です。その方達と一緒に、パン屋さんの研究をしました。それをDAISYで作ったので、紹介したいと思います。



(ハイライトされた部分を読んでいます)

／私は、境町で「パンパカパン」というパン屋を開いています。パン屋は朝早くから仕事があります。パン生地は待ってくれませんし、お客さんも、もちろん待ってくれません。パン屋の宿命と言えるかもしれませんね。お店を始めてからはとても忙しく、猛ダッシュの連続でした。そのなかで、目指していたものは「スロー」だったことに気がきました。今日は、浦河の町で今までやってきたことの実験結果を踏まえて、気づいたことを報告します。第一期 パン屋さんをやっていけるだろうかという、不安の時期。私は、保健所で栄養士として働いていました。というのも、一日中パンを焼いていたら、楽しいだろうなあ、と思ったからです。本当にパンが好きで、ずっと作っては、友人や職場の人に配っていました。やはり、おいしいよ、と言われたりす

ると自信が持てます。そのうち、子供のころからパン屋をやりたいと思っていたので、仕事を辞めて、パン屋を開きました。平成6年のことです。とたんに、不安な気持ちがわいてくるようになりました。失敗するかも。売り場に出せるパンを焼けなかったらどうしよう。それでも、やるって決めたので、とにかく頑張ろうと思って、続けました。本当は、ぼちぼちパンを作ろうと思っていたのに、お客様が来ると、お客様に合わせようと大変でした。わたしがパン屋をやっているのだろうか、と思っていましたが、やってみると、スムーズの事業が展開しました。第二期 食材の見直しの時期 平成11年頃から、地元の食材を使おうと意識するようになりました。もともと私は、栄養士として働いていましたが、その時は、話が中心でした。パン屋になってから、「栄養」という言葉で伝えるのではなく、パンという食品のなかで、栄養を取るということをあらわすことを大事に思うようになりました。野菜がたっぷり、栄養があるよ、ということをも形にしたかったのです。卵、野菜類を地元の農家や牧場から仕入れるようにしました。

池松／このようにパン屋さんの研究を一緒にしまして、パン屋をやったの苦労や、それまでやってきた流れをまとめて報告し合いました。ここでは病気か病気でないかという関わりでパン屋さんと接したわけではなく、1人の町民として、同じ商売をする仲間として、研究をして発表しました。私たちの当事者研究は病気の研究だけでなく、地域、そして日本中に広がりつつあります。ちょっとした苦労でも、苦労があれば何でも研究できますので、ぜひ皆さんも何か苦労があれば、仲間と相談して対策を練って研究する方法を一度試してみると、何かいいアイデアが出てくるかもしれませんね。では、そろそろ時間になりますので、最後、締めたいと思います。吉田さん、もう一曲歌を持ってきてくれたので、最後は歌でしめます。

吉田／岡本真夜の「トゥモロー」の替え歌で、「ようこそべてるへ」というのをアカペラで歌います。

病気の数だけ苦労はあるよ
幻聴と付き合う人のように
聞くものすべてにおびえないで
友達できるよ べてるで

突然爆発したり べてるで何があっても
あわててジョークにしても
その笑顔がたくましい
べてるのではさぼったり
抱きしめてるおかしとか
べてるに働きに來たら いいことあるから

病気の数だけ苦勞はあるよ
妄想と付き合う人のように
かなえるものすべてにおびえないで
友達できるよ べてるで

吉田／ありがとうございました。

池松／ありがとうございました。べてるでは、このように歌ったり、踊ったり、ロールプレイしながら楽しくやっています。べてるねっというホームページがあります。ひらがなで検索していただければ出てきます。たくさんべてるの情報が載っています。興味のある方はご覧いただけたらと思います。最後に一言ずつ感想を。吉田さん、秋山さん。

吉田／寝不足気味でテンションが下がっているの、みなさんをあまり楽しませられなかったと思いますが、自分は十分に楽しませていただきました。京都に來られてよかったと思います。ありがとうございました。

秋山／べてるとつながって、いろんな交流する機会とか、いろいろな人に会う機会に恵まれて幸せだなと思いました。今日皆さんに会えたのもよかったし、京都に來られて、べてるの発表ができて、うれしかったです。どうもありがとうございました。

池松／私からも。言葉足らずな部分、説明不足な部分など、わかりにくい表現もあったかと思いますが、聞いていただいてありがとうございました。こうやって京都に來たりとか、防災の活動で世界の人とつながれているのがすごくうれしいと思います。これからDAISYとか、防災活動を続けていきますので、皆さん、防災仲間、DAISY仲間としてつながっていただけたいなと思っています。ご清聴ありがとうございました。

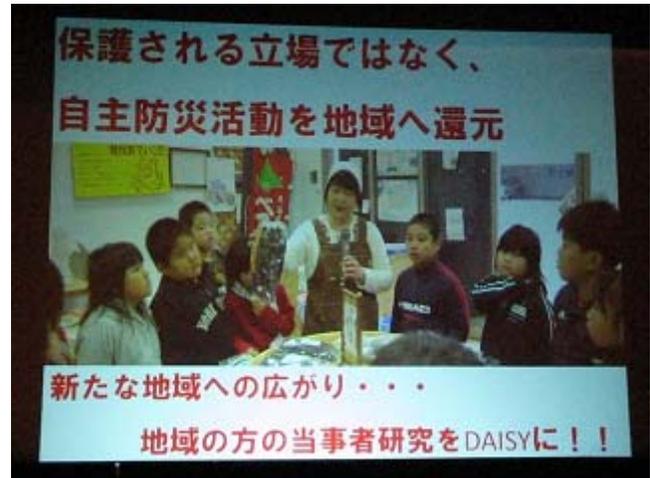
河村／まだいてください。どうもありがとうございました。大変楽しませていただきましたし、かみしめればかみしめるほど、中身ににじみ出てくる内容だったと思います。ここで質問を受けます。ご質問のある方は、手を挙げてください。千葉さん。

会場／非常に楽しい、興味深いプレゼンテーションでした。いろいろな工夫、方法の中で、そうやって解決するすべがあると勉強させていただき、本当に為になりました。疑問に思ったのは、こうしたユニークな方法、やり方をどうやって発見してきたのか、自分たちで作ってきたのか、という部分に興味がありました。あと、池松さんでしたか、おそらく、こうした取り組みは珍しい取り組みなのかなと思うんですけど、私は知的、精神とかはよくわかっていないのですが、もし、他の施設などからスタッフとしてきた場合、こうした方法が斬新なものだとすると、受け入れることが難しいことがあるかもしれないと思いました。そういったものが、ご自身の経験であったかどうか。それから、日本でこういった活動が広がっているとおっしゃいましたが、具体的にどのように芽が出ているのかをお聞きしたい。

池松／4つの質問いただきました。どのように楽しくやっているのか。吉田さん、防災だけではなく、べてるで楽しく活動をやるコツを教えてください。

吉田／普通ならみんな苦勞を聞くと下がるのですが、苦勞言ったことに苦勞しているんだなと笑いが起きるんです。不思議なところで。共感性があるので、そういったところだと思います。

池松／幻覚、妄想の苦勞も、津波・防災の苦勞もそうですが、みんなが苦勞を語り合うことで共有して、苦勞をただ辛いだけでなく、どのように研究したらいいのか、ワクワクするようなものに変えているんですね。その中には、たくさんの方の協力も必要ですし、防災活動に関しては河村先生はじめいろいろな方に協力をいただき、



そのほかの当事者活動でも、町内外を問わず、専門家の方々の応援やアドバイスをいただきながら、みんなでミーティングしながらわいわい楽しくやっています。2つ目の、べてるでの取り組みについて、私自身の経験です。

私自身の経験を話すと、私は浦河町の隣にある様似町の出身です。高校も浦河高校で、浦河赤十字病院の隣にあるところですが、そこを卒業し、大学で福祉を勉強して帰ってきて、ソーシャルワーカーとして働いています。私自身としては、子どもの頃からべてるを知っていましたし、大学時代にも、べてるに興味をもともと持っていて、浦河で実習をしたりしていました。私個人としては自分自身も楽しんでやっています。ただ、いろんな考えを持っている方がいるので、べてるの取り組みがもちろんすべてではないことも分かっていますし、いろんな意見を取り入れながら今後もべてるが運営できたらいいなと思っています。もう1つ、日本での活動がどのように広がっているか、べてるでは毎年6月中頃にべてるまつりありますが、秋山さん、べてるまつりと当事者研究大会のことを紹介をお願いします。

秋山／当事者研究全国交流集会があります。そこでは、全国から障害を抱えた人、そうでない方、いろんな見学者の方が全国から集まってくれて、そこでもいろいろな交流を持ちます。当事者研究全国交流集会は、全国の研究している仲間が集まって自分の研究を発表します。べてるまつりでは、べてるの1年の報告や、「幻覚妄想大会」として、こんなおもしろい幻覚や妄想があったということを発表して、いろいろな賞をもらったりして、みんなで楽しんでます。

山中香奈

兵庫県 LD 親の会「たつの子」副代表



私の子どもは5年生の長男と、2年生の次男の二人ですが、二人ともディスレクシアで文章を読むことが困難です。

今回は特に長男についてお話ししてまいります。

発達障害児です。視覚認知にも困難があります。簡単に言うと、視力があって見えているはずなのに、見えていない、認識できていないという状況です。長男の発達に疑問をもったのは5歳のころでした。子供たちが走るように上り下りする、保育所の子供用

の小さな階段をゆっくりと一歩ずつしか降りれないのがどうしてなのか、絵が描けないのはなぜなのか不思議がいっぱいありました。その後、検査を受けることになりました。視覚的に苦手なこととして具体的にあげると、教科書の中で先生が指摘する部分を探して読む。絵の間違いを探す。人ごみの中で知り合いを見つける。探し物を見つける。文字や漢字、図形などを「まとまり」として把握すること、などがあげられます。また、WISC-III検査を受けると年齢と比較すると知識や語彙がやや少なく、ことばの意味で混乱している。文字の読み書きの困難さがあり時間もかかる。線の傾きを正確に捉える事が難しく、そのために、文字の形を正確に再現する事が難しい。短期記憶、特に作業記憶が弱いために、その場で理解し作業を正確にすることが苦手。考えを切り替える事が上手くできず、同じ所で混乱している事がある。など、視覚的なこと以外にも学習する上での困難さがわかってきました。

この絵は長男が療育で使った教材です。言葉のかたまりや線の傾きなどを訓練してきました。小学校の低学年のときは自分の名前も書けない状態でした。書いても鏡文字だったり、さらに回転していたり、どうやったらこんな風に見えるのだろうと思うような字を書いていた。文章を読むときも拾い読みで文節をどこで切るのかも分からず、当然文章内容も分からない状態でした。高学年になっても漢字は2学年下の漢字でも読み書きは不十分で、国語の教科書には常にルビを書き込んでいました。

DAISY との出会い

2007年11月横浜でのLD学会で、長男が低学年の時期に西宮YMCAでお世話になった西岡有香先生との再会がありました。これをきっかけに DAISY コンソーシアムの河村先生をご紹介いただき、2007年の年末よりDAISYの使用を始めました。もともと自宅にデスクトップパソコンがあったのですが、息子の DAISY 用にと新品の黒いノートパソコンが届いたこともあって、息子のテンションはすごく高くなっていました。息子に使い方を教え息子の学習机に置いて、いつでも使える状態にしておきました。2007年の年末のころです。いただいたサンプルに収録されていた「ごんぎつね」は3学期に授業でやること

がわかっていましたので積極的に使うように勧めました。年明けになると、奈良 DAISY さんが息子にあわせてもっと読みやすいように改良してくださったCDが届き、教科書と同じ挿絵と自分のオーダー通りになっている DAISY に喜び、今まで以上に DAISY で「ごんぎつね」を読んでいた。他の物語も読みましたが、この時1ヶ月くらい「ごんぎつね」を読んでいたように思います。それまでの本読みはひらがなだけであっても、すべて拾い読みだったのですが、DAISY で学習した文章はすらすらと読むようになり、文章の理解も進みました。そして、大嫌いだった「国語」が嫌いではなくなったと言うのです。これには驚きました。「ママ、学校で先生が読んでいる所が分るようになったよ」と嬉しそうに報告してくれました。目線がちょっと外れたら、もうどこを読んでいるのか分からなくなる。一度分からなくなるともう元に戻れない。しかも、内容の理解も乏しく、先生の説明も質問もあまり分からない。そんな状態での国語の授業は理解できなかつたと思います。国語嫌いになるのも当然だつたと思います。

ところが DAISY での学習を始めてから目線を外しても、またどこを読んでいるのか探し出せるようになっていきました。このことは私以上に息子が驚いていたようでした。DAISY での学習で特に思うことは、息子が自分で学習する事ができるようになった…ということです。息子は学年相当の漢字が読めないし書けません。小5ですが小3の漢字でもあやふやです。今までは、教科書が新しい単元に入ると漢字に振り仮名を振る作業をしないと行けません。それは、必ず親が指導しないと行けない作業です。振り仮名を振りながら、本を読ませて読み間違いを指摘して一緒に読み進めていく…。とても時間のかかるものでした。ところが、DAISY を始めたらその作業がいらなくなつたのです。これには本当に驚きました。

ディスレクシアの息子が、どうして DAISY を使うとよく分かるのでしょうか。息子の様子を観察してみました。先にお話したように息子には視覚の問題も大きいのですが、どこを読んでいるのか分からなくなるという困難があります。文意を理解しながら読んでいるわけではなく、目の前にある文字を読んで音声にしているだけの本読みですから、行がずれても文字を飛ばしても気がつかない状態です。だから、DAISY は今読んでいるところをハイライト表示してくれるから、常にどこを読んでいるのか分かる。DAISY は自分で読む労力から開放されることで内容理解が容易になる。息子は文字を見て、それを音声化することが特に苦手なので「読む」という作業に労力を使いすぎてしまいます。読み終わっても文章内容はまったく分かっていません。覚えていないという方が適切かもしれません。しかし、マルチメディア DAISY は常にハイライト表示の箇所を読んでくれています。どこを読んでいるのか分からなくなるということはありません。

「国語学習での様子について」 小学校4年生当時担任教諭より

これまで「教科書」を使って「文」を「読む」という活動に不安があり、例えばその都度ふりがながないことや、目の当たりにした文章の多さに戸惑う事も多かったように思われる。4年生2学期の「一つの花」の学習では、家庭学習で事前のふりがな打ちや予習読みを行って授業にのぞんでいた。国語の学習に参加する事についてはそのようなサポートもあったが、読み取りや感想の記入は、ノートやワークシートに2行程度のことが多く、内容も、「〇〇が～～していたね」という具合に、話し言葉の文体での記入が多かった。

家庭で DAISY による学習(予習)を導入後、「ごんぎつね」の授業を開始した。開始前から「いつから始まるの？」と、授業のスタートを気にする姿があった。これまでの国語学習ではなかった事である。本教材では、主人公「ごん」の気持ちに寄り添い、「ごん」になりきって場面ごとに気持ちを読み深めていくことをねらいとしていた。授業ではワークシートの「ごん」の挿絵に「ふきだし」をつける形で、「ごん」の気持ちを出し合っていた。これまでより明らかに意欲的だったのは、その書き込み量と発表回数である。事前の家庭学習で、自信をもって教材にあたれたことによって、周りの児童が参考に出来るような深い読み取りをいくつも発表できた。また、何度も発表することで、自分の意見が周りの児童の意見とつながったり、周りへ広まったりする「発表や意見交換の楽しさ」にも気付くことができたようだ。

個別の学習で自信を得て、それが認められるフィールド(学級)があることで、さらに効果的な歩みになったのではないかと推察される。さらに、ワークシートに書き込んでいった内容も、例えば、「～したときのお父さんの気持ちを、お父さんになりきって書きましょう」と言う発問に対して、「お父さんはかわいそうだったんだね」というように、問いと答えが不一致な事が多かったが、「ごんぎつね」の学習では、「ごん」のこぼれを想像し、書くことができるようになってきた。作品に触れる(読み返す・聞き返す)回数が増えたことが、作品や主人公に感情移入できることにつながったのではないかと考えられる。

この写真は担任の先生が驚いたごんぎつねのワークシートです。見えにくいかもしれませんが、主人公ごんに多くの噴出しが書き込まれています。「ごんぎつね」に関しては予習期間が長かった事と、お話しの内容を気に入った事など、プラスの要素がたくさんあったせいかもしれませんが、物語のあらすじも、主人公の心情理解までもしっかりと理解していたように思います。このようなことは今まではありませんでした。しかも、それは音読にもあらわれており、セリフには抑揚までつくようになっていました。



ここにあげた以外にも色々あるのですが、ある日、息子に「DAISY 使ってどう思った？」と聞いたとき、「僕、DAISY があつたら何でも読めるのにな。な～んでもっと色んな DAISY がないの？」と言われました。私は息子が読みたいと言っていたハリーポッターが借りたくて、点字図書館へ電話をして DAISY が借りれないか聞いてみましたが、そこでは借りる事が出来ませんでした。またある日、「DAISY やってなんか感じる事あった？」と聞いたとき、「僕は国語大嫌いやったけど DAISY あつたらな、先生の言っていることがわかるようになったんやで。先生が質問している事がわかるねん。ほんで、答えられるねん。僕はみんなみたいにはできひんけど、DAISY あつたらできるんやなって思ったわ」私はこのこぼれを聞いたとき、例え学習障害でもディスレクシアでも勉強が嫌いなのではなく、「わかりたい」という気持ちをもって、わかるためのツールさえ見つければ、学習意欲や自己肯定感の向上を促すことができると思いました。

DAISY の学習を始めてしばらくすると、読める漢字が増えてきていることにも気が付きました。漢字に興味をもち、ドライブ中でも看板の文字を読むようになってきている息子を見て、DAISY の効果を

感じました。さらに、去年秋ごろサンプルでいただいた「走れメロス」の DAISY をものすごく気に入り、毎日枕元にパソコンを持ち込んで、寝るまで「走れメロス」を流していました。ある日、学校の図書館から本を借りてきていました。よく見ると「走れメロス」でした。後日、息子に本屋に連れて行かれた主人は、「走れメロス」を買わされていました。息子が本をねだったのはこれが初めてのことでした。息子は本当は本が好きだと実感した一件です。

これは息子を見ていて感じたことですので、一例だと思ってください。DAISY 教科書での学習は物語から始めるのがとても効果的だと思います。教科書には説明文も数多くありますが、そこを飛ばしてでも、子どもが興味を持って文章に惹かれるような教材を優先させ、最初は特にたつぷりと時間をかけて予習として使うほうがいいと思います。まだ学習していない漢字が盛りだくさんな状態であっても、まず聞くことから始めるので漢字が読めなくても構わないのです。この時はまだ音読をするのは早いと思います。音声のスピードに無理に合わせて音読しようとすると、うまく読めないことに気がいってしまって、やっぱりうまくできないと思うってしまうことがあるからです。聞くことをメインに何回か学習していくと、そのうちハイライト表示されている箇所を音声にあわせて目で追えるようになります。DAISY の音声での読みが先に頭に入っているの、未学習の漢字を知らないうちに読んでいくことに気がつきます。

息子を見てみると、漢字が読めるようになってくると音声を消して、画面をみながらハイライト表示を追いかけて自分だけの声で読んでいました。逆に本を開いて音声で教科書を目で追うこともします。DAISY を使う事で自分なりの学習が、親の手を借りなくてもできるようになってきていたのです。この変化には驚きました。今までの姿からは想像もできないことでした。高学年の子どもにはありがたいことで、これはすごいことだと思っています。人それぞれ使用方法はあると思いますが、息子の場合はかなり有効な使用方法だったと思います。ぜひご参考にしていただけたらと思っています。

私の所属している「たつの子」でも二十数名の子に使ってもらいました。DAISY の教科書を提供していただきました日本障害者リハビリテーション協会さまにアンケートにしていると思いますが、数点、ご紹介させていただきます。

高汎性発達障害で ADHD 傾向の小学校 1 年生男児のお母様からです。もともと本は好きであったが、DAISY を通して声を出して読む楽しさを知ったようで音読が大好きになった。宿題の中でも一番に



音読に取り組むようになった。ハイライトが入っていることで集中力が増え、読み飛ばしが少なくなった。視覚と音声で入ってくるので集中して聞くようになり内容の把握も進み、内容の質問に対する回答もスムーズになった。読みがスムーズになり、はっきりと抑揚のある声で読めるようになった。読むことに自信を感じているようだ。読み間違えた箇所を再度音声で確認することで、次から読み間違いが少なくなった。文章をあっという間に覚えてしまうようになった。

アスペルガー障害で LD の小学校 5 年生の男児のお母様からです。本読みの宿題が出たときの使用で週 3 日程度。今までは、テストで文章を読まずにとんちんかんな答えを書いたり、説明に手をつ

けず空白のままだった。少しずつ変化が現れたのが2-3か月前。ほとんど空白のないテストを持って帰ることが多くなった。文章を読んで書いているのがわかるようになった。ここ1か月は算数、国語、社会のテストで80点以上を採ってくる回数が増えた。DAISYを使用することが文章の内容を理解することを手助けしていることは間違いないと感じている。最近、自信がもてるようになったのか宿題をすることをあまりいやがらなくなった。学校の授業も以前よりも集中して聞いているとのこと。

小学校2年生男児のお母様からですが、これはお子さんの声をそのまま書き取っているの、うまく表現できるかわからないのですが、去年の9月24日に使った感想です。

「黄色いところがあるやんか、しゃべるし、読むところがわかるやんか。違うとこ飛ばしちゃう、読むとことばしちゃう、途中でぼっとしてわからなくなっちゃうやんか。だから DAISY のほうがいい」と言っているんですね。方言なのでわかりにくいかもしれませんが、本人は感動して、驚いているような雰囲気です。1月28日には、「初めての時はわからないから、一緒に読んでくれるのがいい。先に DAISY が進み、ストップをかけて自分が読むという方法で使用しているということです。

以上です。ありがとうございました。

わたし しつごしょうかいふく でいじー かつよう
私の失語症回復とDAISYの活用

やまもとよしひさ やまもとないかしょうにか
山本義久@山本内科小児科です。



わたし へいせい ねん がつ か ひだりのうないしゅっけつ
私は平成14年3月9日、左脳内出血（
ひだりひかくしゅっけつ たお ないかい げんざい
左被殻出血）で倒れた内科医です。現在、
みぎかたま ひ しつごしょう のこ じょじょ
右片麻痺、失語症は残りましたが、徐々に
かいぜん ねんはんまえ げんば ふっき
改善しており、2年半前より現場に復帰して
げんざい しゃかいこうけん いっかん つき
おります。現在、社会貢献の一環として、月

いっかいていど こうえんかつどう つづ
一回程度の講演活動を続けています。

こうえんないよう、 わたしじしん りはびりてーしょん きじゅつ やまもとよしひさ
講演内容は、私自身のリハビリテーションを記述した 山本義久、

じんせい だい すてーじ
人生の第2のステージです。

こうえん とき いちぶでいじー つか
講演の時には、一部DAISYを使っています。

こうえんたいしょう、 じゃかんじゃ ちよくせつしつごしょう かんじゃ かが いりょう
講演対象は、患者さん、直接失語症患者さんに関わる医療

じゅうじしゃ いし かんごし ぴーていー えすていー おーていー たいっばん
従事者（医師、看護師、PT、ST、OTなど）、その他一般の

かた
方です。

かんじゃ じょじょ かいぜん
患者さんには あせらず ゆっくり がんばっていけば 徐々に改善して

めっせーじ じぶん こえ はっしん ば はな
いくというメッセージを、自分の声で発信しています。その場で話すと、

しつごしょう かんけい じょちょう じぜん でいじー こえ いれて かんじゃ
失語症の関係で冗長になるので、事前にDAISYに声を入れて、患者

りかい へんしゅう はなし ないよう でいじー
さんに理解しやすくなるように編集しています。話の内容はDAISYで

がめん ひょうじ はな ほんてんひょうじ ばあい
画面に表示し、話しているところを反転表示させます。また場合によつ

る び がめんひょうじ つか はいりょ
て、ルビをふった画面表示を使うなどの配慮をしています。

がぞう もじ おと まるていめでいあ じょうほう ていきょう みみ
画像、文字、音のマルチメディアで情報を提供することにより、耳の

き かた め み かた りかい
聞こえにくい方、目の見にくい方などにも理解しやすくなるようにして

います。

ちやくせつ しつごしょうかんじゃ かか いりょうじゅうじしゃ わたしじしん こえ
直接 失語症患者さんに関わる医療従事者には、私自身の声で

こうえん つう しつごしょうかんじゃ かん りかい ぶか
の講演を通じて、失語症患者さんに関する理解を深めてもらうことが

おも
できていると思います。

いっばん かた けんこう じ こ かんり しょくじ うんどう くすり ほか
一般の方には、健康の自己管理(食事、運動、薬その他)がいかに

じゅうよう のうそっちゅう けいけん ないかい たちば うった
重要かを、脳卒中を経験した内科医の立場で訴えています

す。

わたし でいじー であ こみゅにけーしょんしゅだん かくとく
私にとってDAISYとの出会いはコミュニケーション手段の獲得であると

ーしょんほうほう かくとく
ともに、リハビリテーション方法の獲得でもありました。

みぎき みぎかたまひ わたし てが きーぼーどにゅうりょく ほう
右利きで右片麻痺の私にとって、手書きよりもキーボード入力の方

せいかく ようい
が、正確で、容易です。

か ぶんしょう よ てが コンピゅーたー がめんじょう
書いた文章を読むときも、手書きよりは、コンピューターの画面上の

ほう らく
方が楽です。

しつごしょう わたし まちが れんぞく よ ぶんしょう りょう かぎ
失語症の私にとって、間違えず 連続して 読める文章の量は限

られています。DAISYでは、連続して 読み上げなければ ならない

ぶんしょう なが じゆう ちょうせい わたし しつごしょう かいぜん ていど
文章の長さを、自由に調整できます。私も失語症の改善の程度

に合わせて、連続して読み上げる長さを変えていきました。講演で 良

はんのう え じかい こうえん よ はんのう え
い反応が得られると、次回の講演でさらに 良い反応が得られるように

ぶらっしゅ あっぶ
ブラッシュ アップします。

ぐたいてき れんぞく よ あ なが なが おんせい い
具体的には、連続して 読み上げる 長さを 長くすることと、音声の入

なお うわが ぶくすう ろくおん せんたく
れ直しです。上書きすることも できれば、複数 録音し、選択するとい

ほうほう
う方法もあります。

ろくおん こえ き じぶん こえ うわが
あらかじめ録音した 声を 聞いたあと、そこに自分の声を 上書きする

こともできます。

ほか りはびりてーしょん でいじー しつごしょう かいぜん
他のリハビリテーションも うけていますが、DAISYも 失語症の改善に

きよ かんが
寄与したと 考えます。

でいじー たい きぼう しょうがい りゆう いし けっかく じょうこう
DAISYに対する希望ですが、障害を理由とする医師の 欠格 条項

てっぱい げんざい みみ き め み いし たい
が 撤廃された現在、耳の聞こえにくい、目の見えにくい医師に対する、

いりょうじょうほう でいじー か きぼう
医療情報のDAISY化を希望します。

家庭と通級における、学習障害児に対する「読み」の指導

矢田勝

浜松市立神久呂中学校教諭



1. 家庭における DAISY を使った「読み」の効果的な指導の提案 中学生の事例から

- 1) なぜ、毎日、続けられるのか。それは、それまで分からなかった授業が分かるようになるため。
- 2) 授業が分かるようになると、授業の中でも意欲的に発表できるようになる。
- 3) 授業が分かるようになると、ノート記入もはかどり、ポイントもつかめる。
- 4) 3段階視聴方法（後述の「感想文」参照）に加えて、ポーズを利用した「連れ読み」を試みたい。
- 5) DAISY の「音読」に「表現読み」のお手本となるような読みを入れる。
- 6) 基本は、予習で活用。復習では、2倍速でも可能か。・・「速聴」機能の活用。
- 7) 国語の DAISY 教科書のみであっても、他の教科、読書への汎化につながる。
- 8) 係活動や部活動などに、熱心に取り組む中で、授業中に困ったときに助けてくれる友だちができてきた。授業での意欲的な発表を支える自信が生まれた。教師も周りの生徒も、がんばりを認め合う学級文化の中で、自尊感情が育まれていった。
- 9) DAISY のハイライト部分の手本音読は、視覚・聴覚の短期記憶の弱さを持つ生徒にとって、読みの場所を目と耳から示してくれる。
- 10) WISC の言語性検査の内、聴覚短期記憶を示す部分以外の、下位検査「知識」「類似」「単語」「理解」のすべての項目の粗点が向上している。動作性検査の内、「完成」以外の下位検査では、粗点が、すべての項目で向上、もしくは高得点をとっている。これは DAISY 機能の活用による音読の成果と考えられる。（後述の「数値変動の抜粋」参照）

2. 通級における DAISY を使った「読み」の効果的な指導の提案

- 1) 小さい声でしか、音読できない生徒に、スクリーンを使った拡大文字を、通級教室の後ろに立って小音量の DAISY 音声とともに、大きな声で音読させる。教師はスクリーンの横に立ち、聞こえるか判定し、励ます。
- 2) 意味内容の理解は、音読から。すべての教科の教科書の音読に挑戦させる。読みの正確さと流暢さは、読み障害の2大ポイント。これらをクリアさせるのが音読。音読を担保する補助輪の役割を DAISY が果たしている。音読を十二分にやらせないで、要点や心情の理解を求めるのは本末転倒ではないか。
- 3) 文字音読と文章音読 文字音読は漢字カードで。文章音読は DAISY で助走。
- 4) 音読は、学校では、教師と生徒の連れ読みから。 家庭では親と子どもの連れ読みから。
 - ・ 読みの区切りは、分かち読み 句読点読み 句点読み 段落読みで。
 - ・ 正確で流暢な読みへの接近は、同時処理能力を鍛える。

- 逐語読みでは、目で見ていた文字を声に出して読む。
- 流暢な読みでは、声に出している文字よりも、その先の文字を目で確認し、瞬時にひとまとまりの文章として読む。統語力である。これが育っていったら、文章理解力が備わってくる。

- 5) 1回1ページだけ。10分。毎日の習慣にする。音読を宿題に出し、音読カード(「大きな声でゆっくりと」「句読点に気をつけて」「様子や気持ちが分かるように」という3つのレベルで点検)で褒めて確認。
- 6) 小学校で音読する習慣をつけていき、中学校につなげる。中学校の教師は音読の宿題をほとんど出さないようだ。そこで、中学になるととたんに分からなくなる。音読でつかえたところが、分からないところ。そこを、教師や親がサポートする。
- 7) 正確な読みは、理科、社会、数学の教科書の読みで。論理的な思考力を養う。
- 8) 正確な読みができたなら、表現読みへ。ゆっくりと、声を変えて、登場人物になりきって。
- 9) 1段落の読みの中でも、キーワードを探して、短期記憶の小テストをする。内容理解ができているかが確認できる。通級している多くの生徒が分担してパソコンに向かい、テキスト作りをしている。各教科で試みたい。
- 10) 統語力が弱い生徒には、文節・句点・段落等の境に筋を記入させる。または、まるで囲ませる。
- 11) 音読が繰り返される内に、次第に暗唱ができあがってくる。

3. まとめ 音読文化の再生に向けて

- 1) 音読の軽視は、教科書の軽視。教科書をじっくり読むことで、内容理解が深まる。
- 2) テレビゲームを消して、教科書音読。DAISY教科書音読。
- 3) 読み障害とDAISY教科書は、視力障害と眼鏡のようなもの。
- 4) 読みの改善と書字の改善の関連についても考察を進めていきたい。中学生になって、興味のある歴史の授業のノート取りがうまくなっていった。
- 5) 通級生徒の課題軽減と自尊心の高まりの実例を増やしていき、通常の学級での音読文化を再生させる。通常の学級でもDAISY教科書を活用した試行をやっていきたい。

~~~~~

「本人の2年半のDAISY活用についての感想文」 H21/2/4聞き取り。H21/3/27補充。いずれも本人と母親から聞き取る。

< DAISYを使っただけ、本人の感想文 >

<使用期間> 小5の1学期から開始。国語の小5,小6の教科書の全てと、算数の一部(概数部分のみ)。中1国語の教科書も1学期分は使用。慣れてきたら、他教科を予定していたが、実施せず。

<DAISY作成者> H大学のS先生に作成していただく。

<視聴時期> 家で、夕食後に、毎日15~20分は聞く。主に予習として。なお、その単元での授業が実施されている間は、予習・復習を兼ねて使用。単元テストの前には、復習(テスト勉強)として実施。休日は、3~4時間、聞いていることがある。

<視聴方法> 毎回の視聴方法としては、3段階で行う。最初は、2～3回聞く。次に一緒に読み、最後は、音をだんだん小さくして読む。

<視聴速度> いつも自分が読むスピード（ゆっくり目）。\*遊びで、「ナイチンゲール」のところを、2倍速で聞いてみたが、何回も聞いた後だったので、内容がよくわかった。

<黄色帯（ハイライト部分）の長さ> 最初は短かったが、次第に、長くしてもらう。

<DAISY 活用の結果>

#### <1> 学習内容理解の変化について

分からなかった学習内容が、何回も DAISY を視聴することによって、だんだん分かるようになっていった。10数回視聴し、音読していると、次第に暗唱できてしまっていた。

そこで、学習内容を理解し覚えることができた。学校で、指名されて、個人で音読する時、すらすら読めた。読む場所が不確定なときは、周りの級友がそっと教えてくれた。テストでは、漢字を覚えることが良くなった。テストの中での質問にも、正しく答えることができた（ただし、単元テストの時には、先生が問題文を読んでくださった）。テストの点数も上がってきた。

#### <2> 学習態度の変化について

小3のころ、授業内容が分からないことや、他地域からの子も多くいたので、友達との関係が思わしくなく、10回以上教室を抜け出した。授業中の発表は1回もしなかった。T 小のこたばの教室に通級開始。小4のころ、他地域の子は新設校に移り、近所の子だけの少人数の学級となった。新設された K 小のこたばの教室に通級開始。学級も落ち着きを取り戻し、教室抜け出しは1回に減る。授業中に挙手し発表をはじめ。3学期に通級にて WISC の検査をする。小5、6で、S 先生による国語の DAISY 教科書の供給を受けることになり、授業内容が次第に分かるようになり、授業中の発表数が多くなる。DAISY を使うようになってからは、音読の時間は、少しも嫌ではないようになった。色々と助けてくれる友だちができてきた。

#### <3> 本を読むことが好きになる。

DAISY 使用以前は、本は好きではなかった。ところが、DAISY を使うようになって、本を読むことが好きになった。始めは、マンガの本だったが、徐々に、小説を読むようになった。たとえば、ディズニーアニメの小説版や、少女向けの青い鳥文庫の「若おかみは小学生」など。「本が読めるようになったね」と友だちからも言われて、うれしかった。また「なぜ、うまくなったの」とも聞かれた。教科書を読んでもくれる機械を使うようになってからだと答えた。家に遊びにきた友だちに機械を見せたら、私も使いたいと言っていた。



<DAISY 中断とその影響> 中学1年生になっても、国語の教科書のDAISYを作っていたが、夏休み明けからS先生のご都合もあって、中断となった。その結果、国語の時間に、どこを読んでいるのか、分からなくなってしまった。また、漢字が読めなくなり、音読の時、つかかってしまうことが多くなった。定期テストでも、漢字が読めないのが困った。問題は先生が読んでくださるのだが。

< 本人の、新しいDAISYについてのお願い >

漢字のふりがなは、あるものと、ないものと2通りがあるといいです。(なお、先日、頂いた自動ルビ機能は、とてもありがたいのですが、黄色の帯の幅が広くなり、他の行の文章が一部見えなくなる場所がでてきました。直して頂きたいと思います。)

スピードは、特に英語が速いのでゆっくりできるものをお願いします。

英語は、英文の日本語訳も付けてください。また、1文と1文の読みの間隔を開けていただき、DAISYの発音の真似ができる時間の確保ができる部分も作ってくださるとありがたいです。(これも、作っていただきました。ありがとうございます。でも、本人としては、どうしても一緒に読むやりかたが馴染んでいるので、つい、一緒に読んでしまいます。)

数学は、問題の解き方もわかるような説明文もDAISYでお願いします。ただし、算数の基礎が出来ていないので、小学校の九九のところからの教科書が欲しいと思います。

「本人が京都の2月7日の会議に参加したときの感想文」

京都では、とてもお世話になりました。ありがとうございました。

(1) Rさんのお話をうかがって思ったことは、私の感じていたことと、よく似ていると思いました。

たとえば、

デージーがないと本読みをしたくなかったこと。

デージーを使っていたら、国語の学習内容がよくわかるようになったこと。

授業で、先生や友達を読んでいる所がわかるようになったこと。

本が読めるようになり、本が好きになりました。

(2) マイ・リンちゃんのお話をうかがって思ったことは、

教科書を、パソコンの横に置いてデージーをやっているのを見て、驚いたことです。

というのは、私には、同時に2つのことはできないからです。また、マイ・リンちゃんからのメッセージを聞いて私も頑張ろうと思いました。

(3) その日の夜、懇親会で楽しかったことは、

子どもたち、みんなで集ってお話しをしたことです。好きな音楽のことや、曲当てクイズをやりました。

最後に、京都で、いろいろな方にお目にかかって、楽しかったことだけでなく、同じように頑張っている仲間を見て私も頑張りたいと思いました。また、来年も会いたいと思いました。

平成21年3月4日

~~~~~

「本人の心理検査 WISC 下位検査から見える DAISY 使用期間前後における数値変動の抜粋」

下位検査の数値[テスト相当年齢]の推移(DAISY 使用直前の小4と、2年間使用した後の中1で実施。)

言語性検査

- ・「知識」(2年分上昇)。・・・基礎知識の充実。教科学習内容を長期記憶として確保。
- ・「類似」(2年4月分上昇)。・・・共通点を言葉で述べる力の向上。

- ・「単語」(4年8月分上昇)。・・・別の言葉で言い換える力の向上。
- ・「理解」(4年分上昇)。・・・社会常識を言葉で述べる力の向上。

@「算数」「数唱」は、共に伸び悩んでいる。・・・いずれも聴覚短期記憶が伸び悩んでいる。
人の話を聞いても覚えておく力が弱い。

動作性検査

- ・「符号」(4年分上昇)。・・・視覚短期記憶能力は弱いだが、かなり伸びている。
- ・「配列」(同一)。・・・咄嗟の判断力は高2水準を確保。
- ・「積木」(2年分上昇)。・・・手本をみて図を学ぶ力は弱い伸びている。
- ・「組合せ」(3年8月分上昇)。・・・手本なしでも絵を組み立てる力は強くなっている。
- ・「記号」(8月分上昇)。・・・視覚短期記憶能力は弱い伸びている。
- ・「迷路」(3年分上昇)。・・・図で先を見通す力は弱い伸びている。

@「完成」は、伸び悩んでいる。・・・注意深く見みる力は伸び悩んでいる。